

群馬県佐波郡東村

三室坊主林遺跡

MI MURO BOU ZU BAYASHI

一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1989

建設省
群馬県教育委員会
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

資料	財群馬県埋蔵文化財	01-330
	調査事業所保管	13
No. ⁹⁸⁻ 4907	平成10年 5月13日	(7)

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第90集

群馬県佐波郡東村

三室坊主林遺跡

MI MURO BOU ZU BAYASHI

一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1989

建設省
群馬県教育委員会
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団



遺跡を南から望む



縄文時代の遺物群



大量に出土した三角錐形石器



縄文時代草創期の土器



中・近世の陶磁器 (表面)



(裏面)

序

国道17号線の混雑緩和のため、昭和41年上武道路が建設されることになりました。埼玉県深谷市から利根川を渡り群馬県尾高町へ、さらに赤城南面を北西に進み前橋北部に達する大規模バイパスであります。この計画に伴い、埋蔵文化財の緊急発掘調査が実施されました。

発掘調査は昭和49年から行われ、昭和62年度をもって国道50号まで多くの成果を上げることができました。また、道路建設も着々と進み、既に国道354号から50号までが開通し、混雑の解消に大きな役割を果たしています。

本遺跡の発掘調査は昭和57年度に実施されました。道路予定地内のみ範囲であるため全体の把握はできませんでしたが、縄文時代をはじめとして大きな成果をあげることができました。

遺跡は大間々扇状地の湧水地帯にあり、台地と沖積地が入り組んだ地域です。沖積地は古墳時代以降の水田が開発された地域であり、台地部は縄文時代から集落が営まれた場所です。周辺も含めて一連の発掘調査により、当地域にも古代の人々の生活跡が埋没していることがわかりました。

調査実施にあたり、多大なる御援助を賜りました建設省高崎工事事務所、群馬県教育委員会文化財保護課関係各位に厚く感謝申し上げます。

おわりに、発掘調査並びに整理を担当された職員、作業員、補助員の労をねぎらうとともに、本報告書が群馬の古代社会解明の資料として県民、斯界の方々により活用されることを期して序文といたします。

平成元年3月31日

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 清水 一郎

例 言

1. この報告書は、一般国道17号(上武道路)改築工事に先行して行なわれた三室坊主林遺跡の発掘調査の記録である。この遺跡は事業名称を「J K14 三室B遺跡」として呼称していたが、その後遺跡名の適性化が図られ、遺跡所在地の大字・小字名を併記する方法をとることになった。その結果、本遺跡については、「三室坊主林遺跡」という名称に変更している。
2. 三室坊主林遺跡は、群馬県佐波郡東村東小保方に所在するが、現状は上武道路となっている。
3. 上武道路は建設省関東地方建設局が事業主体であり、これに伴う発掘調査および整理については(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施している。
4. 調査体制および期間は次のとおりである。

〈発掘調査〉 調査研究第2課長 長谷部達雄

調査担当 石塚久則、大木紳一郎、坂井 隆

調査期間 1982年4月1日～同年6月8日

〈整理作業〉 調査研究第2課長 桜場一寿

整理担当 原 雅信

遺物実測・図版作成 青木静江、金子吉江、中沢久子

およびレイアウト 大川明子、長谷川春美

遺物整理・図面整理 浅井良子、大友美代子、尾田正子、小淵トモ子、笠井初子、串淵すみ江、関口貴子、高橋初美、田中晚美、土田三代子、田村紀子、新平美津子、萩原由美子、蜂巣綾子、馬場信子、藤井輝子、増田政子

遺物写真撮影 佐藤元彦

5. 石器実測図のトレースは、部分的に(株)測研に業務委託している。
6. 石器石材の鑑定は、飯島静男氏(群馬地質研究会)に依頼している。
7. この報告書を作成するに際しては、次の方々に指導、助言を受けている。改めて感謝の意を表したい。永嶋正春氏、西川博孝氏、鹿田雄三氏、前原豊氏、若月省吾氏
8. 遺構名称は発掘調査時のものを使用しているが、整理作業の過程で適切でない判断されたものについては変更している。遺物については今後の資料活用、研究に資するためなるべく多く図化し掲載に努めた。石器類については図化し得なかった分を写真、計測表をもって表示した。全体図に示す方位は座標北となっている。報告書の記述は、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ-1を原、Ⅲ-2・3を坂井が各々分担している。
9. 実測図中のスクリーントーンはそれぞれに凡例を示したが、その他については次のことを表示している。



目 次

序 例 言

I 発掘調査の経過

1 調査までの経過	1
2 遺跡の位置	2
3 調査の方法	4
4 調査の経過	5

II 発掘調査の成果

1 遺跡の内容	6
2 土 層	7
3 縄文時代の遺物	10
a 土 器	10
b 石 器	17
c 分 布	42
4 古墳時代の住居と遺物	47
5 中世居館と近世屋敷群	50
6 胸形製品・三角形製品・玉状製品	54

III 調査のまとめ

1 縄文時代	55
2 古墳時代・古代	62
3 中世・近世	64
4 整理作業の経過	68

挿 図 目 次

第1図	遺跡周辺の地形	2
第2図	遺跡の位置	3
第3図	調査の区域	4
第4図	各時代の三室塚主林遺跡	6
第5図	土層図	7
第6図	三室坊主林遺跡全体図	8
第7図	第Ⅰ群土器	10
第8図	第Ⅱ群土器	11
第9図	第Ⅲ群土器	13
第10図	第Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ群土器	15
第11図	器種構成と石材グラフ	18
第12図	器種別石材	20
第13図	石 皿	21
第14図	石 皿・石 椀・石 匙・ピエスエスキュー	22
第15図	打製石斧・打製礮斧	23
第16図	磨製礮斧・磨製石斧・片刃石器・磨器・石核	24
第17図	削 器	25
第18図	削 器	26
第19図	削 器	27
第20図	三角錐形石器	28
第21図	三角錐形石器	29
第22図	三角錐形石器	30
第23図	三角錐形石器	31
第24図	スタンプ形石器	32
第25図	スタンプ形石器	33
第26図	スタンプ形石器・巖石	34
第27図	加工痕ある剥片・使用痕ある剥片・接合資料	35
第28図	接合資料・凹石・巖石・磨石	36
第29図	磨石・石皿・砥石	37
第30図	土器分布図	42
第31図	石皿分布図	42
第32図	打製石斧・打製礮斧・磨製石斧・磨製礮斧分布図	43
第33図	削器分布図	43
第34図	三角錐形石器分布図	44
第35図	スタンプ形石器分布図	44
第36図	石皿・凹石・磨石・巖石分布図	45
第37図	剥片分布図	45
第38図	石器の接合関係	46
第39図	遺構に伴わない遺物	47
第40図	塚域遺構	47
第41図	古墳時代の遺構	47
第42図	1号住居と出土遺物	48
第43図	2号住居と出土遺物	49
第44図	中世居館出土遺物	50
第45図	中世居館と近世屋敷跡群	50
第46図	近世居館出土遺物	51
第47図	中世居館内郭堀大図	51
第48図	南側低地(Ⅰ・Ⅱ区)溝群と出土遺物	52
第49図	北側低地(Ⅲ・Ⅳ区)溝群	53
第50図	駒形・三角形・玉状製品分布図	54
第51図	駒形・三角形・玉状製品	54
第52図	石器法量相関図	60
第53図	石器法量相関図	61
第54図	古墳時代・古代の三室地域	63
第55図	三室地域の地勢図	64
第56図	中世の三室地域	65
第57図	近世の三室地域	66

写 真 目 次

P L 1	Ⅰ区を南から望む、Ⅱ区を北から望む
P L 2	Ⅲ区縄文時代の遺物群、中世の土坑群
P L 3	Ⅳ区を南から望む、Ⅳ区を北から望む
P L 4	第Ⅱ群土器、第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ群土器
P L 5	石皿・石椀・石匙・ピエスエスキュー
P L 6	打製石斧・打製礮斧・磨製石斧・磨製礮斧 片刃石器・磨器・石核
P L 7	削 器
P L 8	削器・三角錐形石器
P L 9	三角錐形石器
P L 10	三角錐形石器・スタンプ形石器
P L 11	スタンプ形石器
P L 12	スタンプ形石器・巖石・加工痕ある剥片・使用痕ある剥片
P L 13	使用痕ある剥片・接合資料・凹石・巖石・磨石・石皿・磨石
P L 14	打製石斧・磨製礮斧・片刃石器・磨器・石核・削器
P L 15	削 器
P L 16	削 器
P L 17	三角錐形石器
P L 18	三角錐形石器・スタンプ形石器
P L 19	スタンプ形石器・加工痕ある剥片
P L 20	加工痕ある剥片・使用痕ある剥片・接合資料・凹石・巖石・石皿・磨石
P L 21	磨石・石皿・砥石
P L 22	1号住居と出土遺物
P L 23	2号住居と出土遺物
P L 24	伊状遺構・中央の炉、中・近世の遺物類
P L 25	Ⅳ区道路状遺構と1号住居、Ⅳ区1号溝
P L 26	Ⅲ区1号溝土層A、Ⅲ区1号溝土層B、Ⅲ区1号溝土層C、Ⅲ区1号溝土層D、Ⅲ区2号溝土層、1号井戸、2号井戸
P L 27	Ⅲ区調査状況、駒形・三角形・玉状製品
P L 28	59F グリッド土層断面、607C グリッド土層断面

三室坊主林遺跡

I 発掘調査の経過

1. 調査までの経過

昭和46年に建設省は、上武道路（国道17号バイパス）の建設計画を発表した。計画路線は、埼玉県熊谷市で国道17号と分岐させ、利根川に架橋し、群馬県新田郡尾島町・新田町・佐波郡境町・東村・赤堀町・伊勢崎市・前橋市・勢多郡富士見村・北橋村から渋川市に至るものであった。この計画に従い、文化財保護と開発諸事業の調整をはかることを目的に、群馬県教育委員会は予定路線地域の埋蔵文化財の分布調査を昭和46年度に実施している^{※1}。分布調査は『群馬県遺跡台帳』^{※2}を基礎資料とし、計画路線を中心に幅2kmの区域を対象とするものであった。調査は昭和45年5月から昭和46年3月にかけて実施され、遺跡総数は472ヶ所となっている。その後、県教育委員会と建設省の間でこれら埋蔵文化財のとりあつかいについて協議が行なわれ、昭和46年11月に通過路線の正式発表がなされている。

さらに、昭和48年4月には「一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定書」が、建設省と県教育委員会の間で締結され、新田郡尾島町から前橋市二之宮町（神沢川）までの埋蔵文化財の発掘調査が実施されることになった。調査体制の確保、用地問題の解決など、準備段階を経て具体的に発掘調査に着手したのは昭和49年1月以降となっている。

昭和53年には、増大する埋蔵文化財の調査・整理および資料管理・活用などに対するため、県教育委員会の埋蔵文化財の調査部門としての機能を果たすべく「群馬県埋蔵文化財調査事業団」が設立され、同年以降上武道路に伴う調査も本事業団が実施することとなり現在に至っている。その間、調査体制の拡充・工事計画の進捗など継続的な調査が進められ、昭和63年には前橋市飯土井町の国道50号までの発掘調査が完了し、平成元年3月3日には、尾島町の国道354号線から国道50号線までが供用開始となっている。

佐波郡東村内では上武道路はほぼ南北に通過し、昭和43年度の分布調査では予定路線周辺で24ヶ所の遺物包蔵地および古墳・館跡などが確認されている。路線確定後の発掘調査では、古代の集落を中心とする八寸大道上遺跡（事業名称は八寸A遺跡）、縄文時代早期の遺物を大量に出土する三室坊主林遺跡（三室B遺跡）古墳時代の集落三室間ノ谷遺跡（三室A遺跡）の三遺跡が対象となっている。

今回報告する三室坊主林遺跡は、昭和43年度の分布調査の際、古墳時代の包蔵地、道上遺跡として記録されていたもので、当初の調査対象範囲は台地中央部の約5,440㎡であった。その後、周辺開発に伴う発掘調査が行なわれ、古墳時代集落の伊勢崎・東流通団地遺跡^{※3}、鬼ヶ島遺跡^{※4}などが検出されるに至った。これらの遺跡と上武道路建設地域は、県道伊勢崎・足利線と県道伊勢崎・桐生線の間において同一台地上に接していることから当初の調査対象範囲外にも遺構の存在が予想されるものとなった。そのため、県道伊勢崎・足利線から村道までの25,655㎡についてはほぼ全面にわたり表土掘削を行い、この部分から県道伊勢崎・桐生線までの間についてはトレンチによる試掘調査を実施することとなった。なお、調査にあたっては、調査区内を村道などの現有道路により便宜的にⅠ区～Ⅵ区に区分して実施した。この区分は整理・報告に至るまで引きつづき使用している。なお、当初の調査対象は、このうちⅣ区の南半部にあたる部分であった。

※1 『上武国道地域埋蔵文化財分布調査報告書』 群馬県教育委員会 昭和46年

※2 『群馬県遺跡台帳Ⅰ（東毛編）』 群馬県教育委員会 昭和46年

※3 『伊勢崎・東流通団地遺跡』 群馬県企業局 昭和57年

※4 『佐波郡東村鬼ヶ島遺跡』 佐波郡東村教育委員会 昭和54年

I 発掘調査の経過

2. 遺跡の位置

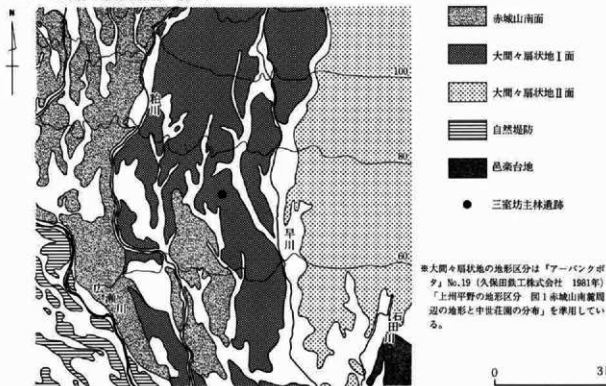
佐波郡東村は、東に新田郡、西に伊勢崎市、北は赤堀町、南を埴町に接し、面積は18.2km²と県内市町村の中でも小さい村域となっている。標高は110mから60mの間にほぼおさまり、東西約3km、南北約6kmと南北に長い区画をもっている。村の北西側にはJR両毛線が横切り、これと平行するように県道伊勢崎・桐生線が村の中央付近を貫通している。また、村の中央部には早川が南流し、その東側には寛文年間(1701)に新田郡笠懸代官岡登治郎兵衛景能が開削した岡登用水が縦断する。東村は、乏水性台地である扇状地上に位置する関係から、河川および用水を含めその水利については長い苦闘の歴史をもっている。また、年間降水量をみても少ない区域に入り、特に1月期の低い降水量については日本における最少降水量地域に含まれている。

東村は、その村域を大間々扇状地においている。大間々扇状地は、かつての渡良瀬川が形成した扇状地で形成期によりⅠ面およびⅡ面に地形区分されている。Ⅰ面は、古期扇状地面で、湯ノ口軽石層以上の中部ローム層を堆積する。また、この面には樹枝状の侵食谷が入り組んでおり、その谷頭には湧水がある。Ⅱ面は新时期面で上部ローム層を堆積する。扇頂は大間々町にもち、南へ向って開く典型的な扇形を示し、侵食谷はあまり発達せず扇端部に限られている。東村は、西半側がⅠ面・東側がⅡ面と両面にまたがる。村内の遺跡分布をみると、樹枝状侵食谷の発達する扇状地Ⅰ面にあたる西半部に集中する傾向がみられる。

三室坊主林遺跡は、扇状地Ⅰ面にあたる東村東小保方三室地内に所在し、東を西小保方沼から流下する沖積地に、西を尾ヶ池から流下する沖積地にはさまれた台地中央付近に立地する。標高は約62mから72mの間にあたるが、縄文時代をはじめとする遺物、遺構などが集中するのは概ね標高70m付近となっている。

現状は、上武道路建設のためすでに調査区域は失なわれているが、道路の距離程No.587からNo.659間が調査部分にあたる。なお、調査の結果からみれば距離程No.612からNo.617間に検出された縄文時代包含層および方形区画溝はさらに東側へ広がることから、遺跡のおよそ半分はそこに残っているものといえよう。

※1 「東村誌」東村誌編纂委員会 昭和54年



第1図 遺跡周辺の地形

※大間々扇状地の地形区分は「アーバンポタ」No.19 (久保田鉄工株式会社 1981年)「上州平野の地形区分 図1 赤城山南麓周辺の地形と中世在野の分布」を準用している。



第2図 遺跡の位置

0 1 : 20000 10000 m

群馬 1 : 200000 地勢図

I 発掘調査の経過

3. 調査の方法

遺跡は県道伊勢崎・足利線と県道伊勢崎・桐生線の間が存在し、延長約1km、対象面積は30,613㎡におよぶ。調査区域は、現道を利用しⅠ区～Ⅵ区に分割、設定した。調査区の設定は便宜的なものであるが、調査から整理にいたるまで一貫して使用している。調査区域内には、低地部（Ⅰ区・Ⅱ区南半）と台地部（Ⅱ区北半・Ⅲ区～Ⅵ区）が含まれる。当初の調査対象範囲はⅣ区南半部であったが、調査までの経緯に示したような事情からⅠ区～Ⅵ区まで全般にわたり調査を実施することになった。その中で、当初からの対象範囲であったⅣ区を含め、遺構の存在が確認されたⅠ区～Ⅳ区までについては、本調査に着手するものとし、Ⅴ区・Ⅵ区についてはまず試掘調査を行い、その内容を検討するものとした。

Ⅴ区・Ⅵ区の試掘調査は幅3mのトレンチを路線に沿って2本設定し行なった。その結果、Ⅴ区の一部、645.5Fグリッドにおいて土師器片を少量確認したほか遺構については検出されなかった。この土師器片を出土した部分についてはさらに拡張・調査したが、やはり遺構は認められていない。このことから、Ⅴ区・Ⅵ区は試掘トレンチによる調査のみで終了し、全面調査にはいたっていない。

Ⅰ区からⅣ区については、調査区全般にわたり表土掘削を行うものとした。表土掘削はバックホー（バケット容量0.7m³）を使用しており、その後遺物および遺構検出作業を行なっている。

発掘調査にあたり、基本的に次のようなことをその方針としている。

- ① グリッドの設定は、上武道路センター杭（距離程）延長線を基線とし方眼を組むこととする。基線とした南北軸は距離程ナンバーを使用し、東西軸はアルファベットを東から西にA・B・C……と付している。グリッドの大きさは10×7mとし、名称は南東隅の杭を基点とする。なお、調査対象範囲であるⅠ区～Ⅵ区は距離程ナンバー587から659にあたっている。
- ② 実測図は縮尺20分の1とし、グリッド単位の割図を基本とし、平板実測とする。すなわち、セクションナンバー1枚に1グリッドの記録をとることになる。
- ③ 遺物はドットマップを作成し、標高を記録し取り上げる。これは遺構内、遺構外とも実行する。
- ④ 写真記録は調査担当である石塚久則、大木紳一郎、坂井隆が随時撮影するもので、使用カメラはモノクロをマミヤプレス（6×9版）と35ミリ1眼レフ、リバーサルを35ミリ1眼レフの3台である。高所撮影についてはローリングタワーを利用している。



第3図 調査の区域（伊勢崎市現況図）

4. 調査の経過

発掘調査は1982年4月1日から6月8日まで行っている。調査担当は、石塚久則、大木紳一郎が当初からあたり、その後坂井隆が加わり実施している。経過は調査日誌に記録されているが、ここではその概要を次表にまとめ、経過、動向を示しておきたい。

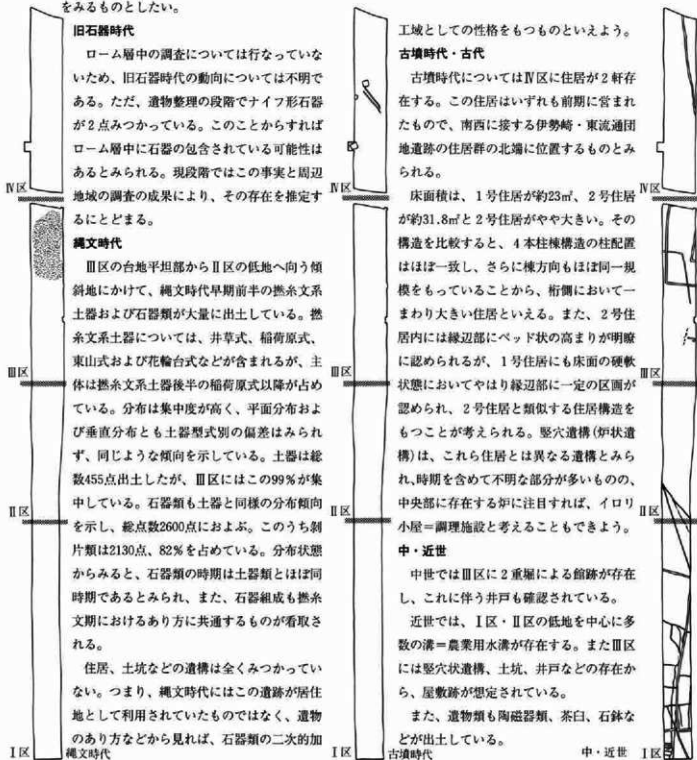
区 月	I	II	III	IV	V	VI
4	発掘調査作業工程表					
	表土削除					
5	遺構調査	表土削除 遺構調査	遺構調査	遺構調査	トレンチ調査	トレンチ調査
6			埋め戻し			

II 発掘調査の成果

II 発掘調査の成果

1. 遺跡の内容

今回の調査によって得られた資料およびその内容について述べていきたい。まず遺構であるが、量的には少ないものの、古墳時代住居2軒および堅穴遺構のほか、中・近世の館跡、屋敷、土坑、溝などが明らかにされた。また、遺物についてもこれらの遺構に伴う土器、陶磁器類に加え、大量の縄文時代の土器・石器類を得ている。遺構、遺物については3・4・5・6に報告する通りであるが、ここでは時代毎に遺跡の概要をみるものとした。

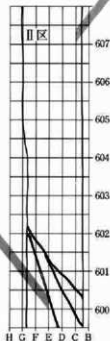
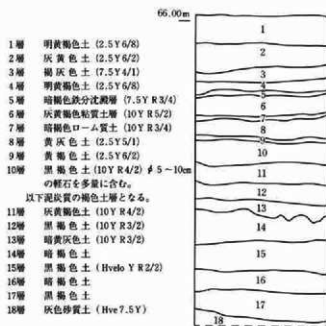
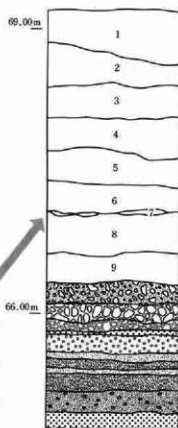


2. 土層

遺跡は、大間々扇状地上に立地する。大間々扇状地は、古期形成面であるⅠ面と、新时期形成面であるⅡ面により構成される。Ⅰ面は5000年前に形成され、湯之口軽石層以上の中部および上部ローム層をのせ、樹枝状の谷地形が発達している。Ⅱ面は13000年前の形成とみられ、上部ローム層をのせ、典型的な扇状地地形を示している。三室坊主林遺跡は扇状地Ⅰ面にあり、尼ヶ池から流下する沖積地左岸に位置している。

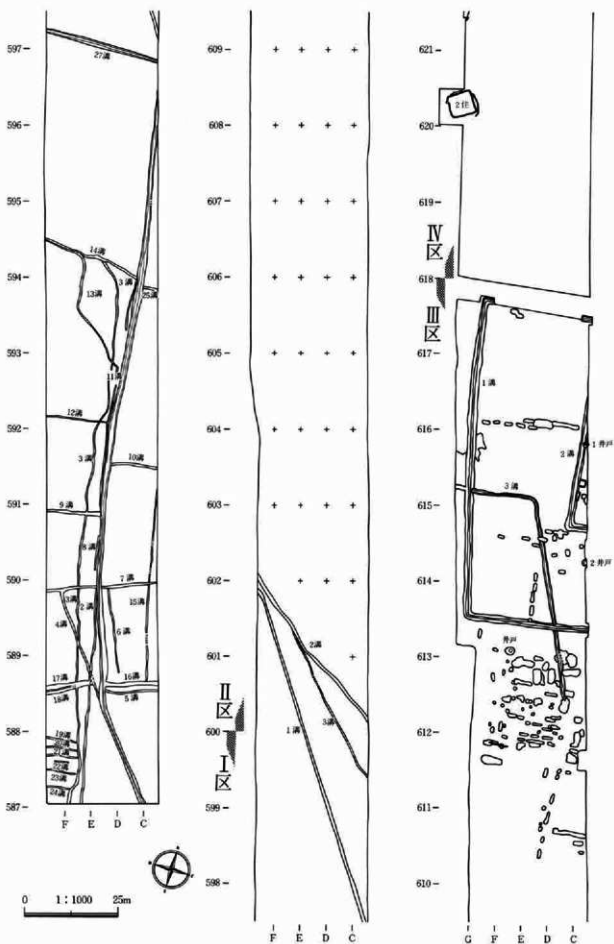
土層は下に示すとおりである。600-Eグリッドは低地部にあたり、607-Cグリッドは台地部となっている。台地部の土層をみると、4層が暗色帯(B・B)に相当し、その上層が上部ローム層となり、下層が中部ローム層にあたる。また7層にはやや不安定ながら、層厚5cm前後の軽石層が存在するが、この軽石層は八崎軽石層(H・P)に相当するものとみられる。中部ローム層下は礫層と砂層の互層となり、以下層厚20m以上におよぶ扇状地礫層が堆積している。

1層	黄褐色土 (10Y R5/8)	砂粒を混入するとともに、ロームブロックもみられる。漸移層。
2層	明褐色土 (10Y R6/8)	砂粒および黄色軽石を含むローム層。
3層	黄褐色土 (10Y R5/6)	土粒は緻密で、やや硬い。
4層	暗褐色土 (10Y R3/3)	土粒は緻密、粘性強いローム層。
5層	褐色土 (7.5Y R4/4)	土粒は緻密、粘性強いローム層。
6層	黄褐色土 (10Y R5/6)	土粒は緻密、粘性強いローム層。φ5~10mmの黄色軽石を含む。
7層	淡黄色土 (2.5Y R8/4)	φ5~10mmの軽石層。
8層	黄褐色土 (10Y R5/8)	土粒は緻密で、硬く粘性強い。φ5~10mmの小礫を混入する。
9層	黄褐色土 (10Y R5/6)	土粒は緻密で、硬く粘性強い。φ10mm前後の小礫を混入する。
10層	黄褐色土 (10Y R5/8)	土粒は緻密で、粘性強い。φ10~15mmの円礫を混入する。
11層	灰オリーブ色土 (5Y 5/3)	砂粒層中にφ1~10cmの円礫が混入する。
12層	青黒色土 (5BG2/1)	砂粒層中にφ1~10cmの円礫が混入する。
13層	明褐色土 (10Y R6/8)	砂粒とφ5~15mmの明黄褐色軽石が混在する。
14層	灰色土 (10Y G/1)	粒子の細かい、しまり乏しい砂粒層。
15層	青灰色土 (10BG5/1)	粒子やや粗い、しまりの良い硬い砂粒層。
16層	灰色土 (10Y 5/1)	粒子の細かい、しまり乏しい砂粒層。
17層	青灰色土 (5BG5/1)	粒子粗く、硬くしまった砂粒層。
18層	灰色土 (10Y 5/1)	粒子細く、しまりの乏しい砂粒層。
19層	灰色土 (10Y 5/1)	砂粒層中にφ1~10cmの円礫を混入する。
20層	淡黄色土 (2.5Y 8/4)	φ5~10mmの軽石層。



第5図 土層図

1m 1:20



第6图 三室坊主林遺跡全体図

633 - + + + + +

632 - + + + + +

631 - + + + + +

630 - + + + + +

629 - + + + + +

628 - + + + + +

627 -

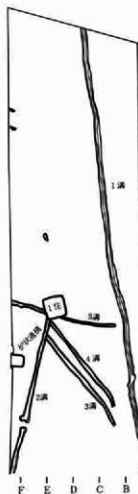
626 -

625 -

624 -

623 -

622 -



645 -

644 -

643 -

642 -

641 -

640 -

639 -

638 -

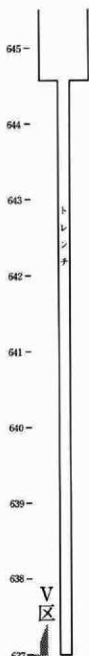
637 -

636 -

635 -

634 -

I G F E D C B



657 -

656 -

655 -

654 -

653 -

652 -

651 -

650 -

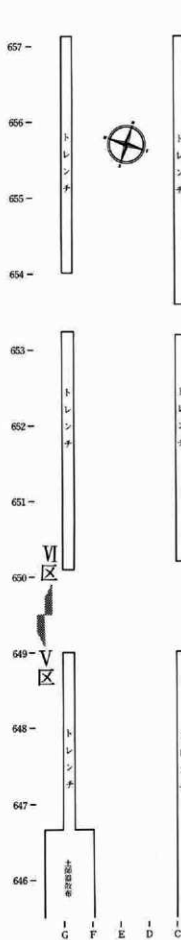
649 -

648 -

647 -

646 -

I G F E D C



II 発掘調査の成果

3. 縄文時代の遺物

a 土器

第I群土器 (第7図1・2)

草創期前半に属する土器片が2点出土している。両者とも小片であるものの特徴的な整形、縄文施文手法が認められる。1は口縁部片である。口縁部は肉厚となりやや丸みを帯び、口唇部は外側がそがれたような形で尖りぎみとなる。器面には縄文が施されるが、施文は口唇部にまで及んでいる。原体は未復原である。胎土は緻密であり、白色鉱物粒、石英粒などを含む。内面の整形も良好であり指頭痕状のわずかな凹凸が観察されるもの、光沢をもつほど平滑になっている。2は胴部片である。縄文施文は押圧手法によるもので原体はR LおよびL Rの2種類が用いられるようである。ただ、R Lについては一部のみの観察であるため誤認の可能性もある。縄文は蕨手状の圧痕が横位に連続して加えられるが、一部がより深い圧痕となるのが特徴的である。一見すると環状縄文、LOOPに類似するが、この種の縄文が回転手法を意識したものと考えれば、2にみられるように押圧手法を用いている場合、その可能性は少ない。また、環状圧痕下部がより深い圧痕となっていることも考えると、close-endの押圧の可能性が高いとみられる。特に深い圧痕部は、撚り合わせた条のうち、圧痕の際曲折し、上に重なった条が表出されたものと考えられる。観察される1回の圧痕の長さは8ミリ程度である。胎土は緻密であり、器厚は薄手で堅緻な焼成である。内面にはやはり指頭状の圧痕が認められるが、整形は良好である。



第7図 第I群土器

第II群土器 (第8図3~55、第9図56~101、第10図102~136)

早期前半晩糸文系土器群に属するものを本群とする。この遺跡から出土した縄文土器の中心的存在であり、総点数317点、全体の約70%を占める。いずれも破片であり、完形もしくは器形の復原できるような個体はみられない。型式的には複数の時期のものが含まれるが、調査時には層位差をもたず検出されている。以下、部位、文様を中心に類別するものとした。

第1類 (3)

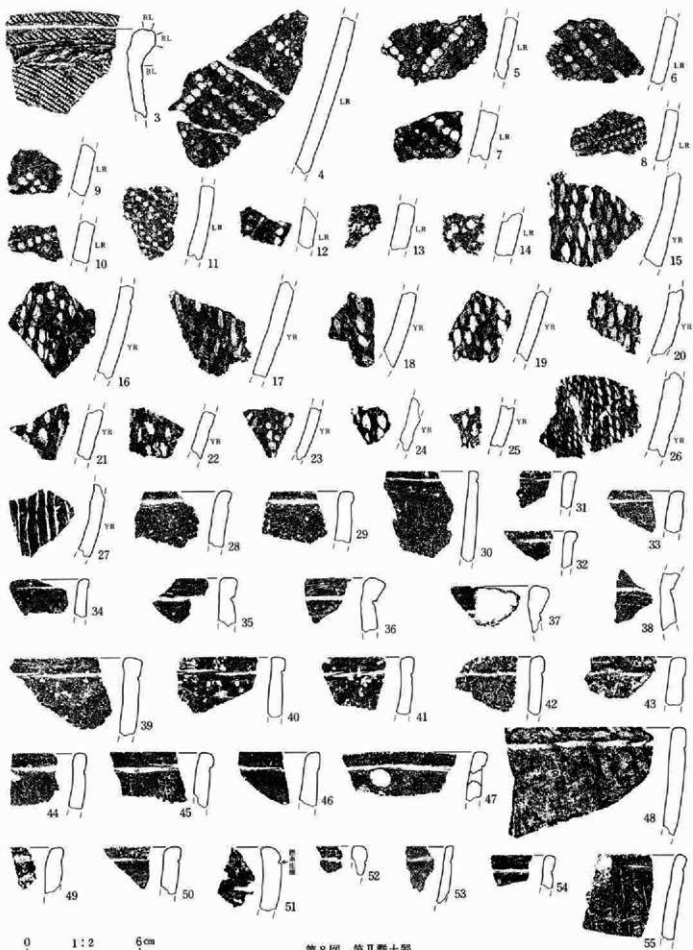
外反ぎみに開く口縁部形態をもち、口唇部文様帯・口縁部文様帯および胴部文様帯がそれぞれ縄文により構成される。口唇部文様帯・口縁部文様帯・胴部文様帯ともR L横位が施文される。頸部には縄文は施されず無文帯となるが、指頭(親指)による圧痕が加えられる。この指頭圧痕は、口縁部を上にして正面においた場合、左から右へ移動していることから右手親指による指痕とみられる。さらに爪の痕跡も明瞭に残されている。なお、整形時の器面の調整は良好である。

第2類 (4~27)

縄文もしくは晩糸文の施される胴部片を一括する。次の3種が含まれる。

a種 (4~14)

縄文の施されるもの。節が粗大で、条間隔が広く特徴的な縄文である。原体はL Rが用いられ、縦位・横



第8图 第II群土器

II 発掘調査の成果

位の交互施文により羽状構成としている。節の状態からみると、原体は直径15ミリ以上と太く、さらに施文もやや密いため、条間隔の広い施文効果が得られたものといえよう。器内面は平滑なもの、ややザラつくものなどがあるが、表面はいずれも調整が良好で平滑となっている。

b種 (15~25)

燃糸文の施されるもの。節は長大で長軸1cm前後を測り、形状は楕円形を呈する。原体は単輪絡条体第1類で、用いられる繊維束はかなり太く、条は1段Rが巻かれる。表出される節の形状からみて条が軸に巻かれる際燃りが戻る方向に、つまりRの縄であれば時計廻りに巻かれたものとみられる。逆に、Rの縄を通常燃りの強まる逆時計廻りに巻きつける場合でも、燃りを戻しながら巻きつければ前者と同様の施文効果が得られることになるが、原体製作過程からみるとやはり時計廻りに巻きつける方が自然であろう。

c種 (26・27)

a種・b種に比べより細い縄が巻かれる絡条体である。単輪絡条体第1類が用いられ、縄は1段Rである。26は条が密接し、27は間隔がややあいている。

第3類 (28~66)

口縁部に沈線を一条巡らせるものを第3類とする。すべて破片であるため器形は復元できないが、ここに含まれる口縁部はいずれも水平口縁をなすものとみられる。なお、沈線は口縁に沿って横位に加えられ、その位置には次のA・B・Cの3種が認められる。

A-沈線が口縁下5mm以内に加えられるもの

B-沈線が口縁下1cm程度の位置に加えられるもの

C-沈線が口縁下3cm前後の位置に加えられるもの

さらに、口唇部形態には、口唇部上端に平坦面をもつ角頭型と、丸みをもつ丸頭型が認められ、この口唇部形態と沈線の加えられる位置について観察すると、次の5種に分類できる。

a種 (28~34)

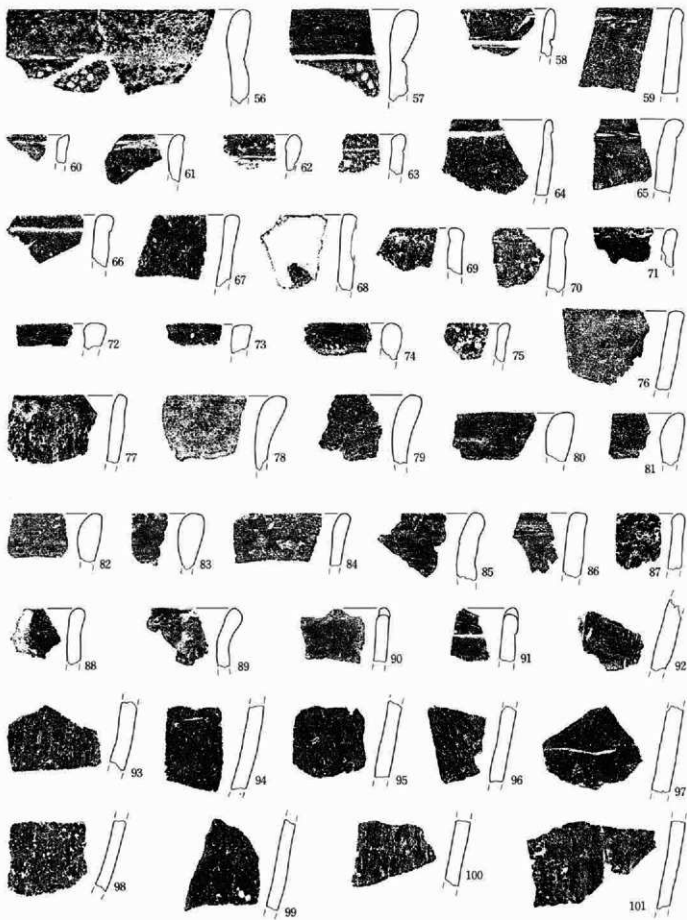
口唇部形態は角頭型を示し、沈線の位置は口縁近くに巡るAにあたる。沈線には継点が認められ、数回にわたり施文を完了したものとみられる。30では継点間が約1.5cmと短く、施文方向は土器からみて左から右へ移動している。なお、継点は28・31・32・33・34に観察される。沈線は竹ヒゴ状の細く丸みをもつ施文具により加えられる。

b種 (35~50・52~55・64)

口唇部形態は角頭型、沈線の位置はBである。第3類中では最も量が多く56.7%を占めている。沈線の施文は数回にわけて行なわれ、継点は明瞭に残されている。施文方向はa種と同様に左から右へ移動している。口縁部は直口するものがほとんどであるが、36は口縁部が肥厚し、わずかに外反きみとなる。沈線は、ヘラ状工具により加えられ、鋭く明瞭である。施文は土器正面よりやや下方向から加えられる傾向があり、沈刻は比較的深くなる。器内面はややザラつくものもあるが、表面はいずれも滑沢で、無文がほとんどである。53・64は同一個体とみられるが、器厚は他に比べ薄手で約5mmである。40には縄文、55には燃糸文とみられる痕跡が不明瞭ながら存在し注意されよう。また45には沈線下に縦位の削痕が認められる。47は沈線下に円孔が穿たれる。補修孔であろうか。

c種 (56~58)

口唇部形態は丸頭型、沈線の位置はCにあたる。58は丸みをもつ施文具により沈線が加えられる。56は推定径35cmと大型土器で、器厚も厚く、57と同一個体の可能性が高い。56・57とも整形は良好で、器内外面と



第9图 第Ⅱ群土器

0 1:2 6cm

II 発掘調査の成果

も平滑な面を形成している。57は指頭もしくは丸みをもつ施文具により太い沈線(凹面)が施されるが、この凹面の一部に別の種類の細い沈線が磨り消された状態で観察される。この部分についてみると、まず細い沈線が施された後、その上から指頭ないし他の施文具により沈線が加えられていることになる。沈線下には筋が丸く、条間隔の広い縄文が施される。縄文の表現としては2類a種刷部片にみられる縄文に類似する。原体はR L、施文方位は横位である。58はやや薄手で、沈線は丸みをもつ棒状施文具により加えられる。

d種 (59-61)

口唇部は丸頭型、沈線の位置はAである。沈線は浅く、やや不明瞭であるが、施文は数回に分割して行なわれ、継点が認められる。59では左から右方向へ移動している。沈線は丸みをもつ施文具により加えられている。器内面はややザラつくものの、表面は滑沢となっている。

e種 (62・63・66)

口唇部は丸頭型、沈線の位置はBである。63・66はわずかに肥厚する口縁部下に沈線が加えられ、口縁部の肥厚もしくは段を強調している。62は浅い沈線であるが、口縁部の屈曲を強調している。

f種 (51)

口唇部が欠損する口縁部付近である。横位の捺糸圧痕が一条認められる。捺糸圧痕の加えられる例は、今回出土した土器群の中でこの51のみである。

第4類 (67-89)

無文の口縁部片を一括する。この中には、第3類e種とした土器の口縁部片も含まれる可能性もある。例えば80・81などは口唇部の形態、色調、胎土などe種との類似点も多い。78・79もやはり類似点が認められるものの、e種の沈線文の位置とは相違する。なお、82・83も小片であるが、これらの口縁部と類似する。口唇部形態には第3類と同じように角頭型と丸頭型が認められ、67・68・69・70・71・74は角頭型、72・73・75-89は丸頭型を示す。口縁部は直口するものが多いが、丸頭型口唇部をもつ85・89は外反ぎみに湾曲する。整形はいずれも良好であるが、特に71・78・79・80・81・82・83などは器内外面とも滑沢な面をもつ。

第5類 (90-91)

波状口縁を本類とする。90・91の2点が認められた。90は無文の口縁部片で、山形状の小突起が付される。口唇部形態は丸頭型である。器内面はやや荒れているが、表面は平滑である。91は波状部分で、口縁部下に沈線文が加えられる。沈線文は細く、明瞭に施され、口縁形状とは異なり水平方向に巡るようである。口唇部は丸頭型をなす。器内面はやや荒れているが、表面は平滑である。

第6類 (92-131)

無文の刷部を一括する。全て無文であるが、第3類から第5類とした口縁部片に伴うものと見られる。

第7類 (132-136)

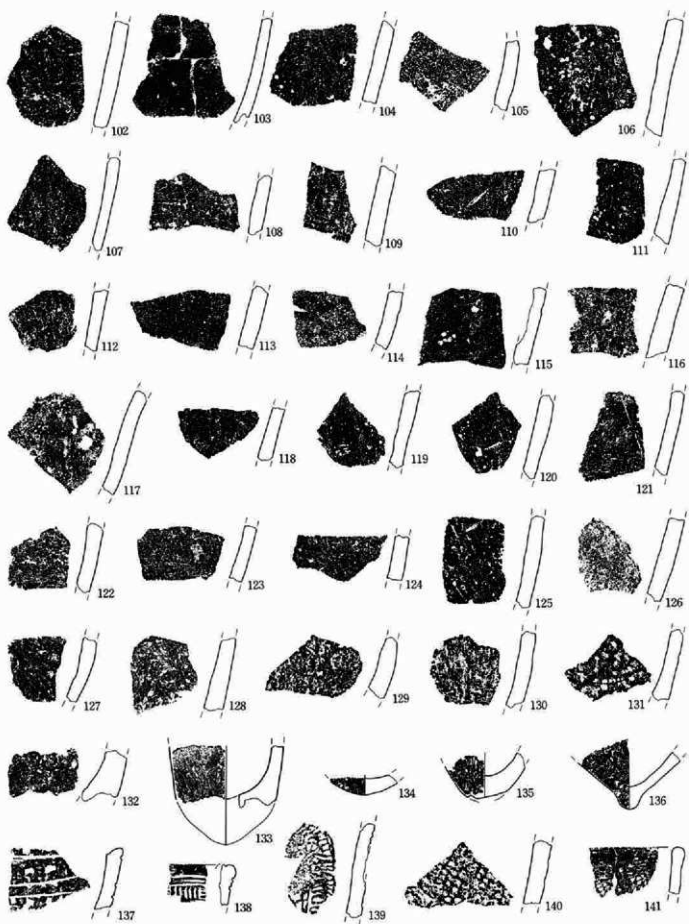
無文の尖底部である。132・133は端部が欠損する。134・135は丸底状、136は乳頭状の尖底を呈する。

III 群土器 (第10図137-139)

早期中葉、沈線文系土器を本群とする。137は接合部で剥落し、一見口縁部状である。横走線間に角頭状刺突文を加える。138は口縁部で、口唇部上面に沈線を施す。口縁部は平行線文および外側竹管文により文様構成される。139は刷部片で、連続刺突文が加えられる。

IV 群土器 (第10図140-141)

140は刷部片で不明瞭な縄文がみられ、一部に沈線文が施される。141は、口縁部片で、径10cm前後の小型土器である。口縁部に不規則な縄文がみられ、以下R L横位の縄文が施される。



第10圖 第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ群土器

0 1:2 6cm

b. 石器

今回の調査で最も注目される点は、大量に出土した石器・剥片類の存在である。出土状況は、台地平坦部にあたるⅢ区に集中し、この部分には石器総数の93%以上が密集する。また、これらの遺物類は基本的に層位差をもたずに検出されている。このような出土傾向は、先に報告した土器類とも共通するもので、この土器類とも層位差をもたず、分布域を共有している。これら遺物群は、限定された面的広がりをもって南面する台地上に占地するもので、居住施設である住居、その他生活施設としての土坑、灰跡などの遺構は検出されていないものの、この地が縄文時代の生活域であったものと考えられよう。さらに、層位差をもたず面的広がりをもつという点からみれば、ある限られた時間幅の中で形成されたものとみられ、土器から考えれば惣糸文系土器後半期の石器組成を示すものと捉えられよう。以下、器種ごとにその概要をみるものとしよう。

石鏃 (第13図、第14図171~179)

計44点検出された。形態的には、平基無茎鏃(142~145、147~149、153)、凹基無茎鏃(150~152、154~173、175)、平基有茎鏃(177)、凸基有茎鏃(178、179)、鍔形鏃(174)などが認められる。使用される石材はチャートが半数を占め、黒曜石、黒色頁岩、珪質凝灰岩などが用いられている。

石錐 (第14図) 180~182)

図に示した3点が検出された。石材は、チャート、黒色頁岩、黒色安山岩がそれぞれ用いられる。いずれも不定形剥片を素材とし、側縁部から調整加工を施し錐部を作出している。

石匙 (第14図183)

1点のみ認められている。完形品であり、黒色安山岩製である。形態は縦長を示し、表裏面に調整加工が加えられ、先端部はやや尖りぎみとなる。

ピエスエスキュー (第14図184~186)

図に示した3点が認められている。いずれもチャート製であり、断面形状は紡錘形を示す。

打製石斧・打製礫斧 (第15図187~198)

打製石斧および打製礫斧は総数17点検出されている。形態的には短冊形、挽形がみられ、刃部形状も直刃、凸刃が存在する。石材は、80%近くを黒色頁岩が占め、緑色頁岩、細粒安山岩、流紋岩も使用されている。

磨製礫斧・磨製石斧 (第16図199~204)

計7点認められた。いずれも礫表皮を残しており、磨製礫斧に属するものであろう。石材は黒色頁岩4点、珪質頁岩、緑色片岩、砥沢石がそれぞれ1点ずつ認められる。199は、珪質頁岩製で、両側縁に調整加工を施し、刃部に極めて丁寧な研磨が加えられており、両刃・円刃としている。

片刃石器 (第16図205)

計10点認められ、石器組成のうち0.22%を占めている。石材は黒色頁岩が80%と好んで利用され、その他、ホルンフェルス、頁岩が材量となっている。

礫器 (第16図206、207)

計5点が検出されている。全て黒色頁岩が用いられるが、いずれも打削した棒状礫の一部に調整加工を施している。

石槌 (第16図208~211)

計24点認められている。石材をみると、60%をチャート、25%が黒色頁岩、12%を黒色安山岩が占める。

削器 (第17図~第19図)

計144点と多数出土しており、石器組成のおよそ30%を占めている。石材は約85%が黒色頁岩であり、次

- c. 縦長剥片を素材とし、石器形状は三角状を呈し、長幅比は1:1から1:2前後を示す。(223~231)
- d. 分前礫もしくは板状剥片を素材とする。(237, 238)
- e. 横長剥片を素材とし、石器形状は四角形状を呈する。また、刃部形状には、直刃(239, 241, 242)凸刃(240)、凹刃(244)などがみられる。
- f. 横長剥片を素材とし、打面・バルブを除去するもの。(243, 245, 246)
- g. 板状剥片を素材とする。刃部の角度が大きく、厚い。(247~250)
- h. 横長剥片を素材とし、石器形状は扇状を呈する。刃部形状は直刃(251~254, 257)、凸刃(255, 256)、凹刃(258)などがみられる。
- i. 横長剥片を素材とし、石器形状は台形状を呈する。(260~273)

三角錐形石器 (第20図~第23図)

計54点出土している。用いられる石材は、黒色頁岩が約95%を占め石材選定に際立った単一性をもっている。形態的にみると、器体裏面に礫表皮を残し、三角錐状もしくは四角錐状の形態をもつⅠ類と、棒状礫・偏平礫を素材とし、器側面に調整加工を施すⅡ類が存在し、各類それぞれ底面における傾斜角により、a種傾斜角90度前後、b種60度前後とさらに分類される。本遺跡例をみると、Ⅰ類a種36点、Ⅰ類b種2点、Ⅱ類a種13点、Ⅱ類b種3点となる。

※石坂茂・岩崎泰一「熊本支庁文化における石器群の一様相」『研究紀要』5 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988, 3

スタンプ形石器 (第24図~第26図321~327)

計35点が出土している。用いられる石材は、ひん岩、粗粒安山岩、石英閃緑岩、変質玄武岩、輝緑岩等多種にわたるのが特徴的であり、出土した石器石材のうち70%近くを占める黒色頁岩が極めて少ないことが注目される。形態的にみると、いずれも9タイプに属している。使用面である底面には、使用痕が明瞭に認められるものが存在し、306, 308, 312~316, 327などに摩耗した状態がよく観察される。

加工痕ある剥片 (第27図329~335)

計35点が認められている。石材としては、チャート、黒色安山岩、黒色頁岩、ホルンフェルス、頁岩がみられ、また多様な形状の剥片が用いられる。329~333縦長剥片を素材としたもので、334, 335は横長剥片を素材としている。

使用痕ある剥片 (第27図336~342・344)

計22点が認められている。石材についてみると、石材構成は加工痕のある剥片と同様であるものの、その構成比は相違があり、加工痕のある剥片では20%であった黒色頁岩が、使用痕のある剥片では約64%を占めており、さらに黒色安山岩については用いられなくなっている。素材となる剥片形状は多様であるが、336~339は縦長剥片を、340~342は横長剥片を利用している。

凹石 (第28図351)

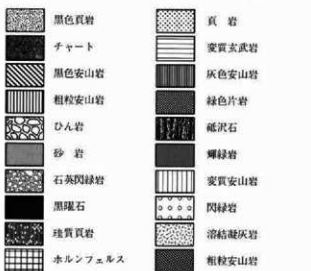
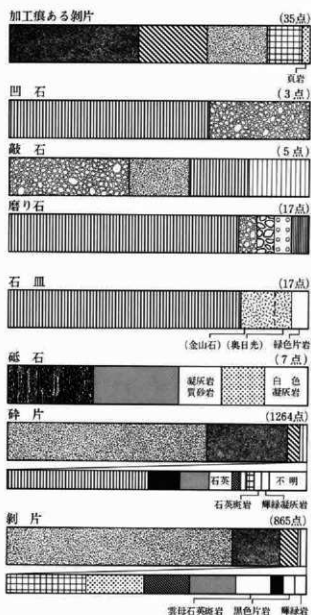
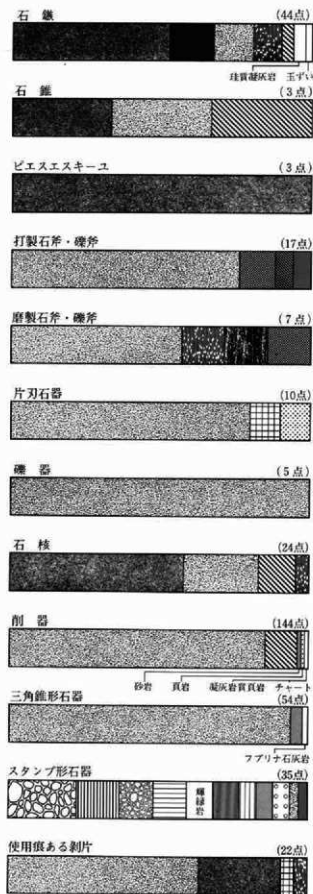
計3点認められている。石材は粗粒安山岩2点、石英閃緑岩1点となり、円礫を素材とし、両面に集合打痕による凹穴が数ヶ所認められる。

礫石 (第26図328, 第28図352, 353)

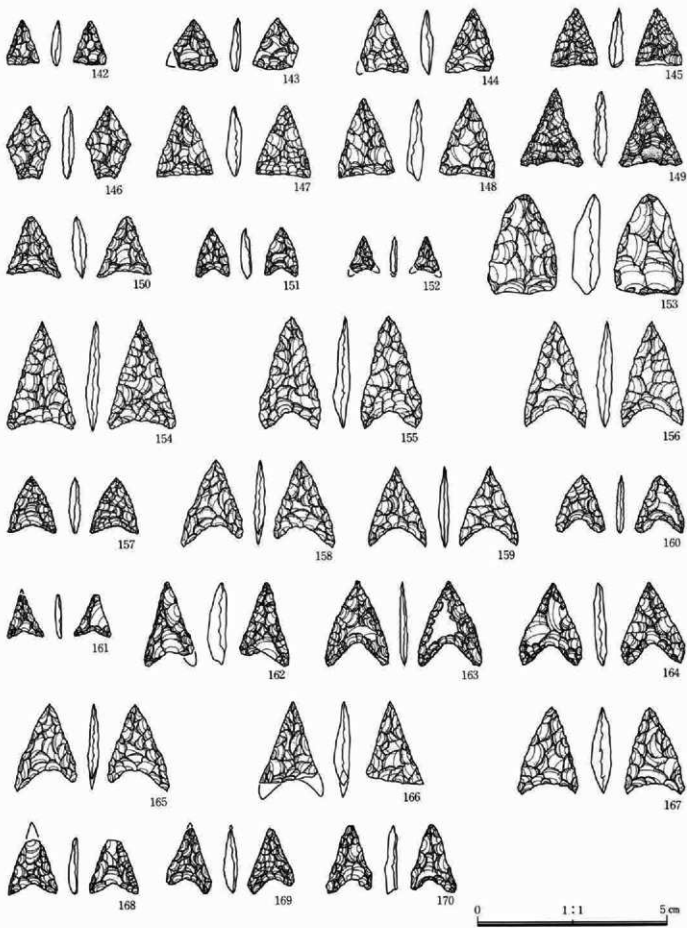
計5点認められている。石材は石英閃緑岩2点、黒色頁岩、粗粒安山岩、変質安山岩がそれぞれ1点ずつある。円礫が素材となり、片面もしくは両面に敲打痕が認められる。

磨石 (第28図354~第29図359)

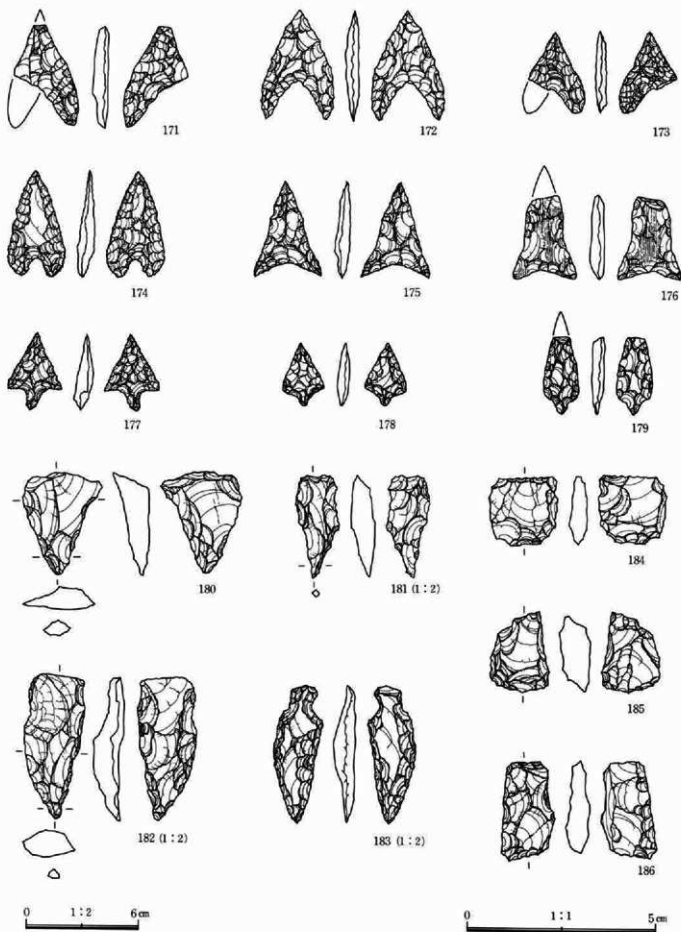
計17点が出土している。石材は粗粒安山岩12点、角閃安山岩1点、石英閃緑岩1点、灰色安山岩1点、



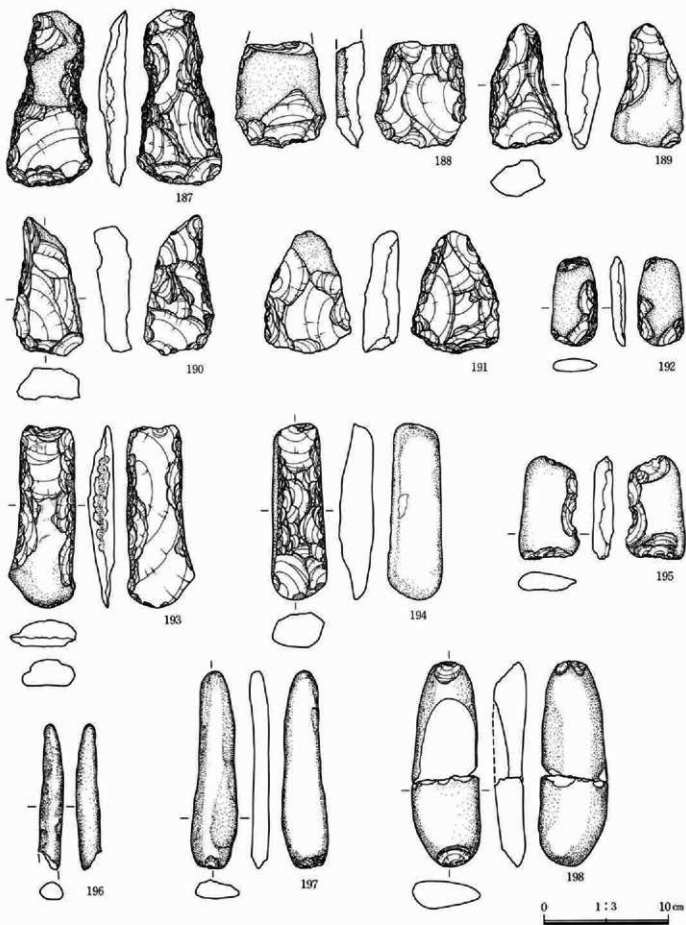
第12図 器種別石材



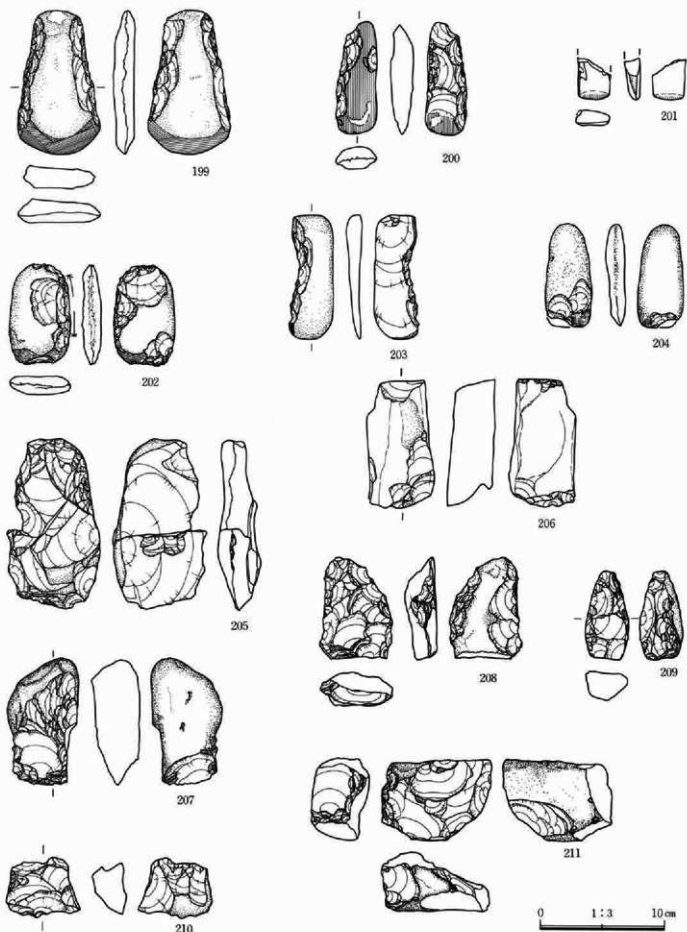
第13圖 石 鏃



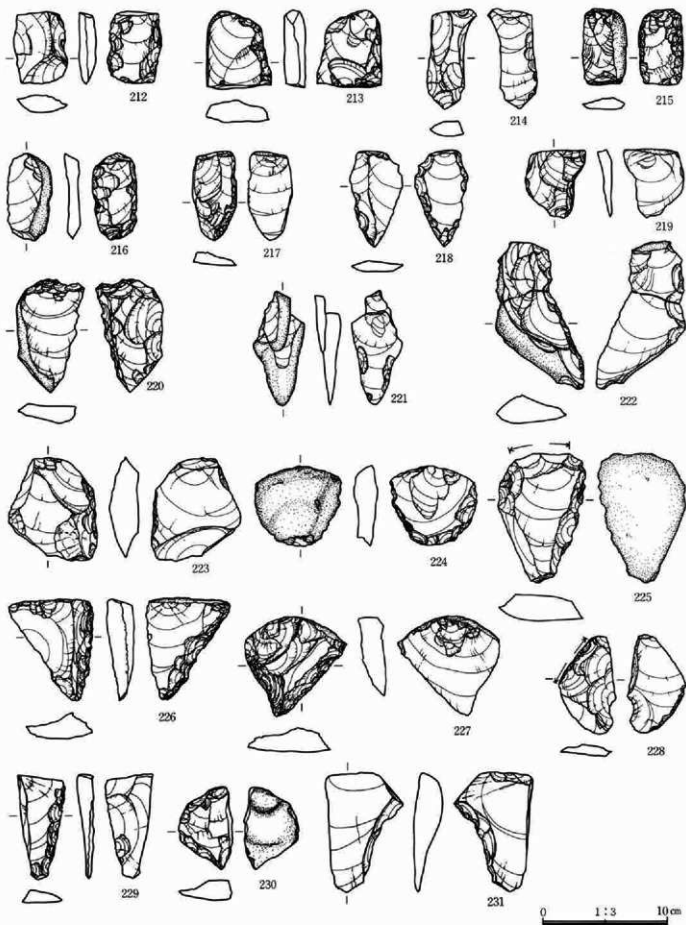
第14図 石鏃・石錐・石匙・ピエスエスキュー



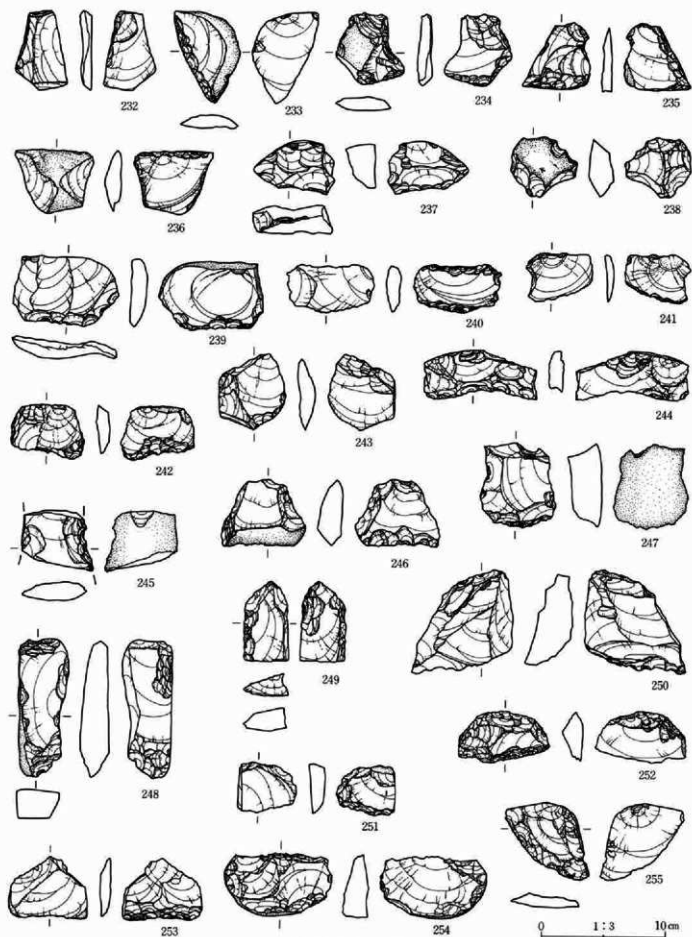
第15图 打製石斧·打製確斧



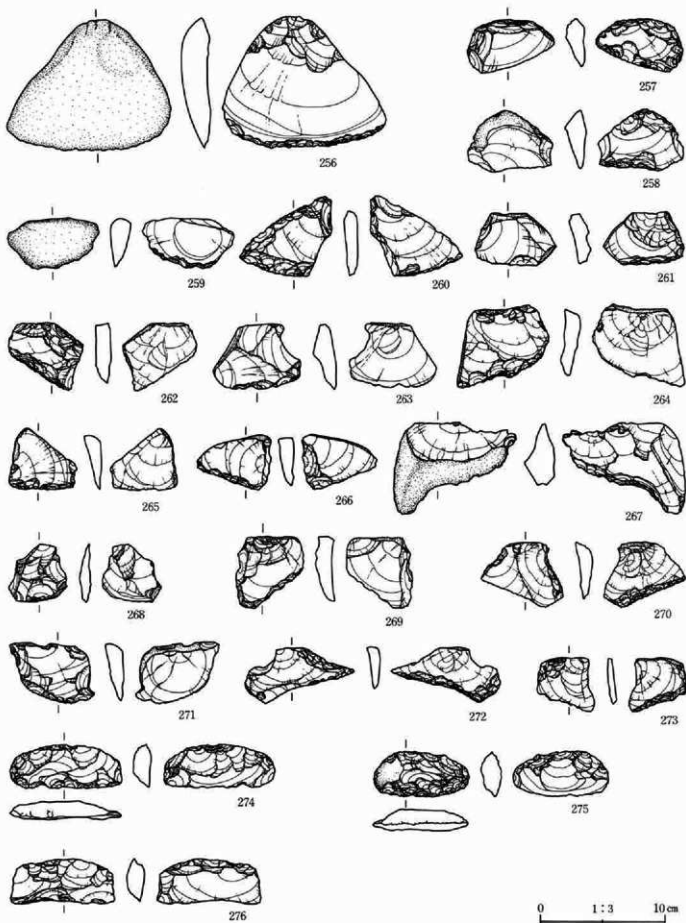
第16圖 磨製礮斧・磨製石斧・片刃石器・襍器・石核



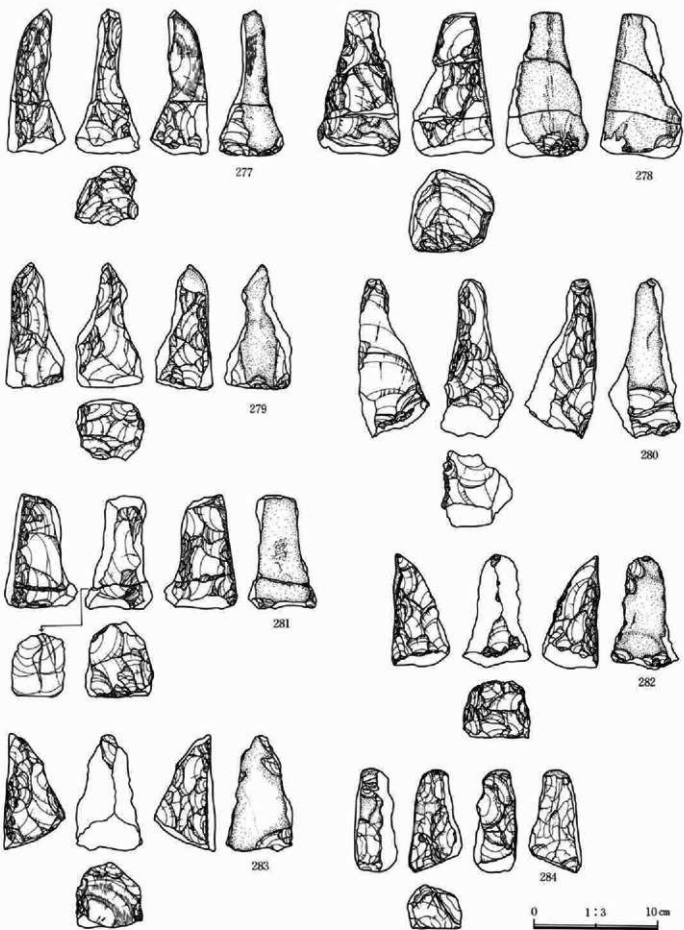
第17图 削 器



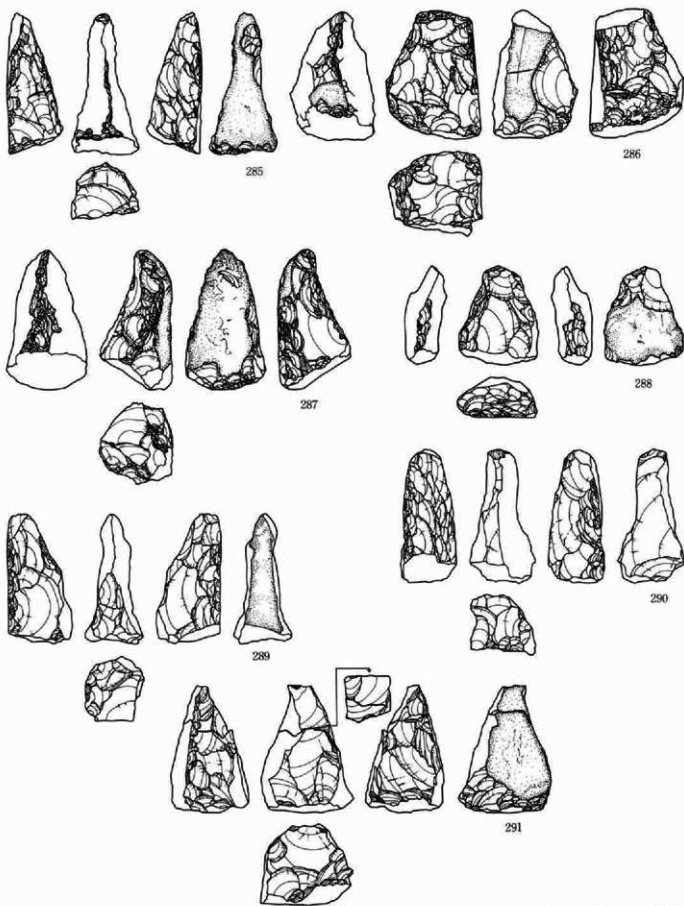
第18圖 削 器



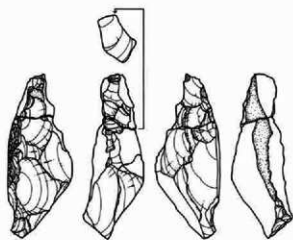
第19回 削 器



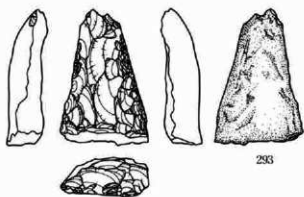
第20图 三角锥形石器



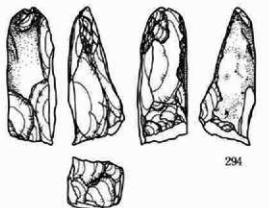
第21圖 三角錐形石器



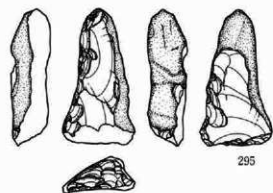
292



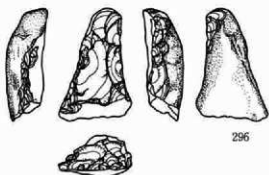
293



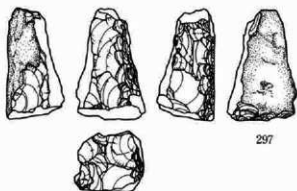
294



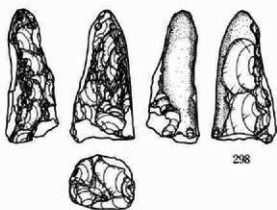
295



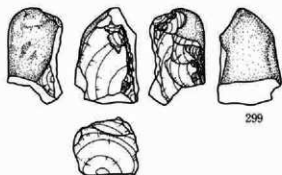
296



297



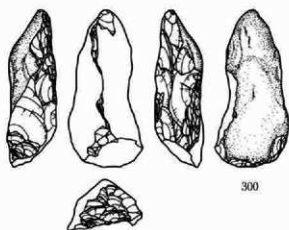
298



299

0 1:3 10 cm

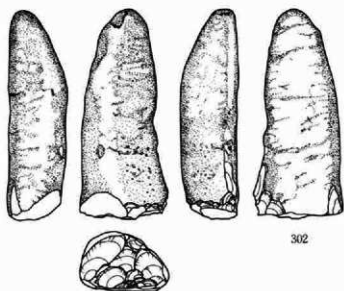
第22圖 三角錐形石器



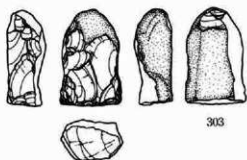
300



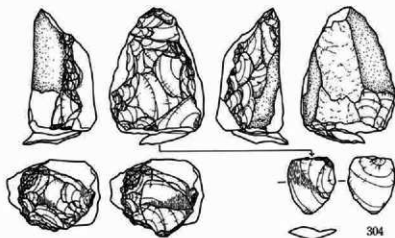
301



302



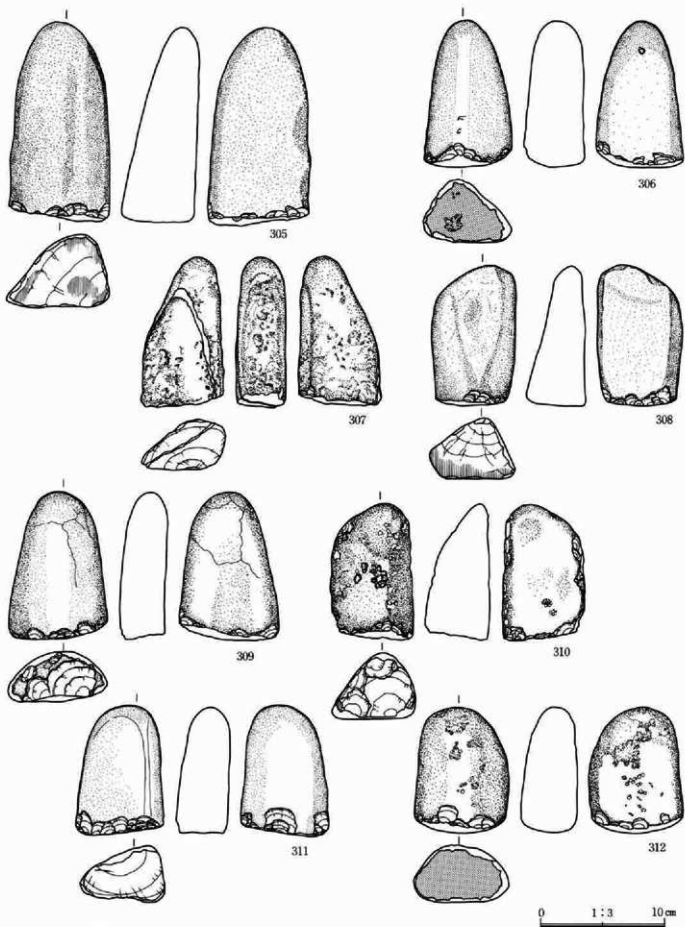
303



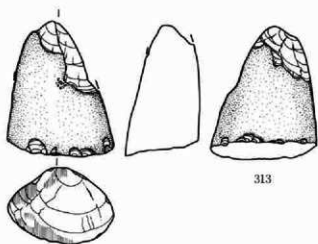
304

0 1:3 10cm

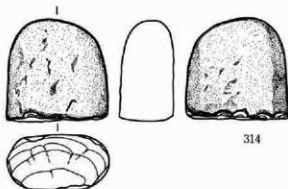
第23图 三角锥形石器



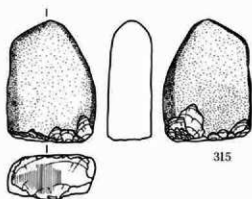
第24図 スタンプ形石器



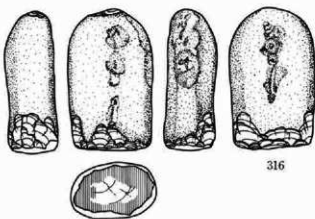
313



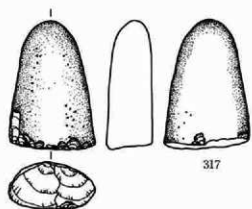
314



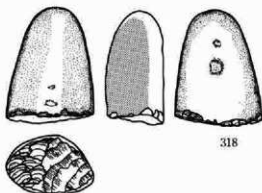
315



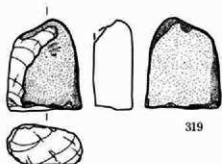
316



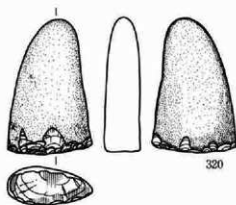
317



318

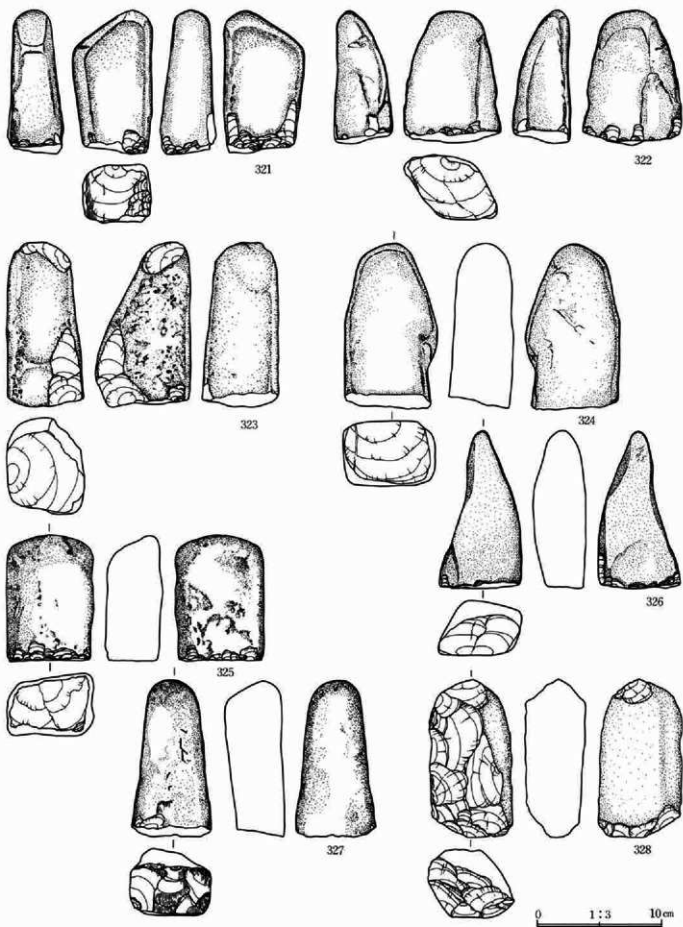


319

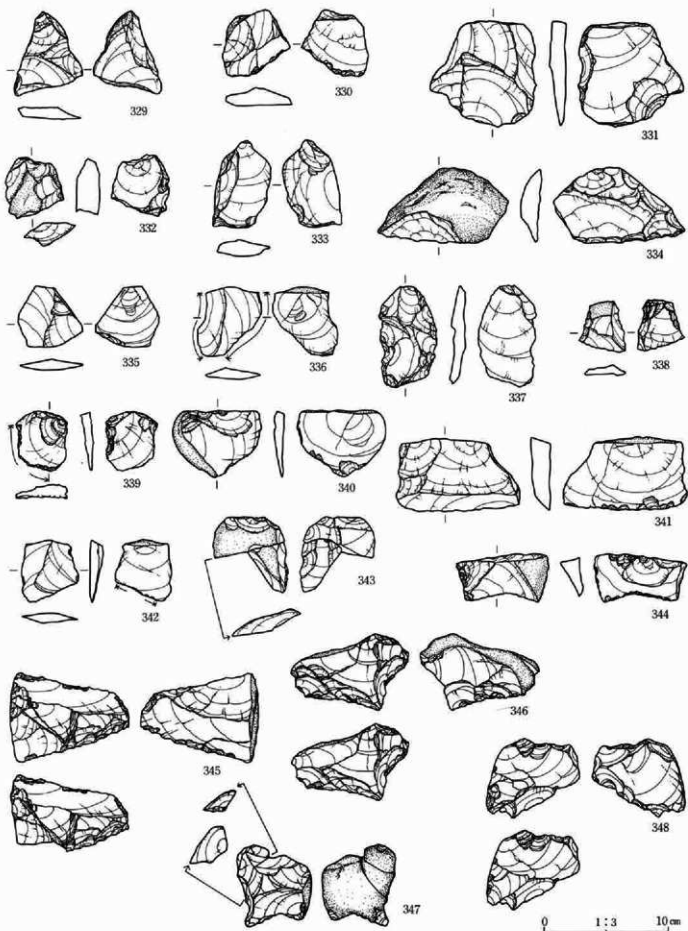


320

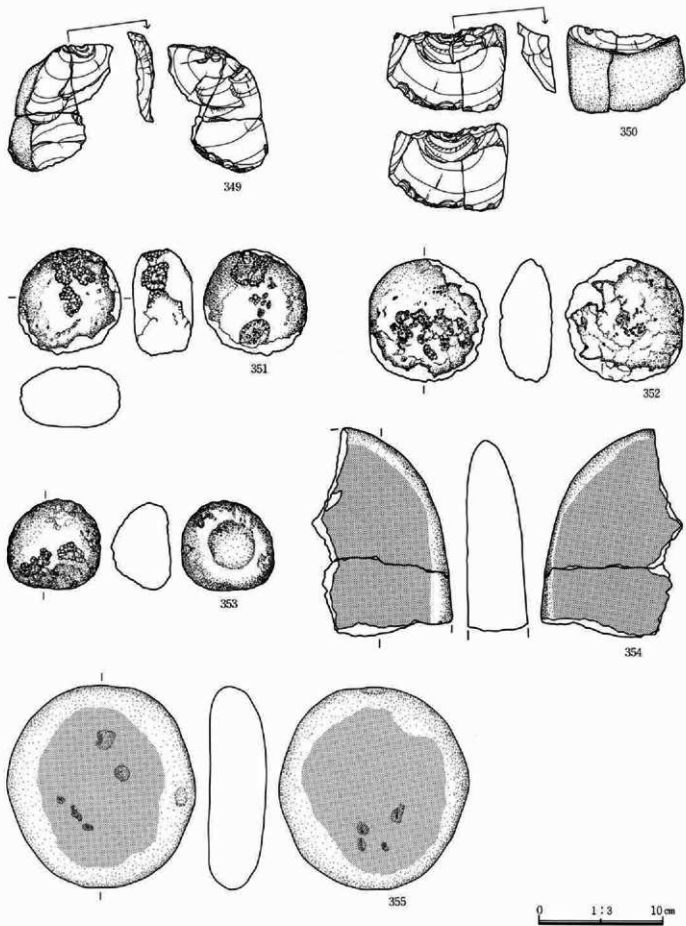
0 1:3 10cm



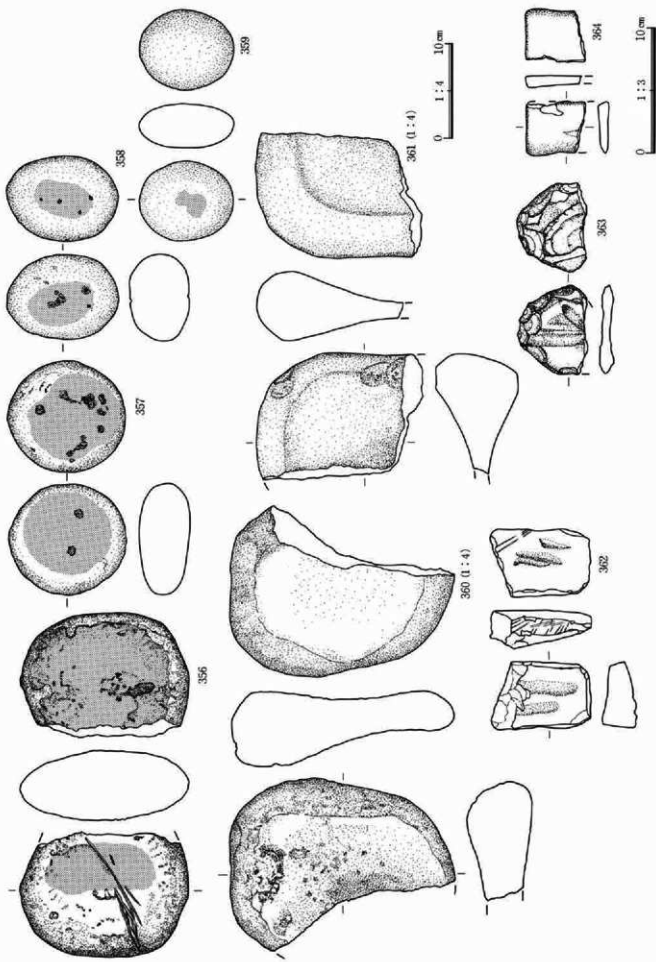
第26図 スタンプ形石器・叢石



第27図 加工痕ある剥片・使用痕ある剥片・接合資料



第28図 接合資料・凹石・蔽石・磨石



第29図 磨石・石皿・砥石

II 発掘調査の成果

石器計測表

三室坊主林遺跡から出土した石器・剥片類は第11図に示したように総数2,600点以上におよんでいる。資料整理の段階ではこれら全てについて器種分類、石材など記録を行なっている。この報告書にもなるべく多くの実測図を掲載し、資料提供に努めたが、その結果、222点、石器総数の47%について図化・報告となった。以下、計測表は、その石器類の計測値である。その他の石器類については、全てについて写真により報告するものとし、これらに関する計測値は、次表(遺物番号365から534)に示すとおりである。なお、計測表に示す長さ・幅・厚さはcm、重量はgを単位としている。()表示は推定値である。

石器計測表

番号	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石 材	番号	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石 材
142	Ⅲ 6 1 4 F	石 鏃	1.2	0.85	0.25	0.21	珩質凝灰岩	190	Ⅲ 614.5 C	打製石斧	11.0	5.5	1.5	180.00	黒色頁岩
143	Ⅲ 6 2 2 C	石 鏃	1.4	1.2	0.3	0.34	黒 曜 石	191	Ⅲ 614.5 F	打製石斧	9.6	6.95	2.95	197.60	黒色頁岩
144	Ⅲ 614.5 D	石 鏃	1.7	(1.3)	0.4	0.52	チャート	192	Ⅲ 6 1 6 D	打製石斧	7.0	3.7	1.0	38.00	黒色頁岩
145	Ⅲ 590.5 F	石 鏃	(1.5)	(1.2)	0.35	0.50	黒 曜 石	193	Ⅲ 609.5 C	打製石斧	15.3	5.2	1.2	174.53	縞粒安山岩
146	Ⅲ 6 1 5 D	石 鏃	1.9	1.15	0.3	0.55	チャート	194	Ⅲ 6 1 6 C	打製石斧	13.8	4.35	2.7	235.00	黒色頁岩
147	Ⅲ 6 0 5 D	石 鏃	1.9	1.5	0.4	0.64	チャート	195	Ⅲ 614.5 B	打製石斧	8.15	4.8	1.55	86.47	黒色頁岩
148	Ⅲ 5 9 8 E	石 鏃	2.1	1.5	0.45	0.99	チャート	196	Ⅲ 614.5 B	打製石斧	(11.4)	1.95	1.35	44.57	緑色片岩
149	Ⅲ 6 1 3 D	石 鏃	2.05	1.6	0.3	0.70	黒 曜 石	197	Ⅲ 619.5 B	打製石斧	15.7	3.65	1.4	123.09	緑色片岩
150	Ⅲ 622.5 C	石 鏃	1.6	1.4	0.35	0.60	黒色安山岩	198	Ⅲ 614.5 B	打製石斧	16.1	5.4	2.6	277.90	黒色頁岩
151	Ⅲ 6 1 5 E	石 鏃	1.25	0.9	0.3	0.25	チャート	199	Ⅲ 609.5 F	磨製石斧	11.25	6.6	1.8	178.50	珩質頁岩
152	Ⅲ 614.5 D	石 鏃	(0.95)	(0.65)	0.15	0.09	チャート	200	Ⅲ 6 1 5 F	磨製石斧	8.8	3.2	1.7	65.06	黒色頁岩
153	Ⅲ 6 1 6 C	石 鏃	2.65	1.85	0.7	3.22	チャート	201	Ⅲ 612.5 D	磨製石斧	(8.1)	2.6	1.3	10.30	砥 沢 石
154	Ⅲ 6 0 8 F	石 鏃	5.7	3.7	0.7	1.30	チャート	202	Ⅲ 613.5 C	磨製石斧	7.9	4.9	1.45	82.91	黒色頁岩
155	Ⅲ 6 1 4 E	石 鏃	5.9	3.2	0.8	1.40	チャート	203	Ⅲ 614.5 E	磨製石斧	9.8	3.5	1.2	50.88	黒色頁岩
156	Ⅲ 610.5 B	石 鏃	2.9	1.7	0.3	1.30	黒色頁岩	204	Ⅲ 614.5 F	磨製石斧	8.1	3.7	1.6	62.00	黒色頁岩
157	Ⅲ 6 1 5 B	石 鏃	1.45	1.3	0.3	0.42	珩質凝灰岩	205	Ⅲ 6 1 3 B	片刃石器	13.5	7.5	3.4	380.20	黒色頁岩
158	Ⅲ 6 1 5 D	石 鏃	2.3	1.7	0.3	0.70	黒色安山岩	206	Ⅲ 613.5 C	磨製石斧	10.1	5.4	3.7	269.20	黒色頁岩
159	Ⅲ 622.5 C	石 鏃	2.1	1.6	0.5	0.50	チャート	207	Ⅲ 614.5 F	磨製石斧	10.0	5.65	4.5	320.80	黒色頁岩
160	Ⅲ 607.5 D	石 鏃	1.5	1.3	0.2	0.31	黒色頁岩	208	Ⅲ 614.5 E	石 槌	8.1	5.75	2.6	130.60	黒色頁岩
161	Ⅲ 6 1 5 D	石 鏃	1.1	1.0	0.15	0.13	チャート	209	Ⅲ 613.5 D	石 槌	7.1	3.5	2.2	64.42	黒色頁岩
162	Ⅲ 608.5 E	石 鏃	(2.2)	(1.3)	0.5	0.82	黒 曜 石	210	Ⅲ 6 1 6 C	石 槌	4.8	6.0	2.7	73.66	黒色頁岩
163	Ⅲ 609.5 C	石 鏃	2.2	1.7	0.2	0.62	チャート	211	Ⅲ 613.5 B	石 槌	6.5	8.7	4.6	288.70	黒色頁岩
164	Ⅲ 614.5 D	石 鏃	2.2	1.7	0.35	0.66	黒 曜 石	212	Ⅲ 6 1 5 F	磨 器	5.7	4.3	1.35	43.56	黒色頁岩
165	Ⅲ 591.5 D	石 鏃	2.3	1.9	0.3	0.66	チャート	213	Ⅲ 6 1 5 B	磨 器	6.1	5.2	1.7	69.73	黒色頁岩
166	Ⅲ 6 1 4 F	石 鏃	(2.0)	(1.5)	0.5	0.85	チャート	214	Ⅲ 615.5 D	磨 器	7.8	4.0	1.2	42.36	黒色頁岩
167	Ⅲ 614.5 C	石 鏃	4.6	3.2	1.0	1.20	珩質頁岩	215	Ⅲ 613.5 C	磨 器	6.0	3.5	0.95	28.11	黒色頁岩
168	Ⅲ 614.5 F	石 鏃	(1.45)	(1.3)	0.25	0.36	チャート	216	Ⅲ 6 1 5 D	磨 器	6.9	3.4	1.1	36.90	黒色頁岩
169	Ⅲ 606.5 C	石 鏃	1.7	1.2	0.35	0.47	黒色頁岩	217	Ⅲ 613.5 B	磨 器	7.0	3.5	1.0	27.93	黒色頁岩
170	Ⅲ 6 0 9 B	石 鏃	1.8	1.2	0.3	0.46	黒 曜 石	218	Ⅲ 6 1 6 B	磨 器	7.6	4.25	0.9	33.01	黒色頁岩
171	Ⅲ 6 0 5 C	石 鏃	(2.65)	(1.7)	0.4	1.12	チャート	219	Ⅲ 616.5 C	磨 器	6.4	4.8	1.1	21.07	黒色頁岩
172	Ⅲ 604.5 E	石 鏃	3.1	2.0	0.4	1.40	珩質頁岩	220	Ⅲ 6 1 4 C	磨 器	8.9	6.35	1.6	82.62	黒色頁岩
173	Ⅲ 606.5 D	石 鏃	(2.1)	(1.5)	0.3	0.61	玉 ず い	221	Ⅲ 6 1 5 C	磨 器	9.0	4.0	2.0	48.30	黒色頁岩
174	Ⅲ 6 1 5 C	石 鏃	2.8	1.5	0.45	1.43	黒色頁岩	222	Ⅲ 6 1 5 E	磨 器	11.6	7.1	2.2	130.20	黒色頁岩
175	Ⅲ 6 2 0 C	石 鏃	2.5	1.85	0.4	0.95	珩質頁岩	223	Ⅲ 613.5 B	磨 器	8.1	7.2	2.3	147.20	黒色頁岩
176	Ⅲ 616.5 D	石 鏃	(2.2)	1.7	0.4	1.14	チャート	224	Ⅲ 6 1 4 C	磨 器	6.2	6.8	1.8	95.06	黒色頁岩
177	Ⅲ 609.5 B	石 鏃	2.0	1.4	0.4	0.68	黒色頁岩	225	Ⅲ 614.5 D	磨 器	10.2	6.9	2.0	182.17	黒色頁岩
178	Ⅲ 624.5 C	石 鏃	1.05	1.1	0.35	0.43	珩質頁岩	226	Ⅲ 615.5 D	磨 器	8.0	6.65	2.1	94.10	黒色頁岩
179	Ⅲ 6 2 2 D	石 鏃	(2.0)	1.0	0.35	0.67	黒色頁岩	227	Ⅲ 6 1 4 B	磨 器	7.85	8.1	2.2	111.58	黒色頁岩
180	Ⅲ 6 1 4 C	石 鏃	2.7	2.2	0.9	2.92	チャート	228	Ⅲ 6 1 0 C	磨 器	7.7	4.5	0.85	31.71	黒色頁岩
181	Ⅲ 604.5 C	石 鏃	6.4	2.3	1.4	14.90	黒色安山岩	229	Ⅲ 614.5 D	磨 器	8.2	3.75	1.0	33.23	黒色頁岩
182	Ⅲ 614.5 E	石 鏃	7.6	3.1	1.4	32.90	黒色頁岩	230	Ⅲ 615.5 D	磨 器	6.5	4.4	1.6	49.86	黒色安山岩
183	Ⅲ 590.5 D	石 鏃	7.2	2.6	1.2	17.66	黒色安山岩	231	Ⅲ 6 1 5 G	磨 器	9.4	6.2	2.3	111.79	黒色頁岩
184	Ⅲ 614.5 C	石 鏃	1.8	1.7	0.4	2.40	チャート	232	Ⅲ 5 1 4 D	磨 器	6.2	4.1	0.9	22.81	黒色頁岩
185	Ⅲ 615.5 D	石 鏃	2.1	1.5	0.6	2.91	チャート	233	Ⅲ 6 1 5 D	磨 器	7.2	5.25	1.0	39.31	黒色頁岩
186	Ⅲ 614.5 D	石 鏃	2.5	1.4	0.6	2.92	チャート	234	Ⅲ 613.5 D	磨 器	5.6	5.4	1.15	34.20	黒色安山岩
187	Ⅲ 6 1 5 D	打製石斧	13.9	6.8	2.4	180.30	黒色頁岩	235	Ⅲ 614.5 D	磨 器	5.2	5.3	0.7	26.33	黒色安山岩
188	Ⅲ 6 1 4 B	打製石斧	(8.3)	7.3	2.3	168.80	黒色頁岩	236	Ⅲ 614.5 E	磨 器	5.05	6.3	1.25	39.08	黒色頁岩
189	Ⅲ 6 1 4 E	打製石斧	8.8	5.75	2.8	159.92	黒色頁岩	237	Ⅲ 6 1 4 B	磨 器	4.1	6.3	6.4	75.01	頁 岩

3 縄文時代の遺物

番号	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石 材	番号	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石 材
238	■ 614 D	削器	4.7	5.3	1.9	44.62	黒色頁岩	302	■ 615 E	内磨石	16.5	7.0	4.7	737.20	黒色頁岩
239	■ 614 C	削器	5.3	8.4	1.3	79.58	黒色頁岩	303	■ 614.5 F	内磨石	7.6	4.7	3.1	178.28	黒色頁岩
240	■ 614 B	削器	3.7	7.0	1.1	36.00	黒色頁岩	304	■ 613 D	内磨石	10.7	7.6	6.1	528.40	黒色頁岩
241	■ 615.5 C	削器	3.9	5.2	0.6	14.35	黒色頁岩	305	■ 614 B	内磨石	15.6	8.1	5.9	1043.10	埴 岩
242	■ 614 E	削器	4.3	5.75	1.1	30.80	黒色頁岩	306	■ 614.5 E	内磨石	11.6	7.0	4.9	551.20	輝 緑 岩
243	■ 615.5 D	削器	6.0	5.3	1.35	53.04	黒色頁岩	307	■ 615 E	内磨石	11.8	6.7	4.0	510.30	実質玄武岩
244	■ 615 E	削器	3.8	8.9	1.2	55.03	黒色頁岩	308	■ 615 D	内磨石	11.1	6.8	4.2	570.40	実質玄武岩
245	■ 616 B	削器	(4.8)	(5.7)	1.45	56.02	黒色頁岩	309	■ 615 E	内磨石	11.7	7.95	4.0	531.00	埴 岩
246	■ 614 D	削器	5.3	6.7	2.0	79.25	黒色頁岩	310	■ 615 C	内磨石	10.7	6.7	5.2	489.70	石英閃緑岩
247	■ 610 D	削器	6.6	5.9	2.4	133.95	黒色頁岩	311	■ 616 B	内磨石	10.3	7.1	4.3	442.10	実質玄武岩
248	■ 615 E	削器	10.8	4.0	2.25	148.80	黒色頁岩	312	■ 613.5 F	内磨石	9.95	7.5	4.5	519.70	閃 緑 岩
249	■ 615 C	削器	6.3	3.55	1.8	53.72	黒色頁岩	313	■ 613.5 D	内磨石	10.6	8.6	6.0	626.60	灰色安山岩
250	■ 616 E	削器	7.1	7.9	3.7	300.73	黒色頁岩	314	■ 616 B	内磨石	8.0	8.0	4.3	497.50	石英閃緑岩
251	■ 614 E	削器	3.95	4.6	1.3	38.60	黒色安山岩	315	■ 615 D	内磨石	9.6	7.0	3.5	428.20	粗粒安山岩
252	■ 616.5 B	削器	4.0	7.2	1.6	45.01	黒色頁岩	316	■ 615.5 F	内磨石	11.2	6.7	4.0	632.20	輝 緑 岩
253	■ 614 C	削器	4.8	6.3	0.8	36.44	黒色安山岩	317	■ 616.5 B	内磨石	10.2	6.8	3.65	377.10	粗粒安山岩
254	■ 615 D	削器	4.9	8.5	2.0	105.72	黒色安山岩	318	■ 表 土	9.2	6.95	5.7	427.30	実質安山岩	
255	■ 613.5 D	削器	6.1	6.65	1.1	35.89	黒色頁岩	319	■ 614.5 H	内磨石	7.2	6.1	3.1	239.70	実質安山岩
256	■ 615 E	削器	30.2	12.9	2.2	322.30	黒色頁岩	320	■ 614.5 D	内磨石	10.5	6.8	2.7	316.80	灰色安山岩
257	■ 615 E	削器	4.1	6.9	1.5	39.00	黒色頁岩	321	■ 615 B	内磨石	11.3	6.5	4.5	539.10	黒色頁岩
258	■ 616 C	削器	4.9	6.65	1.65	47.56	黒色頁岩	322	■ 614.5 B	内磨石	10.5	7.8	5.1	493.50	粗粒安山岩
259	■ 615.5 D	削器	3.9	7.3	1.6	40.74	黒色頁岩	323	■ 613.5 D	内磨石	13.0	7.6	7.6	875.00	埴 岩
260	■ 614 D	削器	6.25	7.3	1.06	46.23	黒色頁岩	324	■ 613 C	内磨石	13.1	7.5	5.1	849.50	埴 岩
261	■ 614.5 C	削器	4.1	6.4	1.6	50.80	黒色頁岩	325	■ 表 採	9.9	7.0	4.9	630.90	埴 岩	
262	■ 614.5 E	削器	5.3	5.9	1.1	44.54	黒色安山岩	326	■ 615 C	内磨石	12.3	6.6	4.2	472.40	灰色安山岩
263	■ 614.5 B	削器	5.1	7.0	1.7	55.57	黒色頁岩	327	■ 616.5 C	内磨石	12.4	6.4	5.2	606.60	埴 岩
264	■ 613.5 C	削器	6.5	7.2	1.05	74.71	黒色頁岩	328	■ 614 B	内磨石	12.5	6.6	4.8	635.60	実質安山岩
265	■ 614.5 B	削器	4.85	5.3	1.3	26.21	黒色安山岩	329	■ 613.5 C	内磨石	6.6	5.4	0.95	45.33	黒色頁岩
266	■ 614.5 D	削器	4.3	5.8	1.2	33.22	黒色安山岩	330	■ 615.5 C	内磨石	5.1	5.4	1.0	40.84	頁 岩
267	■ 613.5 B	削器	7.2	9.7	2.3	115.60	黒色頁岩	331	■ 614 E	内磨石	8.3	8.4	1.35	99.15	砂 岩
268	■ 609.5 B	削器	4.5	4.6	0.8	15.63	黒色頁岩	332	■ 613.5 B	内磨石	4.9	4.6	1.7	47.54	黒色頁岩
269	■ 615 D	削器	5.5	5.3	1.4	49.13	黒色頁岩	333	■ 615 F	内磨石	6.85	4.65	1.3	43.63	黒色頁岩
270	■ 614 C	削器	5.1	6.45	1.3	33.68	砂岩	334	■ 615 D	内磨石	5.9	10.4	1.65	98.80	砂岩
271	■ 599.7 E	削器	4.7	6.6	1.4	42.70	黒色頁岩	335	■ 614.5 D	内磨石	4.8	5.1	0.8	22.21	黒色頁岩
272	■ 614 D	削器	4.3	8.6	1.0	21.85	黒色頁岩	336	■ 615.5 E	内磨石	5.4	5.1	0.8	22.30	黒色頁岩
273	■ 615 E	削器	4.2	4.5	0.9	19.89	黒色頁岩	337	■ 615 E	内磨石	7.95	4.6	1.2	44.34	黒色頁岩
274	■ 615.5 D	削器	3.4	8.8	1.5	51.24	黒色頁岩	338	■ 615 C	内磨石	4.0	3.7	0.8	10.82	黒色頁岩
275	■ 616 D	削器	3.5	7.6	1.65	51.24	黒色頁岩	339	■ 615 E	内磨石	4.7	4.1	1.1	14.96	黒色頁岩
276	■ 614.5 E	削器	3.4	8.3	1.35	46.11	黒色頁岩	340	■ 615 C	内磨石	5.3	7.0	0.8	31.20	黒色頁岩
277	■ 615 B	内磨石	11.4	5.0	4.7	208.70	黒色頁岩	341	■ 613.5 E	内磨石	5.75	9.85	1.55	100.41	砂岩
278	■ 616 B	内磨石	11.4	6.6	6.5	525.40	黒色頁岩	342	■ 614.5 E	内磨石	4.85	4.5	1.05	17.54	黒色頁岩
279	■ 613.5 C	内磨石	9.9	5.3	4.8	260.40	黒色頁岩	343	■ 610.5 B	混合資料	5.9	6.0	1.7	47.52	黒色頁岩
280	■ 618 D	内磨石	12.4	5.7	5.7	360.60	黒色頁岩	344	■ 615 C	実用 鹿 角 質	3.8	7.3	1.35	43.71	黒色頁岩
281	■ 614.5 B	内磨石	9.0	5.8	5.4	302.50	黒色頁岩	345	■ 613 D	混合資料	7.1	9.4	2.1	127.67	黒色頁岩
282	■ 614 C	内磨石	8.9	5.4	4.5	194.70	黒色頁岩	346	■ 614 D	混合資料	6.1	9.5	6.0	145.30	黒色頁岩
283	■ 614 C	内磨石	9.2	5.2	5.15	234.20	黒色頁岩	347	■ 614 E	混合資料	6.4	5.9	2.9	118.30	黒色頁岩
284	■ 613 F	内磨石	8.1	4.2	3.4	134.60	頁 岩	348	■ 614.5 C	混合資料	6.2	7.3	2.2	75.13	黒色頁岩
285	■ 614.5 C	内磨石	11.1	5.3	4.4	209.40	黒色頁岩	349	■ 615 B	混合資料	10.1	8.2	2.4	146.20	黒色頁岩
286	■ 615.5 D	内磨石	10.1	7.4	6.7	664.50	黒色頁岩	350	■ 614 D	混合資料	6.9	9.5	3.5	181.40	点 紋 頁 岩
287	■ 613 B	内磨石	11.0	5.7	6.4	409.10	黒色頁岩	351	■ 615.5 C	閃 石	(8.4)	8.15	4.7	480.40	粗粒安山岩
288	■ 615 F	内磨石	7.8	6.3	3.2	187.20	黒色頁岩	352	■ 614.5 E	燧 石	(9.4)	(9.4)	4.2	598.60	石英閃緑岩
289	■ 613.5 D	内磨石	10.2	4.6	5.1	210.60	黒色頁岩	353	■ 613.5 C	燧 石	7.1	7.4	4.8	321.10	粗粒安山岩
290	■ 614.5 D	内磨石	10.5	4.5	4.7	267.00	黒色頁岩	354	■ 623 F	燧 石	(15.15)	(10.12)	5.0	219.50	粗粒安山岩
291	■ 615 B	内磨石	10.0	7.4	6.1	483.80	黒色頁岩	355	■ 612.5 C	燧 石	16.0	15.1	4.6	1840.00	粗粒安山岩
292	■ 613.5 E	内磨石	13.0	5.3	4.9	271.00	黒色頁岩	356	■ 614 F	燧 石	13.4	(9.75)	5.5	1039.70	粗粒安山岩
293	■ 615 E	内磨石	10.7	7.0	3.1	387.50	黒色頁岩	357	■ 614.5 E	燧 石	9.4	8.7	4.0	423.10	山 頂 岩
294	■ 613 C	内磨石	10.85	4.4	4.0	347.20	黒色頁岩	358	■ 615.5 D	燧 石	8.9	6.8	4.7	375.70	粗粒安山岩
295	■ 615 F	内磨石	10.7	5.8	3.1	198.90	黒色頁岩	359	■ 615 F	燧 石	7.4	6.4	3.4	273.80	粗粒安山岩
296	■ 614.5 G	内磨石	8.9	5.7	3.3	154.11	黒色頁岩	360	■ 615 D	石 皿	24.0	(18.0)	7.8	2150.00	粗粒安山岩
297	■ 610 D	内磨石	8.8	5.5	4.8	282.50	黒色頁岩	361	■ 614.5 B	燧 石	(17.7)	(13.2)	(8.7)	8000.00	粗粒安山岩
298	■ 615.5 D	内磨石	10.4	5.1	4.2	253.50	黒色頁岩	362	■ 613 C	燧 石	7.9	5.2	3.0	153.19	砥 沢 石
299	■ 613.5 C	内磨石	7.6	5.0	4.6	240.30	黒色頁岩	363	■ 614.5 F	燧 石	(5.5)	7.0	1.1	38.44	砂 岩
300	■ 613.5 D	内磨石	12.4	5.9	4.0	317.90	黒色頁岩	364	■ 616 C	燧 石	(4.65)	4.25	0.9	22.37	砂 岩
301	■ 615.5 F	内磨石	6.8	4.5	3.9	161.35	黒色頁岩								

II 発掘調査の成果

石器計測表

番号	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石	材	番号	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石	材
365	■ 613.5 E	打製石斧	9.5	5.6	2.75	154.53	黒色頁岩		423	■ 614 C	削器 h	(4.9)	(4.8)	1.65	40.00	黒色頁岩	
366	■ 610.5 E	打製石斧	8.0	3.4	1.0	39.39	流紋岩		424	■ 615 F	削器 h	5.4	6.3	2.1	46.58	黒色頁岩	
367	■ 614.5 C	打製石斧	(5.8)	4.0	1.7	56.00	黒色頁岩		425	■ 610 D	削器 b	(4.8)	5.5	1.9	52.74	黒色頁岩	
368	■ 614.5 C	打製石斧	6.0	3.8	1.8	45.40	黒色頁岩		426	■ 614 C	削器 b	3.6	6.1	1.9	43.79	流質頁岩	
369	■ 613.5 B	打製石斧	(4.3)	4.0	1.8	37.69	黒色頁岩		427	■ 614 G	削器 b	4.3	6.4	1.75	44.08	黒色頁岩	
370	■ 616 F	磨製鏃	(4.6)	(4.1)	0.6	13.25	緑色片岩		428	■ 614.5 D	削器 i	6.0	(4.9)	3.0	91.73	黒色頁岩	
371	■ 609.5 C	片刃石器	8.1	5.1	2.7	129.32	黒色頁岩		429	■ 614.5 F	削器 i	5.5	6.8	2.8	84.77	黒色頁岩	
372	■ 625.5 F	片刃石器	7.7	5.5	2.3	107.54	頁岩		430	■ 616.5 C	削器 i	6.2	4.3	2.1	55.01	黒色頁岩	
373	■ 614 C	片刃石器	8.6	6.0	3.7	155.38	黒色頁岩		431	■ 615 C	削器 i	3.8	4.7	2.2	40.96	黒色頁岩	
374	■ 615 B	片刃石器	10.3	5.8	1.95	124.90	黒色頁岩		432	■ 615.5 E	削器 i	3.6	5.0	2.2	43.23	黒色頁岩	
375	■ 610 C	片刃石器	7.3	6.3	2.6	129.31	黒色頁岩		433	■ 614.5 E	削器 j	3.4	6.4	1.2	26.40	黒色頁岩	
376	■ 615.5 D	片刃石器	9.5	5.6	2.7	128.81	黒色頁岩		434	■ 614 E	削器 j	5.1	8.7	2.5	120.63	黒色頁岩	
377	■ 615 D	片刃石器	8.9	5.0	1.85	107.47	カッセル		435	■ 615 D	削器 j	5.5	7.6	0.9	39.88	黒色頁岩	
378	■ 613.5 C	片刃石器	8.3	5.9	3.5	193.88	黒色頁岩		436	■ 613.5 B	削器 j	6.5	7.5	1.75	95.71	黒色頁岩	
379	■ 614.5 B	片刃石器	10.1	6.9	2.2	163.97	黒色頁岩		437	■ 615 E	削器 j	4.1	4.3	1.9	39.72	黒色頁岩	
380	■ 616 C	鏃	(5.4)	6.9	4.3	187.78	黒色頁岩		438	■ 615.5 C	削器 j	4.2	7.6	2.1	76.46	黒色頁岩	
381	■ 614.5 C	鏃	(7.0)	(5.6)	(3.2)	173.95	黒色頁岩		439	■ 614 D	削器 k	5.7	4.6	1.75	50.16	黒色頁岩	
382	■ 615 E	鏃	(6.8)	(5.4)	(4.1)	170.96	黒色頁岩		440	■ 614.5 E	削器 k	3.9	6.1	1.2	23.70	黒色頁岩	
383	■ 615 D	石核	(4.8)	(4.9)	(2.8)	66.22	流紋岩		441	■ 614 D	削器 k	5.7	5.5	1.3	38.68	黒色頁岩	
384	■ 610.5 E	石核	(9.1)	(4.3)	(1.8)	74.69	流紋岩		442	■ 615 C	削器 k	3.7	7.0	1.3	33.46	黒色頁岩	
385	■ 614 C	石核	7.9	3.9	2.5	87.58	流紋岩		443	■ 610.5 D	削器 k	3.9	5.9	1.4	26.61	黒色頁岩	
386	■ 610 D	石核	6.3	5.2	2.4	88.33	黒色頁岩		444	■ 614 C	削器 k	6.5	6.1	2.2	81.37	黒色頁岩	
387	■ 615.5 D	削器 a	7.2	3.2	1.6	34.41	黒色頁岩		445	■ 614 F	削器 k	4.5	5.3	1.1	22.30	黒色頁岩	
388	■ 613.5 D	削器 a	(3.5)	(4.7)	(1.5)	27.05	黒色頁岩		446	■ 616 C	削器 k	3.0	3.3	1.3	10.50	黒色頁岩	
389	■ 613.5 C	削器 a	(4.8)	(4.3)	(1.5)	39.08	黒色頁岩		447	■ 615 C	削器 k	4.0	3.6	1.3	15.95	黒色頁岩	
390	■ 615 E	削器 a	4.1	3.8	1.0	16.86	黒色頁岩		448	■ 613.5 C	削器 k	4.4	4.4	0.85	13.33	黒色頁岩	
391	■ 614.5 D	削器 a	(4.2)	2.9	0.7	6.92	黒色頁岩		449	■ 615 E	削器 k	6.6	7.9	1.5	89.63	黒色頁岩	
392	■ 614 C	削器 a	4.7	2.4	1.1	11.18	頁岩		450	■ 615 E	削器 k	6.3	9.9	1.6	69.52	黒色頁岩	
393	■ 616.5 C	削器 b	5.6	4.6	2.1	38.52	黒色頁岩		451	■ 613.5 D	削器 k	7.7	6.3	3.0	128.92	砂	
394	■ 614.5 E	削器 b	5.0	3.4	1.2	20.54	黒色頁岩		452	■ 610 C	削器 k	4.8	5.8	1.15	25.52	黒色頁岩	
395	■ 614 D	削器 b	5.0	4.0	1.0	18.71	黒色頁岩		453	■ 610 E	削器 i	3.6	3.4	1.3	16.08	黒色頁岩	
396	■ 615.5 D	削器 b	9.0	10.0	4.4	277.7	黒色頁岩		454	■ 614 D	削器 i	4.4	4.2	1.3	22.52	黒色頁岩	
397	■ 613 B	削器 b	11.8	4.5	3.0	214.8	黒色頁岩		455	■ 615.5 D	削器 m	3.3	5.2	1.25	28.08	黒色頁岩	
398	■ 613.5 C	削器 b	6.4	4.7	1.4	37.16	黒色頁岩		456	■ 614.5 G	削器 m	2.4	(5.0)	1.3	16.66	黒色頁岩	
399	■ 615 F	削器 b	4.7	4.0	1.2	21.37	黒色頁岩		457	■ 614 E	三稜形削器	9.2	4.7	4.7	218.20	黒色頁岩	
400	■ 613.5 C	削器 c	7.1	6.4	2.1	87.29	黒色頁岩		458	■ 615 D	三稜形削器	8.8	4.8	5.2	204.30	黒色頁岩	
401	■ 616 D	削器 c	6.3	5.2	1.7	48.17	黒色頁岩		459	■ 610.5 D	三稜形削器	(10.6)	5.0	5.7	351.30	黒色頁岩	
402	■ 614 C	削器 c	(4.5)	5.25	1.3	28.58	黒色頁岩		460	■ 614 C	三稜形削器	14.4	4.8	(3.4)	211.40	黒色頁岩	
403	■ 615 D	削器 d	6.5	3.3	1.4	30.91	黒色頁岩		461	■ 614 C	有角三稜形削器	9.1	4.8	5.5	258.90	黒色頁岩	
404	■ 615 D	削器 d	(5.9)	4.8	2.7	48.67	砂		462	■ 610 D	有角三稜形削器	9.6	6.9	6.6	438.80	砂	
405	■ 615.5 C	削器 e	7.6	4.3	1.1	32.88	流紋岩		463	■ 615 F	有角三稜形削器	6.5	4.0	3.8	130.70	黒色頁岩	
406	■ 615.5 D	削器 e	6.9	4.5	1.2	33.71	黒色頁岩		464	■ 616.5 E	有角三稜形削器	4.3	5.0	3.0	98.60	黒色頁岩	
407	■ 615.5 C	削器 e	5.7	3.6	1.3	27.64	黒色頁岩		465	■ 614.5 D	有角三稜形削器	(7.5)	4.2	3.4	119.80	砂	
408	■ 615 C	削器 e	6.0	5.6	1.75	56.05	黒色頁岩		466	■ 614 C	有角三稜形削器	6.0	3.9	4.1	123.50	黒色頁岩	
409	■ 614.5 C	削器 e	5.0	3.5	1.4	32.14	黒色頁岩		467	■ 615 C	有角三稜形削器	7.8	4.5	4.05	166.60	黒色頁岩	
410	■ 614.5 F	削器 e	6.0	5.0	1.6	46.38	黒色頁岩		468	■ 615.5 D	有角三稜形削器	7.6	6.2	4.6	278.50	黒色頁岩	
411	■ 614 E	削器 e	6.7	4.7	1.4	35.15	黒色頁岩		469	■ 616.5 F	有角三稜形削器	7.5	5.1	5.1	233.30	黒色頁岩	
412	■ 614.5 D	削器 e	6.8	5.7	1.2	60.14	黒色頁岩		470	■ 614 F	有角三稜形削器	(8.8)	7.9	6.5	507.20	黒色頁岩	
413	■ 614 C	削器 e	7.8	3.8	2.0	60.00	黒色頁岩		471	■ 614.5 C	有角三稜形削器	(7.7)	(5.0)	4.8	235.90	黒色頁岩	
414	■ 613.5 D	削器 e	7.3	2.6	2.5	32.25	黒色頁岩		472	■ 610 E	有角三稜形削器	(7.6)	6.4	4.3	249.90	黒色頁岩	
415	■ 613.5 B	削器 f	5.1	4.6	2.6	68.68	黒色頁岩		473	■ 615 B	有角三稜形削器	8.3	6.4	5.4	242.30	黒色頁岩	
416	■ 614.5 B	削器 f	6.2	10.4	2.7	198.5	黒色頁岩		474	■ 613.5 D	有角三稜形削器	8.2	4.9	4.4	229.50	黒色頁岩	
417	■ 613.5 F	削器 f	5.3	9.8	2.4	122.8	黒色頁岩		475	■ 614 B	有角三稜形削器	7.4	7.0	5.9	357.20	黒色頁岩	
418	■ 614.5 D	削器 f	(1.7)	7.6	1.1	15.66	黒色頁岩		476	■ 613.5 D	有角三稜形削器	9.6	7.5	5.5	466.40	黒色頁岩	
419	■ 614 C	削器 f	3.9	7.3	1.5	53.13	黒色頁岩		477	■ 615.5 D	有角三稜形削器	(8.2)	6.4	5.3	330.20	黒色頁岩	
420	■ 616.5 D	削器 f	4.3	5.4	2.1	43.34	黒色頁岩		478	■ 614 B	有角三稜形削器	7.3	5.2	4.3	177.20	黒色頁岩	
421	■ 614 D	削器 g	(2.9)	3.6	0.7	10.70	黒色頁岩		479	■ 615 E	有角三稜形削器	(5.9)	(5.9)	4.4	164.40	黒色頁岩	
422	■ 610 D	削器 h	4.5	5.1	1.5	38.55	黒色頁岩		480	■ 613.5 C	有角三稜形削器	(6.5)	6.0	3.3	188.80	黒色頁岩	

3 縄文時代の遺物

番号	出土位置	器 種	長さ	幅	厚さ	重量	石 材	番号	出土位置	器 種	長さ	幅	厚さ	重量	石 材
481	■ 表 土	石製土器	(5.6)	6.8	5.3	289.50	黒色頁岩	508	■ 614.5 E	灰土質滑石	6.1	2.9	0.8	11.33	珉質頁岩
482	■ 615 D	石製土器	(7.8)	(6.8)	4.55	183.50	黒色頁岩	509	■ 614.5 G	緑土質滑石	4.6	6.6	2.1	64.88	黒色頁岩
483	■ 615 C	石製土器	11.0	5.4	4.7	372.60	横粒安山岩	510	■ 613.5 D	閃石	(7.5)	9.0	(5.1)	498.80	石英閃緑岩
484	■ 614.5 C	石製土器	10.1	7.3	6.2	592.10	珉	511	■ 614 C	燧石	11.6	6.1	3.8	382.70	黒色頁岩
485	■ 表 土	石製土器	(9.8)	8.1	4.7	337.30	珉	512	■ 614 C	燧石	13.6	11.4	4.3	956.00	石英閃緑岩
486	■ 615.5 C	石製土器	9.4	6.6	3.9	332.40	石英閃緑岩	513	■ 613 F	石皿	32.5	28.5	9.8	1800.00	滑石質燧岩
487	■ 616 C	石製土器	(5.3)	(5.5)	(5.2)	214.60	横粒安山岩	514	■ 614.5 D	石皿	(20.4)	(17.6)	10.5	4560.00	横粒安山岩
488	■ 613.5 B	石製土器	(7.9)	6.4	4.2	319.40	珉	515	■ 617 F	磨石	12.0	(7.0)	2.6	259.30	横粒安山岩
489	■ 614.5 B	石製土器	10.1	6.7	5.5	515.80	石英閃緑岩	516	■ 614.5 H	磨石	(11.2)	(6.8)	(4.2)	448.70	灰色安山岩
490	■ 617 F	石製土器	(9.1)	5.7	3.7	319.30	閃緑岩	517	■ 616 B	磨石	9.6	7.2	4.2	440.10	閃緑岩
491	■ 表 土	石製土器	(10.5)	7.1	3.9	460.80	砂岩	518	■ 615 E	磨石	8.7	6.3	4.8	325.20	横粒安山岩
492	■ 615 C	石製土器	9.3	6.8	4.7	465.60	安賞玄武岩	519	■ 615.5 D	磨石	8.5	7.0	4.8	406.40	横粒安山岩
493	■ 614 B	石製土器	10.5	6.4	4.65	463.20	輝緑岩	520	■ 614.5 C	磨石	(8.1)	(6.5)	(4.3)	322.60	石英閃緑岩
494	■ 表 土	石製土器	9.3	5.5	4.95	359.50	流紋岩	521	■ 615 E	磨石	(7.0)	(5.6)	(2.1)	11.28	横粒安山岩
495	■ 615.5 C	石製土器	7.3	4.3	1.5	50.15	黒色頁岩	522	■ 615 E	磨石	(10.1)	8.3	4.3	559.20	珉
496	■ 610.5 B	石製土器	5.9	4.1	1.4	39.62	黒色頁岩	523	■ 614.5 B	磨石	(12.7)	(10.0)	(4.3)	728.70	横粒安山岩
497	■ 614.5 F	石製土器	4.8	4.0	1.3	17.66	黒色頁岩	524	■ 615.5 F	磨石	10.5	8.0	5.4	537.70	横粒安山岩
498	■ 615 B	石製土器	11.2	6.2	2.1	121.03	珉	525	■ 616 D	磨石	(8.5)	(8.2)	4.9	479.90	横粒安山岩
499	■ 610.5 E	石製土器	12.7	8.3	1.9	203.50	珉	526	■ 613.5 D	石皿	(17.6)	(16.0)	9.5	3780.00	横粒安山岩
500	■ 613.5 D	石製土器	4.4	(4.2)	1.4	27.41	黒色頁岩	527	■ 613.5 D	石皿	(15.6)	(14.1)	8.2	2350.00	横粒安山岩
501	■ 614 C	石製土器	7.6	3.5	0.9	20.79	黒色頁岩	528	■ 623 F	石皿	(12.8)	(10.3)	(3.5)	488.90	横粒安山岩
502	■ 615 D	石製土器	1.9	4.9	0.6	3.79	黒色頁岩	529	■ 623 F	石皿	(10.5)	(8.7)	(3.6)	268.30	横粒安山岩
503	■ 608 F	石製土器	(5.9)	3.8	0.4	10.66	黒色頁岩	530	■ 613.5 D	石皿	13.4	10.2	6.4	619.70	横粒安山岩
504	■ 615 E	石製土器	6.3	3.6	1.7	26.50	黒色頁岩	531	■ 626.5 D	砥石	5.7	2.8	1.2	38.77	砥 石
505	■ 615.5 C	石製土器	3.4	4.8	1.15	17.05	黒色頁岩	532	■ 595.5 C	砥石	6.8	3.7	0.9	32.71	頁 岩
506	■ 611 D	石製土器	4.6	10.9	0.95	32.38	黒色頁岩	533	■ 612 B	砥石	7.0	3.9	1.5	27.84	燧 岩
507	■ 614 C	石製土器	5.7	5.2	2.4	61.87	黒色頁岩	534	■ 614.5 D	砥石	6.6	3.3	3.1	71.07	白色凝灰岩

閃緑岩1点、珉岩1点となっている。偏平な円礫を用いたもので、両面に摩擦痕が認められる。

石皿 (第29図360~361)

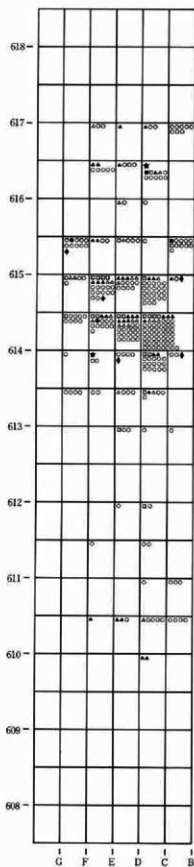
計18点出土している。全て破損品であり、完形品は含まれていない。石材をみると粗粒安山岩がおよそ80%を占め、その他溶結凝灰岩、緑色頁岩が用いられている。素材は偏平な礫が用いられ、使用面である器体中央部は大きく凹み、縁辺部は高まり、稜をもつ形態が多い。

砥石 (第29図362~364)

計7点出土している。Ⅲ区で5点、Ⅰ区およびⅣ区でそれぞれ1点づつ認められている。石材をみると、砂岩2点、凝灰岩質砂岩1点、砥沢石2点、頁岩1点、白色凝灰岩1点である。偏平な礫の平坦面に当たる両面もしくは片面にU字状の研摩溝が認められる。



▲ 剥片類



- 第Ⅰ群 ▲ 第Ⅱ群4類
- 第Ⅱ群1類 ● 第Ⅱ群5類
- 第Ⅱ群2類 ○ 第Ⅱ群6類
- ▲ 第Ⅱ群3類 ◆ 第Ⅱ群7類

第30図 土器分布図

C. 分布

出土した遺物類については、先に報告した通りである。調査では住居、土坑などの遺構は検出されておらず、遺物類も層位的な出土状態を示していない。そのため調査時には、出土位置を記録しながら遺物を取り上げている。

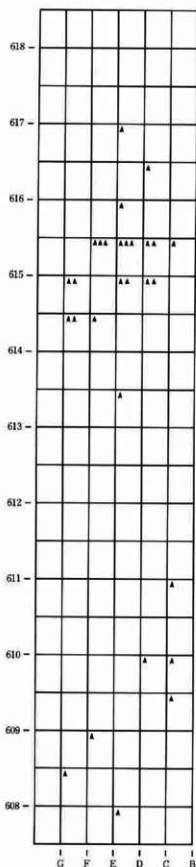
ここでは、土器・石器類の種別分布図を作成し、その動向をみるものとする。分布をみるにあたり、特に遺物の集中したⅢ区を対象とし、遺物の出土位置はグリッド単位で捉えている。なお、グリッド内に示す遺物点数は、基本的に出土した遺物数を表わしている。平面分布図を作成する際、垂直分布についても作成したが、土器および石器いずれについても標高70m付近に集中し、共合してしまうため、ここでは平面分布を主としてみるものとする。

なお、縄文時代の遺物類の集中するⅢ区には、方形区画の二重の溝により構成される中世居館が存在するが、遺物類はこの区画の内側の溝に囲まれた範囲に相当する部分に密集している。この溝の掘削により縄文時代の遺物はかなり失なわれているものとみられるが、溝の区画内の出土状況を見ると、居館構築に際し内側部分についてそれほど掘削もしくは加工が行われなかったことを示しているよう。

このこととは別に、時代を隔てて、この地域が居住域・生活域として利用されている点は興味深い。

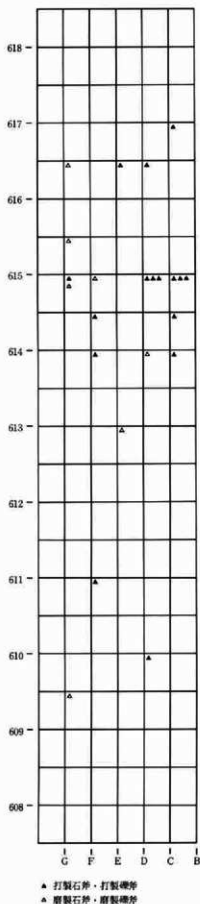
石器の分布（第31図）

第Ⅰ群および第Ⅱ群土器の分布を示している。草創期にあたる第Ⅰ群土器は2点のみ確認されただけであり、点的分布を示すのみである。ただ、中心的存在である第Ⅱ群土器の分布域内に存在することは、大きな時間的格差をもつものの、草創期においてもこの地が



- ▲ 石鏃

第31図 石鏃分布図



第32図 打製石斧・打製礮斧
磨製石斧・磨製礮斧分布図

生活域として利用されていたことを示している。

第Ⅱ群土器である熱糸文系土器については集中的な分布状態を示す。土器型式については複数存在するものの、その密集度は極めて高く、各類とも共通した分布傾向を示す。量的に最も多い6類が分布域を主体的に構成するため、なおさら類別分布の偏差をなくしている。

分布傾向をみると、とくに613ラインから615.5ラインにかけて密集域があり、その北側に接して616ラインから617ラインに別のまとまりがみられる。さらに、密集域南側の610ラインから612ライン付近にやや分散的ながらも一つ別のまとまりが認められる。

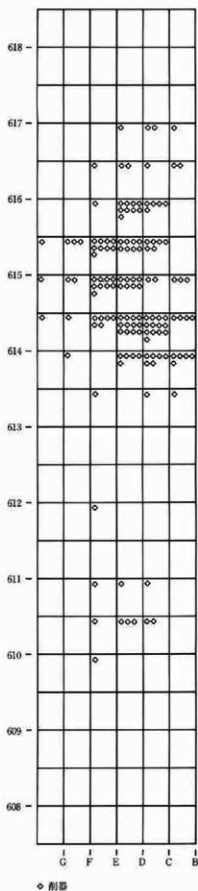
このように認められる分布傾向であるが、そこに存在する土器のあり方は類似しているといえる。ただ、610ラインから612ラインに認められるまとまりには、3類・6類土器の存在が目立ち、中央部の密集部分およびその北側に接するまとまりには各類土器が共存している。この分布傾向からみれば、中央部密集部分とその北側のまとまりについては同じ分布域を占めるものといえ、量的格差はあるものの、土器については、このように大きく2つの分布域が存在するものといえよう。

ただ、この2つの分布域をみる際、その間に中・近世の土坑群が存在することが注意され、土器のみの現象的な分布だけをとり上げ分析するには、やや問題が生じることもつけ加えておこう。

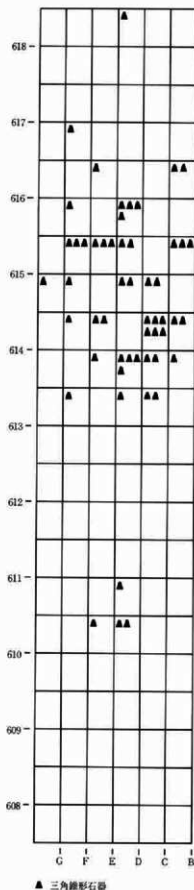
遺物の分布については、この土器の分布傾向を基本的に石器各種の分布をみていくものとした。

石鏃の分布 (第31図)

石鏃は計36点出土しているが、集中傾向を示す29点について図示している。分布傾向をみると、614ラインから617ラインにかけ集中



第33図 箭鏃分布図



第34図 三角錐形石器分布図

域があり、608ラインから611ラインにはやや分散的な分布域がみられる。この分布傾向をみると、第30図に示す第Ⅱ群土器の分布傾向と類似する点が認められる。このように分布域が重複することからみれば、その存在において両者は一定の関連を持つことが考えられよう。

打製石斧・磨製石斧類の分布 (第32図)

この分布図では、打製石斧・打製礮斧と磨製石斧・磨製礮斧の二者の分布を示している。打製石斧と磨製石斧には分布偏差はみられず同様の分布傾向を示している。分布をみると613ラインから617ラインに集中傾向が認められ、609ラインから611ラインには分散的なまとまりがみられる。

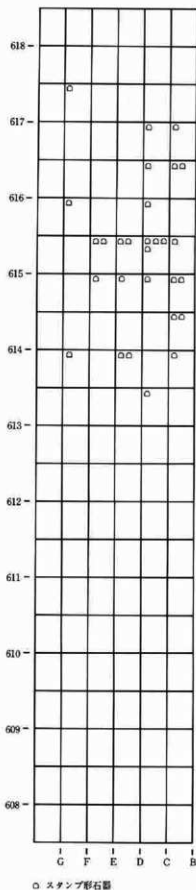
このような分布のあり方は、第Ⅱ群土器にみられる分布と共通し、その範囲もほぼ重複している。

削器類の分布 (第33図)

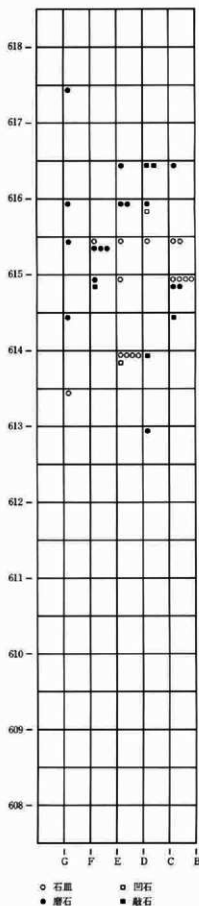
各種削器類の分布を一括して表示している。分布傾向をみてみよう。614グリッド付近から617グリッドにかけて集中的な分布が認められる。この部分は極めて集中度が高く、削器類のおよそ93%がこの範囲に密集している。また、この集中部分の北側にあたる610グリッドから612グリッドはやや分散的なが、もう一ヶ所分布域が認められる。削器類は総数145点と量的に多く出土しているため、その分布には際立った傾向が認められる。この分布傾向は第Ⅱ群土器における分布状況とほぼ一致するもので、極めて強い関連性がうかがわれよう。

三角錐形石器の分布 (第34図)

三角錐形石器は総数54点出土しているが、全てⅢ区から検出されている。第34図には全点数が表示してある。やはり顕著な分布傾向が認められる。613.5グリッドから617グリッドにかけて集中的な分布がみられるが、この



第35図 スタンプ形石器分布図



第36図 石皿・凹石
磨石・敲石分布図

部分には総点数のおよそ93%が密集している。また、610グリッドから611グリッドにかけては4点と少数ながら分布が認められている。極めて小さな分布域であるが、北側の集中分布域と比べ、対照的な分布傾向を示すが、これは第Ⅱ群土器にみられる分布傾向と類似し、その範囲もほとんど一致しているといつてよい。

スタンプ形石器の分布 (第35図)

スタンプ形石器は総点数35点出土しているが、第35図にはそのうち27点の分布状況が表示してある。分布をみると、613グリッドから617グリッドにかけて集中する傾向が認められるが、土器もしくは他器種にみられたような南側における分布は認められない。ただ、スタンプ形石器の分布域は、第Ⅱ群土器における集中分布域とほとんど一致している。

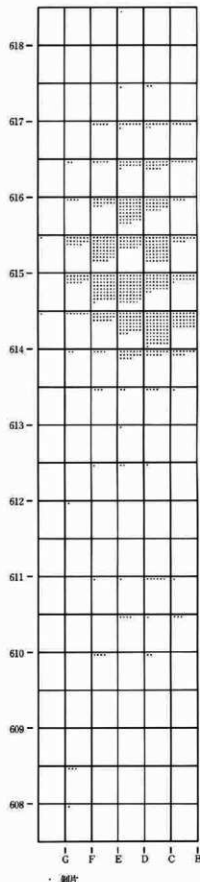
石皿・凹石・磨石・敲石の分布 (第36図)

第36図には、石皿・凹石・磨石・敲石類の分布を表示している。分布域をみると、613グリッドから617グリッドにかけ各器種が散布している。この分布域自体は、第Ⅱ群土器の集中分布域とほぼ共通したものであり、同じ傾向を示している。

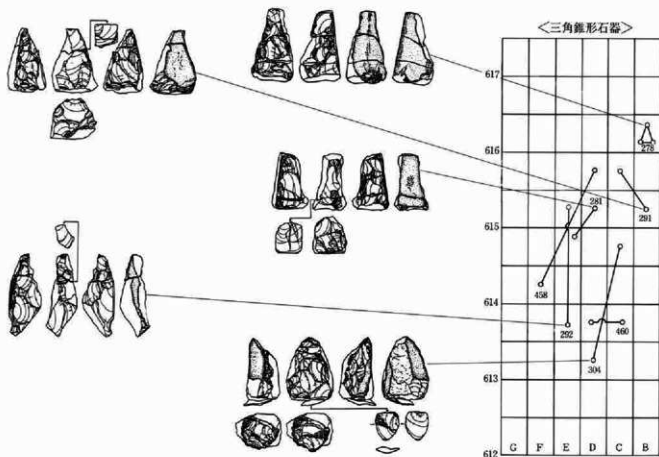
この分布域内における石器各器種のあり方をみると、それほど顕著ではないものの、石皿類が分布域南東側に、磨石類が北西側に各々偏在する傾向がみられる。

剥片の分布 (第37図)

剥片については、613グリッドから617グリッドにかけ集中的な分布を示し、610グリッドから611グリッドにかけては薄い分布域が認められる。この集中分布域との間にも分散的に存在し、さらに南側の608グリッド付近にも数点散布している。剥片類の分布についても、第Ⅱ群土器の分布傾向とほぼ一致している。



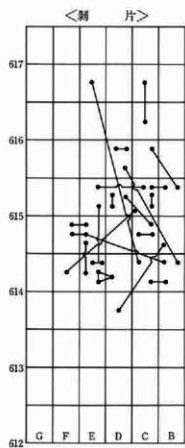
第37図 剥片分布図



土器および石器類の分布図あわせて、石器(三角錐形石器)、剥片の接合関係について示しておきたい。

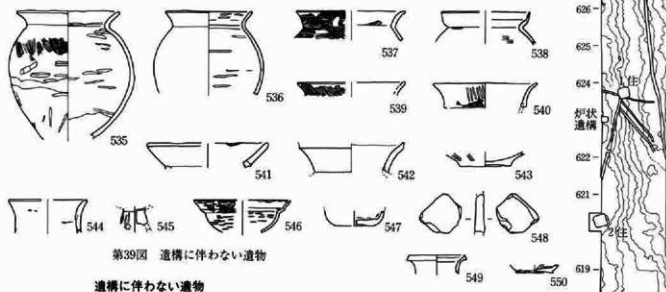
石器総数約2600点のうち、その82%を占める剥片・破片の存在から、この場所が石器製作に関係する作業跡であることが考えられ、さらに石材からみた場合も、石器に使用される石材構成と、剥片・破片における石材構成はほぼ一致しており、この点からも石器製作に関連することが指摘されよう。しかし、このことを具体的に分析するには、石器類と剥片類の接合関係の把握によらなければならない。石材のうち、剥片類の70%を占める黒色頁岩が注目され、石器類の中で黒色頁岩の占める比率の高い三角錐形石器もしくは削器類の接合関係は興味のある点である。

第38図には三角錐形石器および剥片の接合関係を図示している。接合作業に充分な時間がとれなかったため、石器製作に関する良好な接合資料は得られていない。三角錐形石器をみると、石器本体の折損による接合がほとんどであるが、304については底面加工に伴う剥片との接合が認められ注目されよう。なお、剥片については、図に示すような接合関係が認められている。



第38図 石器の接合関係 (1 : 1000)

4. 古墳時代の住居と遺物



第39図 遺構に伴わない遺物

遺構に伴わない遺物

絶対量は少ないが、Ⅱ・Ⅲ区を中心に第39図に示す古墳時代前期の土師器片が見られた。壺(535・536・537・538・539)は、538以外は外面コバメ調整で、受け口口縁の538は削り調整である。537のみ、外面にスス付着。壺(540・541・542・543・544)もコバメ調整を主とする二重口縁のものが多い。540は、Ⅴ区出土。543は脚柱部中央に円形アテ調整痕がある。544は単口縁で、焼成は遅元。

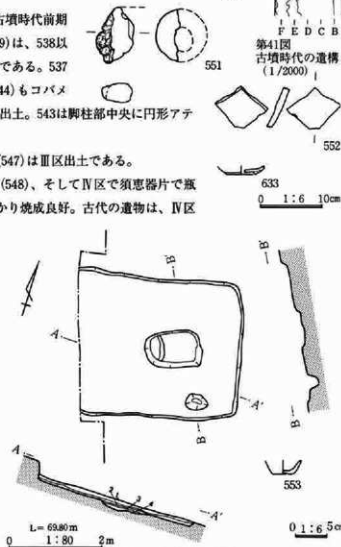
高坏(546)は1住への混入。器台(545)と手づくね(547)はⅢ区出土である。

古墳時代後期については、Ⅰ区16溝混入の埴輪片(548)、そしてⅣ区で須恵器片で瓶口縁(549)・甕胴部(552)がある。前者は自然釉がかかり焼成良好。古代の遺物は、Ⅳ区で灰軸陶器埴(633)と土師質土器杯(550)Ⅰ区7溝の土師輪羽口(551)がある。

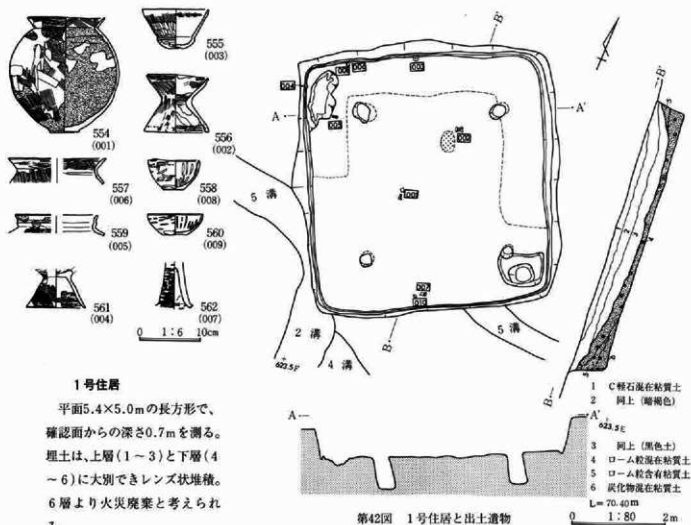
炉状遺構

中央の小判形(1.2×0.8m)の炭化物粒・焼土粒混在土のピットの存在で確認。このピットは西側の底が一段下がっている。周囲の方形プラン(3×3.5m以上)は、必ずしも明瞭ではなく、硬化した床面も見られない。僅かに中央ピット南側に深さ20cm程度のピットが単独である。中央ピット3層上面に須恵器壺片(紛失)があり、南東側に床より3cmで土師器手づくね片(553)が見られた。このような状態のため、方形プランの堅穴住居とは断定しがたく、両遺物の一括性も言い切れない。

あるいはイロリ小屋のような施設であろうか。



第40図 炉状遺構



1号住居

平面5.4×5.0mの長方形で、確認面からの深さ0.7mを測る。埋土は、上層(1～3)と下層(4～6)に大別できレンズ状堆積。6層より火災廃棄と考えられる。

南側でⅣ区2・5溝と重複し、4溝と近接。土層的に不明だが、本遺構が古いと思われる。

床面は破線より南側が硬い。周溝全周し、3m間隔で径25cmほどの4柱穴が並ぶ。東角に長方形の浅い掘り方内に床より60cmの深さの底径30cmのビットがある。中央北側に0.5×0.3mで焼土が散る。長さ10cm強の自然石が中にあり、掘りこみは極めて浅い。かであろう。西角には1.2×0.6mの不定形の浅い落ちこみがあるが、性格不明。遺物は、西側に比較的多い。中央部のものは上層より火災後の投棄の可能性もある。単口縁甕554は内外面に使用痕がよく残る。同じ単口縁甕片557は焼成異りほとんど使用痕ない。台付甕台部561とS字甕口縁559は胎土、焼成似ており、共に使用痕あり。

器台556と埴555は赤色塗彩痕が残るが、前者は2次に付着した感じである。他に供献具として高杯脚部562と小壺560があるが、これらはいずれも火災のための2次焼成痕を多少とも残す。

2号住居

平面5.9～6.4×5.5～5.9mの南西側が短辺の台形に近い形状で、確認面からの深さは0.7mである。また各辺の壁外に床からの高さ0.3～0.6mで幅0.6～1.0mほどのテラス状の落ちこみがある。特に北西辺にはそこに3個のビットも見られ土層状況からも、壁穴に付随する部分と思われる。埋土は、1住と同様に上層(1～5)と下層(6～8)に大別でき、レンズ状堆積。

床面は、南西辺と北東・南東辺に幅1m中央より3～5cm高い帯状部分が見られる。ベッド状施設と思われる、四角する周溝から延びる間仕切り状の溝が南角側にある。2.8mと3.1m間隔の4柱穴以外に、いくつかのビットが検出される。南角のものは深さ30cmで底に粘土が5cmほど貼られる。西角のものは深さ25cmほど。

4 古墳時代の住居と遺物

北西辺と南東辺に長さ50cmほどの曲った溝状の凹みが、北東辺には深さ20cmと10cmの梯子穴ピットがある。

炉は、主柱穴内の西角側にあり、深さ10cmの楕円形の落ちこみ内の焼土の上に焼けた粘土板024が乗り、南側に粘土が北側に炭化物が散っていた。落ちこみの上に粘土での構造物があったと思われる。

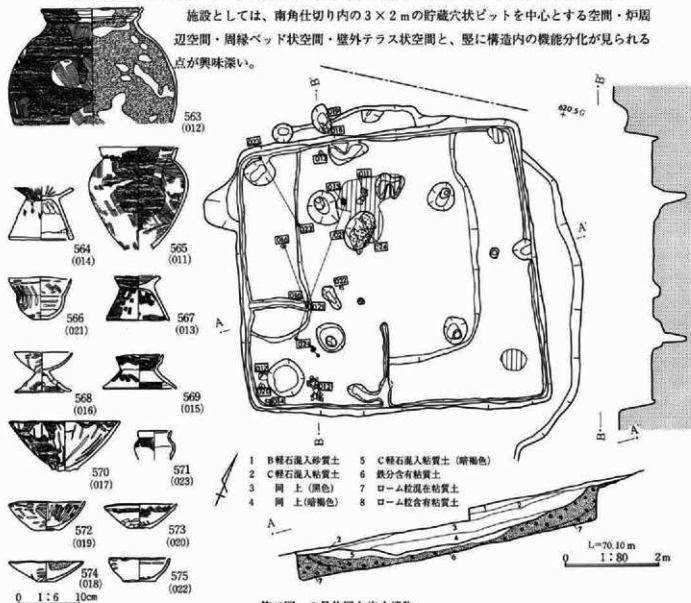
遺物は、炉周辺と南角の仕切り内に集中する。S字寛の上位と台部が、炉周辺565・567と南角563・564に見られる。それぞれ同一個体の可能性もあるが、使用痕と共に廃棄後の2次焼成も受ける。

研磨した供献具は、高坏568・570・埴566・片口埴572があり、前3者は赤色塗彩される。572を除いて廃棄状態での出土であり、2次焼成受ける。非研磨のものは、器台569・埴573とミニチュア甕571があり、器台は炉近くで完存出土しており、実用的な使用も考えられる。573は、コバメ調整後ナデ調整して赤色塗彩。基本的に572と同一の製作技法である。

他に片口埴574と埴575がある。574は、572と共に壁外ピットより出土。575は、中央で4cm床より深い所で見つかった破片と埋土外の破片が接合したため、この遺構に伴わない可能性もある。

本遺構は、土層的に明瞭でないが、遺物の2次焼成痕や炭化粒の散布より、火災廃棄と考えられる。

施設としては、南角仕切り内の3×2mの貯蔵穴状ピットを中心とする空間・炉周辺空間・周縁ベッド状空間・壁外テラス状空間と、壁に構造内の機能分化が見られる点に興味深い。



第43図 2号住居と出土遺物

5. 中世居館と近世屋敷群

Ⅲ区で検出された溝・井戸・土坑の各遺構は、基本的に中世居館と近世屋敷群の構成要素と考えられる。残念ながら調査時にはそのような認識を持ちえない状態であったため、提示できる情報は極めて限られる。

中世居館

同一方向の大小の方形区画を呈する1溝と2溝そして方形竪穴で構成される。

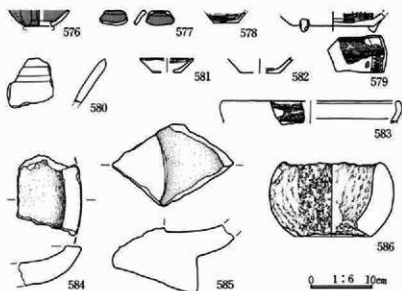
1溝は、北西角が鋭角、南西角が鈍角で曲っており南北間の距離は約83m、東西は33mが検出されている。この溝は、上幅2.4m底幅0.7m深さ0.9m以上の薬研箱堀で、水流痕また土崖崩落痕は見られない。

2溝は、方形区画の南西角部分のみの検出で、南北方向35m以上、東西は7m以上続く。上幅2.9m底幅0.6m深さ1m以上の薬研箱堀である。同様に水流痕・土崖崩壊痕は見られない。南北走向の北側に1井戸と重複し、3の南で方形竪穴に接する。また南西角のやや北側で30cmほどの段差で急に深くなる。

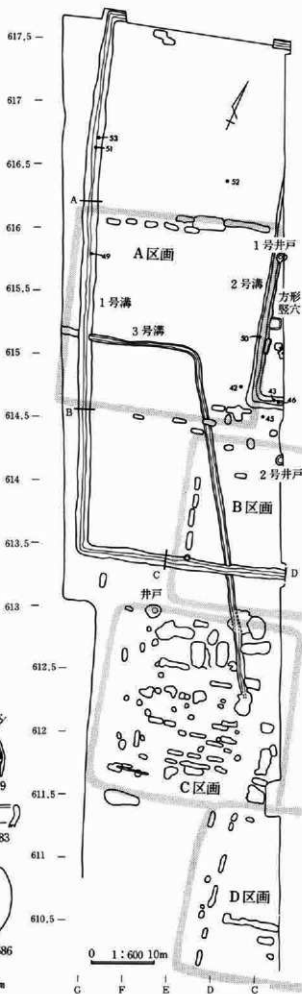
方形竪穴は、2溝南北辺の内側に接しており、1.5×1.6m以上の長方形で、確認面からの深さは10cmほど溝の底からは30cmの高さにある。この場合性格不明。

遺物は絶対量が多くない。1溝の西側北寄りの埋土から灰釉脚付播鉢579・瓦質土器コネ鉢580・同火鉢片583が出土。579の軸は自然軸の可能性もある。焼成良好で硬質、貼り付けの脚部の胎土は、本体と異なる。2次焼成を受けている。産地不明。

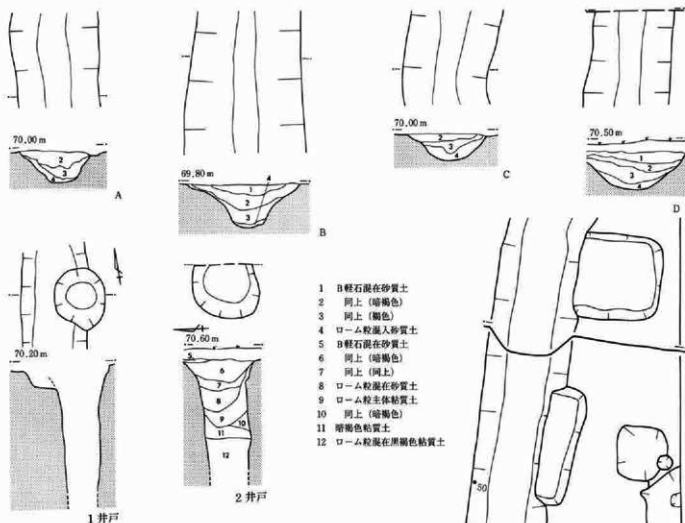
2溝の南西角周辺からは、その他が集中して出土。竜泉窯系繪蓮弁文鉢片576・577は、前者が釉化してお



第44図 中世居館出土遺物



第45図 中世居館と近世屋敷跡群

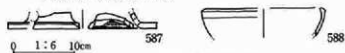


り溝内出土。土師質土器578・582は、共に溝内出土で底径小さく体部直線状。後者は2次焼成。同小皿581は口縁に油煙付着している。またここからは、安山岩質の茶白・石鉢584・585そして底部有孔石鉢586が見られた。後者の機能は不明で、加工は粗い。

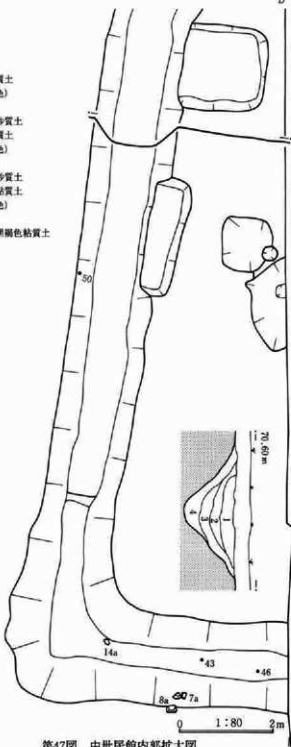
近世屋敷群

中世居館と重複して、幅1m長3mほどの長方形土坑が規則正しく並んで検出された。これらは一辺30m強の正方形区画を意識しており、図のように4区画が想定できる。このうちC区画は、最近まで人家があったところである。1井戸はA区画の、2井戸はB区画に入っており、一般に近世の屋敷区画の周縁にこのような土坑群が並ぶことから、A・Bは井戸を伴う屋敷跡と考えられる。

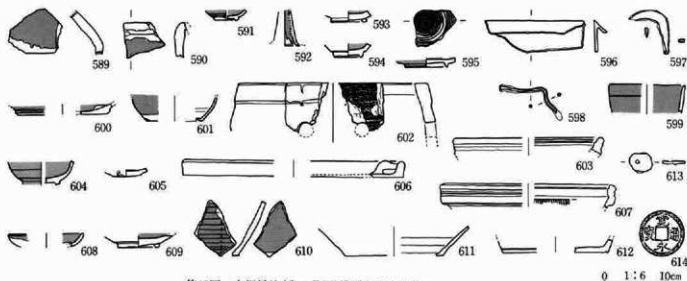
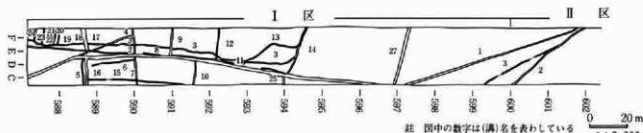
土師質土器鉢588はA区画北側より、同カマド台587はB区画南側より検出された。



第46図 近世屋敷群出土遺物



第47図 中世居館内郭跡大図



第48図 南側低地（Ⅰ・Ⅱ区）溝群と出土遺物

南側低地（Ⅰ・Ⅱ区）の溝群

ここでは、300m強の範囲で大小併せて計30条の溝が検出された。全体を中世と近世に分けられる。

中世の溝（Ⅰ区2・5・7・9・14溝、Ⅱ区3溝）

Ⅰ区4溝より常滑系壺片589そして590が同3溝の出土と考えられること、Ⅰ区4溝が同1溝より、及び14溝が13溝より古いこと、さらに平断面の特徴により推定した。

中心となるのは南北に走るⅠ区2・3溝である。これに対して直交方向に5・7・9そして19-24の各溝が掘られている。14溝は2・3溝の取水溝であろう。常時流水があったのは、土層からは7溝だけである。そして7溝から新しく2・3溝を切る形で4溝が掘られたのだろう。

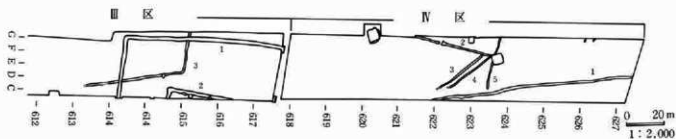
近世の溝（Ⅰ区1・6・10・12・13・16-18・25・27溝、Ⅱ区1・2溝）

南北に走るⅠ区1溝が中心である。この溝は、南端で既存の4溝にあわせて走向を変えている。この溝には常時水が流れていた形跡があり、取水溝はⅡ区1溝と13・27溝だろう。中世に比べ直交方向への分岐溝が減っている。

Ⅰ区1溝の出土遺物は、施軸陶器では瀬戸美濃系が灰軸壺591、天目壺594、餡軸壺593、灰軸土瓶592があるが、591は他より古く7溝のものの可能性がある。また唐津系刷毛目皿595があり、土器では内耳盤606、七厘602、そして鉄器では農具刃部596、小鎌597、火箸598、が見られた。Ⅱ区1溝からは、唐津系灰軸鉢600、同二軸瓶601があり、16溝からは瀬戸美濃系餡軸壺599が出ている。

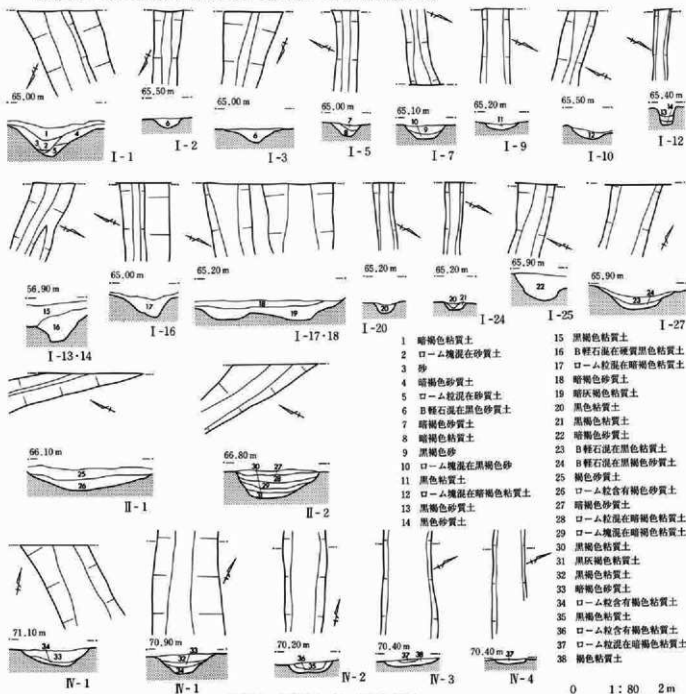
他にⅠ区1溝の周辺で、見込の透明軸を蛇ノ目にはいだ褐軸磁器壺604、唐津系灰軸瓶605、瀬戸美濃系志野小皿608、同鉢609、同分け鉢610、そして丹波系播鉢603、堺系播鉢607、また瓦質土器盤612、同小泉焼鉢611が出土。さらに有孔円盤状鉄製品613も見られた。新寛永614はⅡ区採探。

調査時の認識の問題もあるが、近世の遺物ではこれらに当然伴うべき伊万里磁器が全く見られない点に注意を要する。全体にこれらの溝は、中世から近世に継続的に維持された農業用水路と考えるべきだろう。



北側低地(IV区)の溝群

ここでは古墳時代竪穴住居と重複隣接して120mの間に5条が検出された。このうち1.5~2mの間隔で平行する3・4溝は道路側溝の可能性があり、灰軸陶器が接して出土している。直交2・5溝は、近世以降の地境であろう。100m以上直線状に延びる薬研堀の1溝は時期性格不明。



- 1 暗褐色粘質土
- 2 ローム塊混在砂質土
- 3 砂
- 4 暗褐色砂質土
- 5 ローム粒混在砂質土
- 6 B軽石混在黒色砂質土
- 7 暗褐色粘質土
- 8 暗褐色粘質土
- 9 黒褐色砂
- 10 ローム塊混在黒褐色砂
- 11 黒色粘質土
- 12 ローム塊混在暗褐色粘質土
- 13 黒褐色砂質土
- 14 黒色砂質土
- 15 暗褐色粘質土
- 16 B軽石混在硬質黒色粘質土
- 17 ローム粒混在暗褐色粘質土
- 18 暗褐色砂質土
- 19 暗褐色粘質土
- 20 黒色粘質土
- 21 黒褐色粘質土
- 22 暗褐色砂質土
- 23 B軽石混在黒色粘質土
- 24 B軽石混在暗褐色砂質土
- 25 褐色砂質土
- 26 ローム粒含有褐色砂質土
- 27 暗褐色砂質土
- 28 ローム塊混在暗褐色粘質土
- 29 ローム塊混在暗褐色粘質土
- 30 黒褐色粘質土
- 31 黒灰褐色粘質土
- 32 暗褐色粘質土
- 33 暗褐色砂質土
- 34 ローム粒含有褐色粘質土
- 35 暗褐色粘質土
- 36 ローム粒含有褐色粘質土
- 37 ローム粒混在暗褐色粘質土
- 38 褐色粘質土

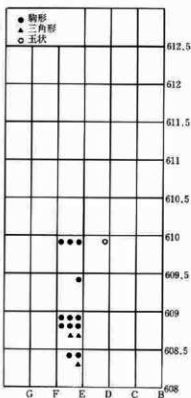
第49図 北側低地(III・IV区)溝群

6. 駒形製品・三角形製品・玉状製品

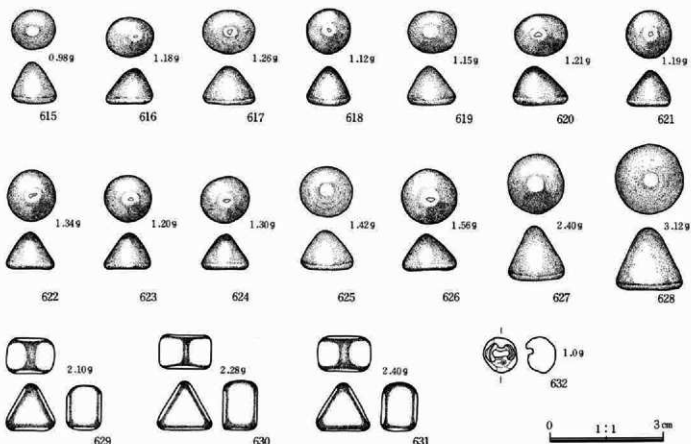
ここに掲げる遺物はいずれも用途不明のものである。特徴的な形態をもち、他の遺物とは一目で区別がつく。類例がみつからないためここでは円錐状のもの(615～628)を駒形製品、三角柱状のもの(629～631)を三角形製品と呼称しておく。

出土点数は駒形製品14点、三角形製品3点で第51図に全て図示してある。また1点出土した玉状製品(632)も用途不明である。これらの遺物の出土状態をみると集中する傾向があり、Ⅲ区608グリッドから609.5グリッド周辺のみ分布し他区域には認められない。出土状況はⅢ区北東部に集中した縄文時代遺物を調査する過程で検出されているため、これらの遺物の性格を物語るような調査所見は得られておらず、近接する不定形な落ち込みとの関係についても不明である。ただ、表土下に集中することからみれば廃棄されたにしろ、埋置されたにしろ、まとめられている点に意味がある。つまり単体ではなく、一定の数を必要とする製品であるものといえよう。駒形・三角形製品とも規格性が強いものの個別比較すると少しづつ形態差もある。表面は光沢をもち平滑で、色調は駒形製品が暗緑灰色、オリーブ灰色など、三角製品が灰色を呈している。一見石製のようにみえるが、観察すると器表面に気泡状のものが認められ、人工物の可能性が高いように思われた。材質は、X線による分析などから材質の均質性、コバルト(Co)を含有する点などから、ポリエチレン系樹脂の可能性が指摘されている¹¹⁾。

※材質分析については永嶋正幸氏(国立歴史民俗博物館教授)の助言・指導を受けている。分析は外観観察・X線透過およびX線分析(蛍光X線・X線化合物分析)で、ポリエチレン系樹脂の可能性が指摘されている。



第50図 駒形・三角形・玉状製品分布図(1:1000)



第51図 駒形・三角形・玉状製品

Ⅲ 調査のまとめ

1 縄文時代

縄文時代については、遺構類は認められていないが、土器片455点、石器・剥片類約2600点と多量の遺物類が得られている。また、その出土状況をもとと極めて集中度が高く、台地平坦部にあたる調査区Ⅲ区に南北約70m、東西約40m程度の範囲に大半が密集している。

時期的には、出土土器からみて熱糸文系土器後半期に位置づけられる資料が主体を占める。石器類も分布状況のみをかぎり、土器類と全く同様の傾向を示しており、このような状態から判断すれば石器各器種とも熱糸文系土器に伴うものとみられる。また、大量の剥片、碎片の存在を考えれば、石器の製作・加工域としての性格も認められ、土器・石器類の日常生活用具の存在は、今回の調査で居住施設等は確認されていないものの、この地域が生活域であり集落の一担を形成していたものと考えられる。

a. 土器について

第1群土器は2点のみ認められた。いずれも草創期押圧縄文系土器に含まれる資料である。1については縄文原体が復原できていない点が問題であるが、特徴的な口縁部形態は注目される。口唇部が削られたように尖りきみで、内湾する独特な口縁形状はこの時期に特有なものである。同様の例は、埼玉県西谷遺跡、水久保遺跡出土資料などに共通するものといえる。

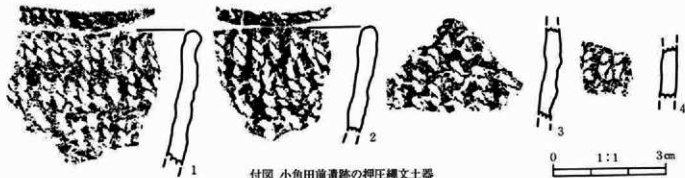
群馬県内でも草創期の遺跡は徐々にではあるが増加している。中でも爪形文系土器の出土例が多い傾向にあり、西鹿田中島遺跡(笠懸村)、下触牛伏遺跡(赤堀町)、中江田A・B遺跡(新田町)、下宿遺跡(太田市)、神谷遺跡(境町)、飯土井中央遺跡(前橋市)など、県下各地域で比較的多くまとまった資料が得られている。これに対し、押圧・回転縄文系土器については、類例が少ないものの、小角田前遺跡、神谷遺跡、西鹿田中島遺跡などの資料があげられる。

小角田前遺跡では、4点の押圧縄文系土器が出土しているが、内2点の口縁部片は同一個体とみられる。これらの資料は、短縄文、縄の側面圧痕および末端圧痕によるものであるが、ここでも縄文原体に不明なものも含まれている。また、縄を押圧する際についたとみられる爪形痕についても注目されている。(付図)

神谷遺跡例は全て表探資料であるが、量的にはややまとまった遺物が得られている。主体は、押圧・回転縄文系土器であり、熱糸先端圧痕、半環状熱糸先端圧痕、熱糸側面圧痕および回転縄文などとともに、爪形文との併用例も認められている。

西鹿田中島遺跡においても、多くの爪形文系土器とともに押圧・回転縄文系土器が出土している。

これらの諸例とともに、三室坊主林遺跡例をみると、1は原体不明とはいえ縄の側面圧痕の可能性があり2の先端圧痕とともに、小角田前遺跡例に類似するように考えられる。



付図 小角田前遺跡の押圧縄文土器

III 調査のまとめ

第Ⅱ群土器は、燃糸文系土器群に含まれる資料を一括している。今回の調査で最も多量に出土し、三室坊主林遺跡の主体を占めるもので、総点数317点ほど出土した。これは、出土縄文土器のおよそ70%を占めている。その分布域については、第30図に報告した通りであるが、Ⅲ区に集中しており、ほとんどがこの部分から検出されている。これらの土器類は、いずれも小破片であり、完形もしくは器形の復原され資料は得られていない。

時期的には、燃糸文系土器群に含まれるものの、その中には複数の型式が存在しているため、以下各種別ごとにその概要をみていくことにする。

第1類は2点出土している。縄文原体は充分燃りがかかけられ、施文も良好で表出される節も整然としている。頸部無文部にみられる指頭痕は、施文状態からみれば土器整形に伴う、つまり口縁部作出のために残った痕跡というより、明瞭に認められる爪形痕が指頭先端の押圧の結果であり、なおかつ一定の間隔をもって連続的に加えられている点からすれば、加飾的要素の強いものといえよう。このことは、口唇部形態さらに整った縄文ともあわせ、装飾的效果が生じている点からも指摘される。本類については、口縁部の形態、口唇部一口縁部一副部における縄文帯の形成などから井草式土器に位置づけられる。さらに文様構成、頸部の状態からみて、より古い段階のものといえ、井草Ⅰ式土器として認識しておきたい。

第2類は、縄文もしくは燃糸文の施される胴部であるが、いずれも特徴的な文様構成をもっている。

a種は独特な羽状縄文が加えられる。この種の土器は、器面調整が極めて良好であり平滑な面を形成しており、縄文施文は、この器面がある程度乾燥した段階で行なわれたものといえよう。表出される縄文は節が円形もしくは方形を示し、施文は浅い。このような表出は、原体の径がかなり太く、柔軟な原料が使用されよく燃れているものとみられる。羽状縄文は、観察し得る資料に限られるものの、同一原体が用いられ、施文方位を変えることによって表現される。横位施文と縦位施文が交互に行なわれることによって羽状構成がとられ、安定した施文状態を示している。a種にみられる条間隔の広い縄文は、意識的に表出されるものであり、器面調整、使用原体に加え施文手法にも注意がはられた結果といえよう。

このような文様構成、縄文施文手法は茨城県花輪台貝塚例²⁰を標式とする花輪台式土器に特徴的であり、東関東各地にみられる同期土器についても観察され、斉一性の強い文様であるといえ、これまでの編年観に即せば、花輪台式土器に位置づけられる資料である。a種土器は、同一個体と思われる破片も含め、総点数15点が出土している。

b種は特徴的な燃糸文の施される胴部片である。原体は、単軸給条体Ⅰ類が用いられ、巻きつけられる縄はいずれも1段Rであり、施文方位は縦位回転としている。表出される燃糸文は、長大な節が独特であり、この種の太さの燃糸文を加えるには、かなり太い条が用いられているであろう。例えば、実験的に復原すると、ちょうどa種に用いられる縄文原体の条の太さに近いものが用いられる可能性がある。また、このような長大な形の燃糸文を得るには、用いる条の太さとあわせ、製作手法・縄の巻き方にも工夫があるものとみられる。縄を巻きつける際、燃りの弱まる方向、燃りの戻る方向に巻かれた結果得られる形状といえる。その手法にはいくつか考えられるが、製作手法とすれば、報告したようにRの縄を用いる場合、時計回りに巻きつける手法がとられたと考えるのが妥当ではないだろうか。b種に含まれる土器は、20点出土している。

この種の燃糸文は、稲荷原式土器の型的特徴として捉えられるものであり、この段階に位置づけられるものである。

第Ⅱ群a種・b種については、それぞれ花輪台式土器・稲荷原式土器に位置づけられると考えるが、両者について次のような関連性が認められる。文様表出手法は、縄文と燃糸文であり異なる原体が用いられる

が、使用される糸自体の太さは、燃糸文系土器の中では最も太いものが用いられ、さらにその太さも両者に共通する点も認められる。また、表出された文様をみると、縄文、燃糸文とも施文が浅く、器面調整は良好であり、施文のタイミングはやや乾燥した段階で行なわれたものとみられる。明らかな相異点も両者には存在しているが、他例にはみないような上記の類似点もあわせて認められる。このような類似点からすれば、両者は時間的關係を含め、何らかの関連をもつことが考えられよう。

口縁部下に沈線をもつ土器を第3類土器として一括している。報告に示したとおり、沈線の位置および口唇部の断面形態により分類している。沈線の位置すなわち口縁部無文帯の幅は、比較的明瞭に差異が認められ、5mm程度の幅をもつもの、1cm程度の幅をもつもの、3cm前後と広い幅をもつものと3種類が存在する。また、口唇部の断面形態には円頭状を示す口唇部をもつ資料と、口唇上端部を平坦に整形した角頭形を示す口唇部資料が存在する。このような沈線の位置、口唇部形態から次のような分類が行なわれた。

- a種 口縁部無文帯の幅が5mm程度、口唇部形態は角頭形を示す。
- b種 口縁部無文帯の幅が1cm程度、口唇部形態は角頭形を示す。
- c種 口縁部無文帯の幅が3cm前後、口唇部形態は丸頭形を示す。
- d種 口縁部無文帯の幅が5mm程度、口唇部形態は丸頭形を示す。
- e種 口縁部無文帯の幅が1cm程度、口唇部形態は丸頭形を示す。

まず、c種であるが、同種については図示した3点のみ検出されている。この内同一個体とみられる2点については、器壁が厚手で、口縁部の整形は極めて丁寧に行なわれ、徹底したミガキにより滑沢な器面を形成し、土器自体も他に比べ大型である。頸部に巡る沈線は太く、指頭もしくはそれに類する施文具により加えられている。また、この太沈線の下に一部認められる細い沈線状の痕跡は注意される。胴部は一部が残存しているが、特徴的な節をもつ縄文が加えられる。この縄文は節が大きく、条間隔の広いもので、第Ⅱ類a種とした縄文に類似する。やはり痕跡は浅く、節は円形を呈している。残存部が少ないため、羽状構成をとるか否かは断定できない。なお、口唇部内側がややふくれぎみとなる特徴をもっている。このc種は、特徴的な縄文および胎土等Ⅱ群2類a種と類似し、両者は同一種類の土器の口縁部と胴部という関係にあるとみられる。すなわち、c種についても型的には花輪台Ⅰ式土器として位置づけられることになるが、標式遺跡である茨城県花輪台貝塚資料と比較すると、通常花輪台式土器は口縁部無文帯下には1条ないし複数条の燃糸圧痕を加えることを常としており、本遺跡資料における沈線手法とは異なる点をもっている。幅の広い口縁部無文帯と胴部における羽状縄文に特徴づけられる花輪台式土器は、さらにもう一つの特徴として口縁部下に燃糸圧痕文を加えるという極めて強い型式上の斉一性をもっている。また、花輪台式土器には、口縁部内側がややふくれぎみとなる資料が存在するが、本種についてもその傾向が認められ共通する。縄文原体圧痕の有無が型式的にみて重要な点であることをふまえたつても、本資料についてはやはり他の特徴から花輪台式土器として理解しておきたい。

群馬県内でも、燃糸文系土器の資料が増加しつつあるが、花輪台式土器については類例が少なく、周東隆一氏¹⁰により桐生市周辺において摘出されている他は、まとまった資料をみない。

3類a種・b種・d種・e種は、沈線の施文手法、胎土、整形等で類似する資料である。また、一部有文の可能性をもつものの、基本的に沈線下を無文とする点で共通している。前述したc種も口縁部下に沈線をもつという点で同じ類として分類したが、整形、器厚、胎土、沈線の施文手法、さらに縄文の施文など、このa種・b種・d種・e種とは明らかに異なるものであることをつけ加えておきたい。出土点数はa種が6点、b種が21点、d種が5点、e種が3点と総点数で35点と決して量的には多くない。沈線の加えられる位

Ⅲ 調査のまとめ

置を比較すると、口縁下5mm程度であるa種とd種、1cm程度であるb種とe種という関係を示し、口唇部形態からみれば、丸頭型を示すd種、e種、角頭型を示すa種・b種という関係になる。ただ、この口唇部形態については、明らかに丸頭型、角頭型を示す資料があり識別され得るが、反面口縁部片が小片である場合、両者の中間的な形状を示す資料も存在し、判別の不充分なものもある。

a種・b種は、口唇上端を平坦に整形しており、明瞭に角頭型を示す資料である。両種は、前記のとおり沈線の位置に差があるが、角頭型に整形することにより沈線で画された口縁部無文帯が明瞭に認識される。

沈線の施文をみると、その手法には各種を通じて共通性が認められる。沈線の施文は、一気に引かれるのではなく、報告したように器面を巡らせるに際して、数回に分割施文しており、その継点が残されている。観察される最も短い沈線の単位は1.5cmであり、このような短沈線の連続施文が特徴として認められる。また施文具には、沈線の形状からみてa種・d種には細いヒゴ状施文具が用いられ、b種には先端が薄く尖ったヘラ状工具が使用されている。さらに沈線は、器面に対し直角に加えられず、やや下の方から口縁に向って加えられる傾向があり、これはヘラ状工具を用いるb種に顕著である。この結果、沈線はより明瞭に表現され、口縁部形状ともあわせ、口縁部無文帯を強調する効果も生んでいる。

ここにみられるような口縁部下に沈線をもち、以下無文となる土器は、東山式土器^{Ⅲ11}として位置づけられる資料に類似しており、本種もこの段階に相当するものといえよう。この点からみて、b種40・55について極めて不明瞭ながら縄文、燃糸文の痕跡が認められることは注意されるだろう。

f種はわずかに燃糸痕文をもつ資料で、1点のみ認められた。胎土等からみて他種同様やはり燃糸文系土器とみられ、花輪台式土器として位置づけよう。

4類とした無文の口縁部片は、計25点認められる。これらは、沈線の存在を除けば3類各種との類似点も多い。例えば78-83などは胎土、器厚、整形および口唇部内側がふくれぎみとなる点など、3類c種と極めて強い形態上の類似性を示すことから、時期的にはほぼ同じ時間帯の中に位置づけられるものとみられる。他の資料については、3類a・b・d・e各種との類似性がみられ、その関連性を考えておきたい。

5類は注目される資料である。90は無文で、口縁部に小突起^{Ⅲ12}が付され、県内では中棚遺跡^{Ⅲ13}に類似がある。91は明らかに波状口縁を呈し、口縁部下に沈線をもつ資料である。沈線、胎土からみて41と同一個体の可能性があり、東山式土器段階に位置づけられる資料である。波状口縁では、古い段階の例として着目されよう。

6類・7類はいずれも無文の胴部および底部である。特徴が把えにくいものの、胎土および器面状態などからみて、3類a・b・d・e各種、4類、5類に伴うものとみられる。

Ⅲ群土器は沈線文系土器で3点、Ⅳ群土器は縄文の付される破片であり、所属時期については保留しておく。2点認められた。

これらからみて、出土土器の主体は、花輪台Ⅰ式土器、稲荷原式土器を少量含み、東山式土器段階を主とするものといえ、時間的幅はもつものの、連続する比較的短い時間の中で形成された燃糸文系土器後半期の遺跡であるといえよう。

なお、最後につけ加えておけるが、押型文土器については今回の資料には認められていない。

b. 石器について

器種構成、出土状況などについては先に報告したとおりである。大量に出土した石器類は、本遺跡を特徴づける存在である。本遺跡出土遺物のうち、石器系遺物の約82%を占める剥片・碎片類の存在は、今回の調査区域が石器類の加工域としての性格をもつことが充分考えられる。剥片類の石材構成をみると、約70%が黒色頁岩であり、次にチャートが23%、黒色安山岩が5%となっている。この石材構成は、器種別石材構成

と比較すると、石斧類、片刃石器、礫器、削器、三角錐形石器等も類似するものであり、量的比較でいえば、この区域内で加工され得た石器類はこれらの器種であるといえよう。これ以外の器種、例えば凹石、石皿、磨石、蔽石、スタンプ形石器などは石材構成が全く異なり、さらにもともと加工量が極めて少ない器種であることを考えれば、多量に存在する剝片類は、これら植物質食料加工工具の製作と基本的に関連しないものといえよう。

次に、これら各種石器類の中でも用途、時期など最近注目されている三角錐形石器とスタンプ形石器の石材構成についてみてみよう。

三角錐形石器は約95%を黒色頁岩が占めており、極めて高い石材選択性がみられる。この傾向は、北関東各地における三角錐形石器の石材傾向と一致し、特徴的な形態を含め強い斉一性が看取される。

スタンプ形石器は、玢岩、粗粒安山岩、石英閃緑岩などを含め11種類に及ぶ石材を用いており、石材選択において三角錐形石器のような選択の単一指向性はない。

用途において三角錐形石器と共通する部分をもつスタンプ形石器にみられる使用石材の相違は、両器種がそれぞれに独立した器種であることの一つの特色として指摘されている。このことは、本遺跡例における両器種の使用石材の全くといってよい異なる傾向からも認められる点である。本来的に、用いる石材はその用途に適したものが選定されていたであろうことを考えれば、やはり両者は各々個別の器種として認識され、明確な用途上の相違が存在したことを反映していると考えられる。

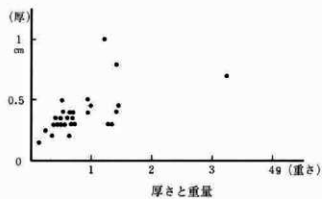
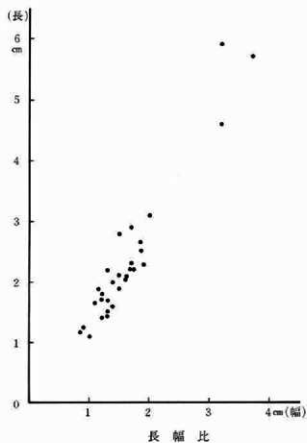
スタンプ形石器の石材構成をみると、磨石、凹石、石皿、蔽石などの植物質食料加工工具の石材構成に類似している。各石材の構成比は異なるものの、本遺跡石材の約70%を占める黒色頁岩を全く欠くもしくはわずかに含まれるという共通性は一貫している。三角錐形石器のそれは先にふれたように、石斧類、片刃石器、礫器などの石材構成と類似している。さらに、石材構成にみられる類似関係は、器種別重量分布にも表われており、両器種の用途、役割、特に三角錐形石器の機能を考える一資料となろう。

土器類、石器類について十分な分析が行われていないが、出土状況からみかざり先に報告したとおりこの遺跡は、撫糸文系土器後中期(花輪台式土器、稻荷原式土器、東山式土器)に形成されたものといえ、縄文時代の他のものをほとんど含んでいない。石器類も同時期に伴うものと判断される。遺構類を全く欠くものの、かなり限定された時期における生活域が調査されたことになり、土器類もさることながら、石器類についてはその組成に関して有効な資料が得られたといえる。

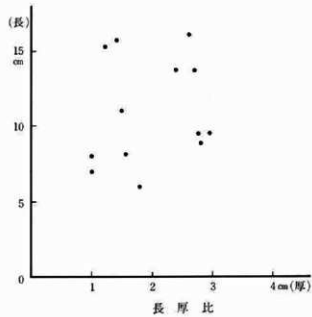
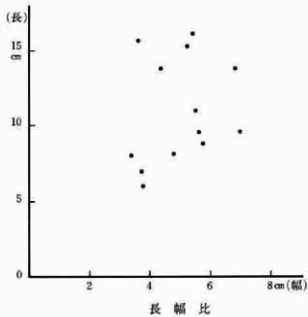
なお、調査資料については、全て群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

- ※1 『新編埼玉県史 資料編1』 原始 旧石器 縄文。埼玉県 昭和55年
- ※2 『空想村誌 別巻一』資料編 笠懸村誌編さん委員会 昭和58年
- ※3 群馬県埋蔵文化財調査事業団「下城平伏遺跡」 昭和61年
- ※4 新田町教育委員会「中江田遺跡 付 六供古墳群」新田町文化財調査報告書第7冊 昭和60年
小保方紀久「新田町中江田に所在する縄文時代草創期・早期遺跡について―表面採集遺物を中心として」 新田町史談会 昭和62年
- ※5 中東耕志「中江田A地点遺跡」『群馬県史 資料編1』原始古代1 群馬県史編さん委員会 昭和63年
- ※6 中里吉伸「下宿遺跡」『群馬県史 資料編1』原始古代1 群馬県史編さん委員会 昭和63年
- ※7 坂久久雄・中東耕志「神谷遺跡の爪形土器と関連遺跡」『群馬考古通信』第8号 昭和68年
- ※8 中東耕志「縄文時代草創期における押圧・磨石礫土器の編年」『群馬県立歴史博物館紀要』第7号 昭和61年
- ※9 『鹿土井中央遺跡』『年報-5-』群馬県埋蔵文化財調査事業団 昭和61年
- ※10 群馬県埋蔵文化財調査事業団「小角山前遺跡」 昭和61年
- ※11 茨城県史編さん室「茨城県歴史資料 考古資料編」先石器・縄文 昭和54年
- ※12 周東隆一「撫糸文化の研究―関東北部渡良瀬川沿岸の遺跡群について―」『考古学研究』28 昭和36年
- ※13 原田昌幸「撫糸文系土器終末期の諸問題―撫土器「東山式」の設定―」『物質文化』46 昭和61年
- ※14 突起の最古例は、非草目式土器にその存在が指摘されている。「No. 7遺跡」『新東京国際空港埋蔵文化財調査報告書』 千葉県文化財センター 昭和59年
- ※15 昭和村教育委員会「中橋遺跡―長井坂城跡―」 昭和60年
- ※16 群馬県埋蔵文化財調査事業団「寛成北原遺跡・今井神社古墳・寛成青柳遺跡」 昭和61年

石 鏃

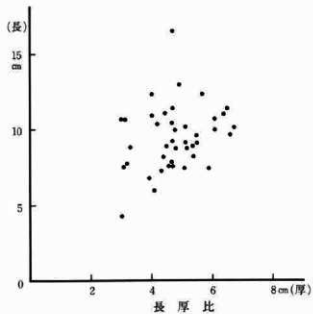
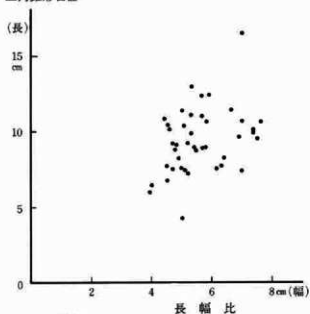


打製石斧・礮斧

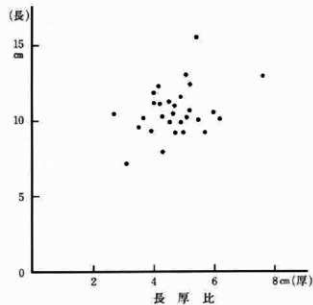
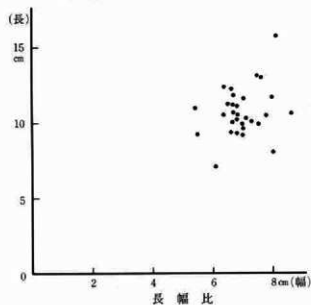


第52図 石器法量相関図

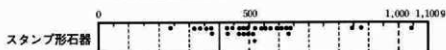
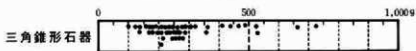
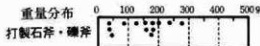
三角錐形石器



スタンプ形石器



重量分布



第53図 石器法量相関図

III 調査のまとめ

2 古墳時代・古代

古墳時代

検出した遺構は、前期の竪穴住居2軒のみである。この2軒の住居は、南西に隣接する「伊勢崎・東流通団地遺跡^{III1}」として調査された中で東村上田の尼ヶ池から発する開析谷(以下「尼ヶ池谷」とする)の左岸に立地する同期遺跡の北の限界を示すものである。

周辺の同期遺跡は、図に示したように尼ヶ池谷左岸の4カ所に分かれている^{III2}。

- | | | | |
|---|-------------------------|-----------|-------------|
| A | 字ニシハラ・ミチウエ・マトイ | 竪穴住居80軒以上 | 方形周溝墓 10基以上 |
| B | 字ニシハラ北西 | 竪穴住居 3軒以上 | |
| C | 字オニガシマ ^{III3} | 竪穴住居13軒以上 | |
| D | 字ミタライシタ ^{III4} | 方形周溝墓1基以上 | |
| E | 字ミチシタ ^{III5} | 水源地遺構 | |

本遺跡で検出した住居は、A遺跡の最北端に位置するものと考えて良く、またⅡ・Ⅲ区の遺構外から出土した遺物も、このA遺跡の北東端に位置することを見れば、理解しやすい。

これらの現状での遺跡の分布を見ると、次のような点が目につく。

1. 全て尼ヶ池谷の左岸に立地する。(後期には右岸にも展開)
2. 最大のA遺跡は、集落首長墓域を南側に集中させている。(ここで周溝墓と重複する住居があることから、墓域設定以前の古い段階の居住域は南側だったと思われる。)
3. B遺跡は、A遺跡と距離的に近く、同一の集落とも考えうる。
4. C・D遺跡は、居住域と墓域の組み合わせになり、Aに対応する遺跡群と見なせる。
5. 本遺跡調査によるA遺跡の北東限界に見られるように、尼ヶ池谷の水利を生活用水としている。(生活手段の基礎が何かは不明だが、同谷の水による農耕は当然あるだろう。)

この中で特に1は、理由が不明である。その点も含めて、県内の調査例では古墳時代前期の集落としては最大規模の、A遺跡の本格的な研究を待たねばならない^{III6}。

古 代

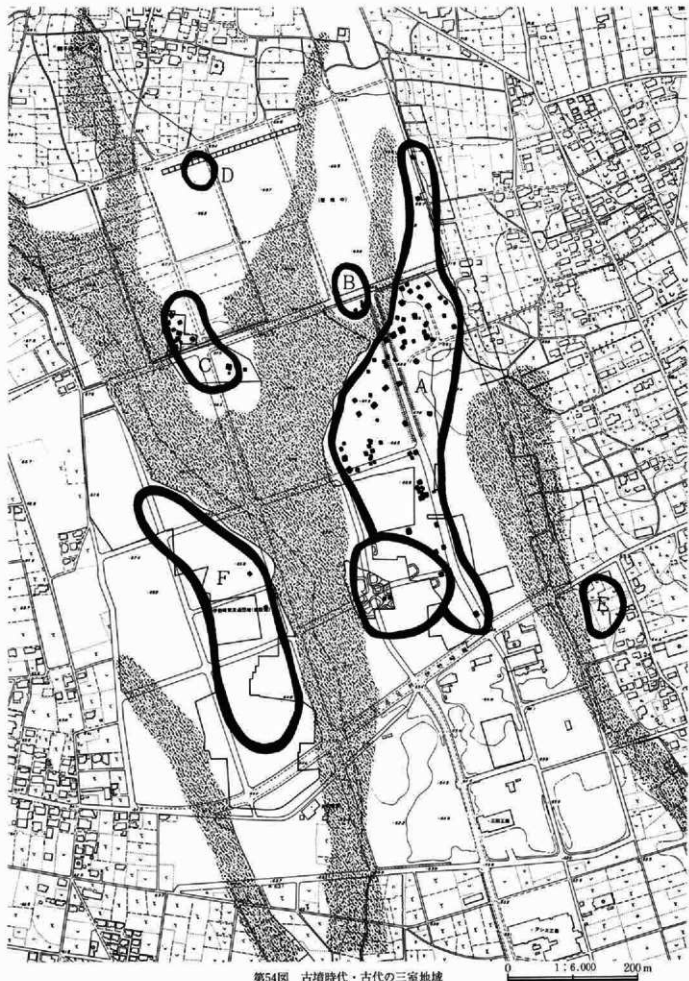
検出した遺構は、不明瞭な竪穴遺構1基だけである。他にⅣ区の2条の溝より考えうる道路遺構も、隣接して出土した灰軸陶器の年代に近い可能性もあるが、確実ではない。

この時代の周辺の遺跡では、前記A・Cの他に次のものがある。

- F 旧八寸村字シモイッチョーダ・ナガミゾ^{III7} 竪穴住居50軒以上

本遺跡に隣接するA遺跡では、5基以上の製鉄炉が目玉されている。本遺跡の近世の溝から発見された銅羽口もそれらから来た可能性が考えられる。

なお、和名抄には佐位郡の郷名として「美侶郷」があげられている。地名学的検討によれば、この郷名の残存地名として「三室^{I, A, B}」も可能性がある。三室周辺の現在までの資料で「美侶郷」を比定するなら、旧八寸村神谷にあたるF遺跡しかないだろう。



第54図 古墳時代・古代の三室地域

III 調査のまとめ

3 中世・近世

中世

検出された遺構は、台地部分の2本の溝と堅穴遺構で構成される居館址と、南側低地の大小17本の溝よりなる農業用水路群である。

居館は、同心円状の方形の囲郭式館の西側3分の1ほどが、確認されたと考えられる。東側にはどのような形で続くのかは、第56図に推定線を描いたが、確実な根拠はない。昭和9(1934)年の地籍図(第55図)の段階では、すでにこの館の東側を推定させる地割りは、見当たらない。ただ外郭の北側ラインが字ボーズバヤシと字ニシハラの境界の道路と一致しており、確認した南北間80m強をそれほど無理のない形で描いたのがこの推定線である。

この居館以下(「西原館」と呼ぶ)について分かったことは、次の各点である。

1. 二重同心方形の囲郭構造(南北80m強)を呈する。
2. 外郭は、南側25m・西側25~30mと比較的広い幅を持つが、顕著な遺構は不明。
3. 内郭は、西堀に接して方形堅穴がある。
4. 内外郭の堀は、いずれも幅狭く浅く、軍事的な意味より区画的意味が強い。
5. 存続期は576・577の竜泉窯系織造弁文青磁鉢が南宋から元の製品と考えられるため、13世紀から14世紀の幅が想定できる。ただし類例の見当たらない灰釉脚付鉢鉢の時期と石製茶臼585を考慮すれば、あるいは15世紀まで続く可能性も完全に否定はできない。
6. 南側低地の溝群は、農業用水路であることは確かだが、水田用とは断定できない。2時期の利用時期があり、前期は14世紀代を含んでいる。

このような点をまとめれば、西原館は中世前期の南側低地の農耕と関係のある居館とすることができる。

周辺の中世居館では、尼ヶ池谷の右岸の旧八寸村神谷のナガミゾに南北に近接する八寸館(第55図B・C)がある。このうち発掘調査された足利街道に南接する南の館からは、文保1(1317)年銘の板碑が出土している。この八寸両館とも規模は西原館と似ている。また、南側低地の右岸にも中世居館を想定させる溝が、2カ所で流通団地の調査で検出されている(第56図D・E)が、実態は不明である。

西原館から八寸南館までの距離は直線で900mであり、同時代に併存していたと思われる。また足利街道の西約2kmには、16世紀後半の永祿・天正年間に伊勢崎長尾氏が在住したとされる榎木城がある。長尾氏以





第56図 中世の三空地城



前にも同城は築かれていたとも言われている。^{※11}

西原館周辺の田佐位郡と新田郡西部を中心とする中世城館の分布は、第56図のようになる。中世にこの地域は、佐位郡が瀧名荘、新田郡が新田荘となり、また佐位郡北西の勢多郡には大室荘があった。図に見られるように、文献に記録のある中世地名にそれぞれ城館があると置いて良いだろう。

西原館周辺は、うふかた／おふかた(宇方方／小生形)郷と呼ばれる瀧名荘域下の郷であったと思われる。瀧名荘の在地領主は、秀郷流藤姓瀧名氏と言われており、『神道集』には赤城信仰と結びついた伝説的人物中世前期の「瀧名太夫」がしばしば登場する。また「あづま道」に平行する用水路女堀の掘削も、瀧名荘の開発のため大室氏など秀郷流各氏との協力でなされた、とされている。^{※12}

女堀の掘削は、浅間山大噴火による耕地被害の復興が目的とされるが、「あづま道」の作道も同時期の交通路の復興目的でなされた。共に瀧名氏が大きく関与するが、位置的に西原館と八寸館が瀧名氏と密接な関係があったことは妥当なところであり、榎木城も含めて足利街道に近いということは、「あづま道」と同様にこの道の作道も浅間噴火災害からの東西交通路復興の一連の事業の一つであったと思われる。^{※13}

とすれば西原館が、足利街道から700m離れているということは、足利街道の作道時には存続していなかったことを意味しているのだろう。それは、うふかた郷の成立時期の問題にも関係あるだろう。

近世

近世にこの地域は、旗本久松氏領の小保方村になる。この村は近世中期までに8つの組から成る大きな村になっており、本遺跡地はその中で三室上組に含まれる。

基本的に農業用水路と考えられる南側低地の12条の溝のうちⅠ区1溝は、字ミムロとミチウエの境界になっている。また台地部の遺構の状況により想定される屋敷跡群は、1軒を除いて現在の集落とは離れているが、逆にそのことが、古い三室上組の集落であることを示すのかもしれない。

ただ近世の調査で最も重要なことは、通常地低溝群で出土した時期の遺物には伴ってくるはずの伊万里磁器が、全く見られないことである。これは、調査時において遺物にも伊万里磁器を遺物と認定していなかったこともあるので問題にはなるが、一つの可能性として本調査地での集落が、17世紀後半頃までの段階で移動してしまったことも上げておきたい。

※1 群馬県企業局：『伊勢崎・東流通団地遺跡』、1982 この遺跡の調査後に保存地構内に「重要でない」遺物が「地下埋納」されてしまった。しかしそのことと遺跡の内容とは全く関係ない。

※2 『伊勢崎・東流通団地遺跡』は、調査成果のまとめの記述がないため、遺構数と分布地は筆者の判断による。

※3 佐波郡東村教育委員会：『鬼ヶ島遺跡』、1980 南半分は、流通団地での調査による。

※4 同上

※5 群馬県埋蔵文化財調査事業団(以下群埋文)：『年報』1、1982 記載の「三室A遺跡」近年中に「三室間ノ谷遺跡」として報告される予定だが、この水源の下流からキヌガサ杖木製品が出土している。

※6 上記遺物放棄事件のための『伊勢崎・東流通団地遺跡』は、価値のないものとしてほとんど利用されていない。これは同書のカード式の編集が必ずしも理解しやすくはないことにもよるが、極めて残念な状況である。同書の情報量の限界をふまえて、この遺跡の内容を検討していかねば、本跡地域の古墳時代前期の状況は極めて不明なものになったままである。

※7 文献による。概数は2と同様筆者の概算。

※8 拙稿：『田佐位郡北東部の地名分布の概観』、『書上下吉祥寺遺跡・書上原之城遺跡・上榎木町田遺跡』、群埋文、1988 で9世紀の集落類似地名として三室と伊勢崎市茂島(モロ)を上げた。

※9 同様の例はしばしば見られるが、このような聖堂を住所とは断定できない。群埋文：『惣野堂遺跡群基地区・南空遺跡』、1984など。

※10 文献の調査だが、ほとんど記載なく、山崎 一：『群馬県古墳遺跡の研究 補遺(上巻)』、群馬県文化事業振興会、1979 の記載が詳しい。ただし文献で古代の所産とする製鉄遺構を中世としている。

※11 山崎 一：『群馬県古墳遺跡の研究 上巻』、1978

※12 文献に詳述

※13 群埋文、『女堀』

※14 拙：『東山道・あづま道を中心とする道路遺構の考古学的特徴』、『研究紀要6』、群埋文、1989 参照 なお足利街道は南側で直線状に走る8世紀作道の「牛道」の代替道とも考えられる。

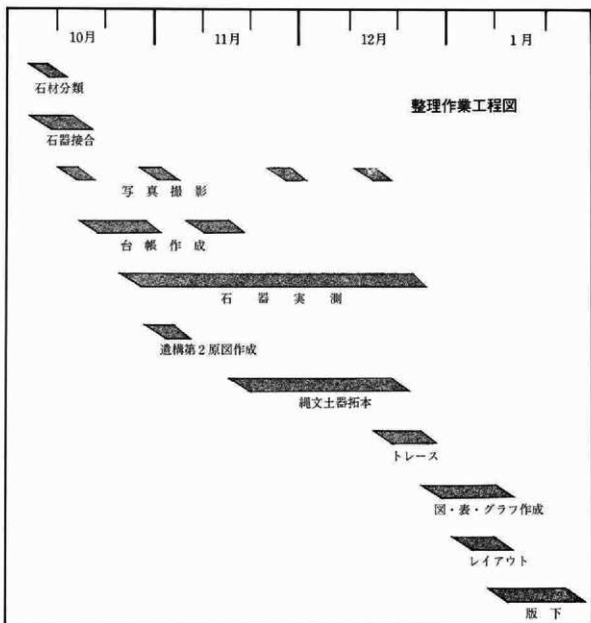
Ⅲ 調査のまとめ

4 整理作業の経過

三室坊主林遺跡(事業名称三室B遺跡)の整理作業は、上武道路整理計画に沿って1988年10月から着手された。整理計画策定の際には、遺物総量を基本におき立案し適正な業務運営を計るようにしたものの、この遺跡の主体を占める石器類は、その計画をさらに上回るほどの質・量をもつものであった。

前年度まで、上武道路関連の業務は発掘調査4班、整理業務1班と発掘調査を主に進められてきた。発掘調査が国道50号線まで完了した今年度以降については、現在まで蓄積されてきた埋蔵文化財諸資料の整理に重きをおく方向のもと、今年度から整理班を4班に増班することで充実を計っている。すなわち、今年度は整理班4班体制の初年度にもあたり、順調な計画進行が望まれるものであった。

具体的な整理作業にあたっては、人的充実を行なうとともに、石器類の実測に関しては素図作成について実測器を利用し、一定の成果を得ている。なお、整理作業の進行状況はほぼ下表に示すとおりで、本報告書の刊行に至っている。



写 真 图 版



I区を南から望む



II区を北から望む

PL 2



Ⅲ区縄文時代の遺物群



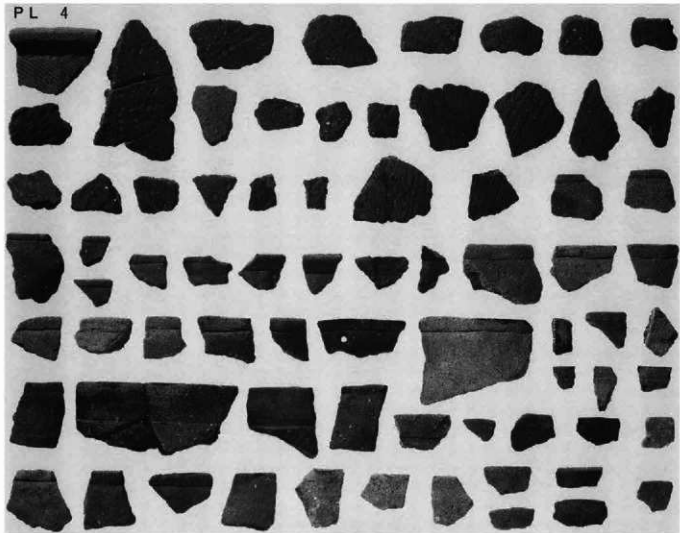
Ⅲ区中世の土坑群



IV区を南から望む

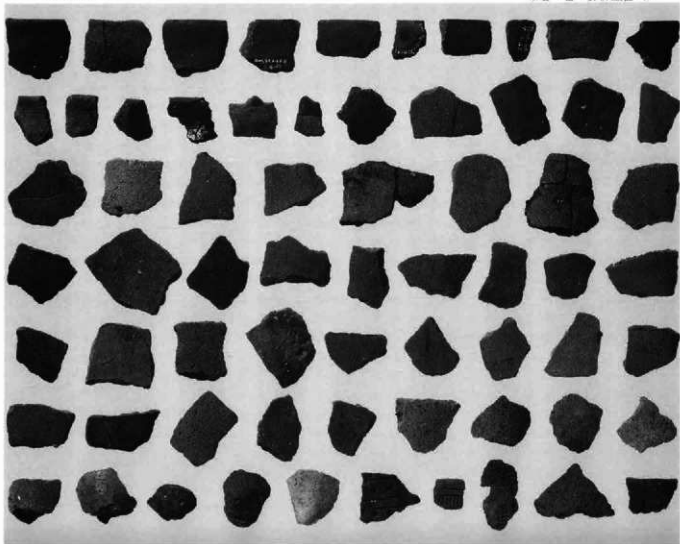


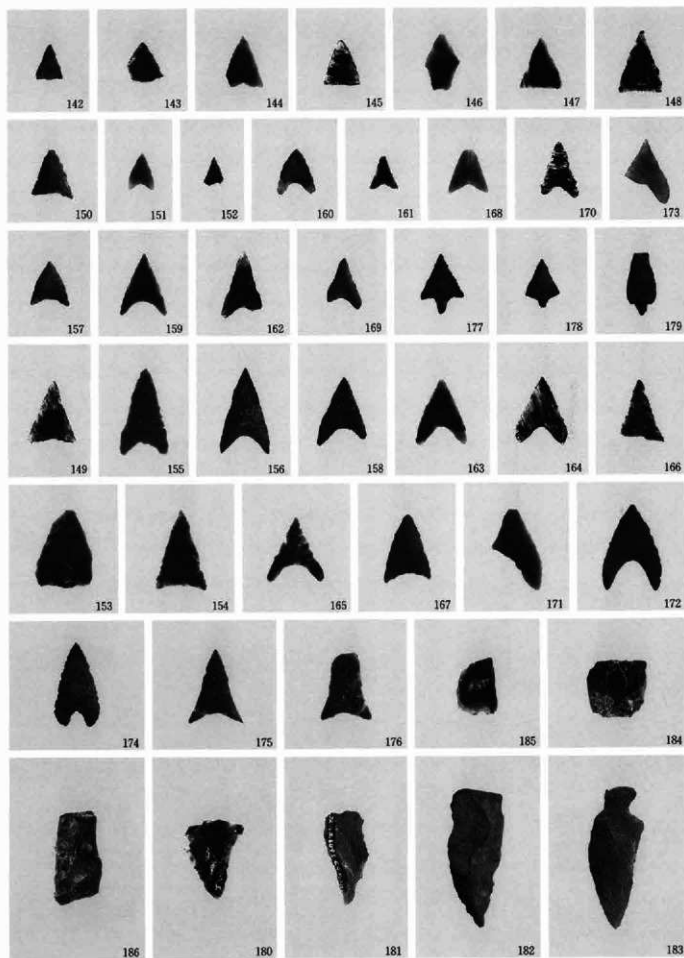
IV区を北から望む



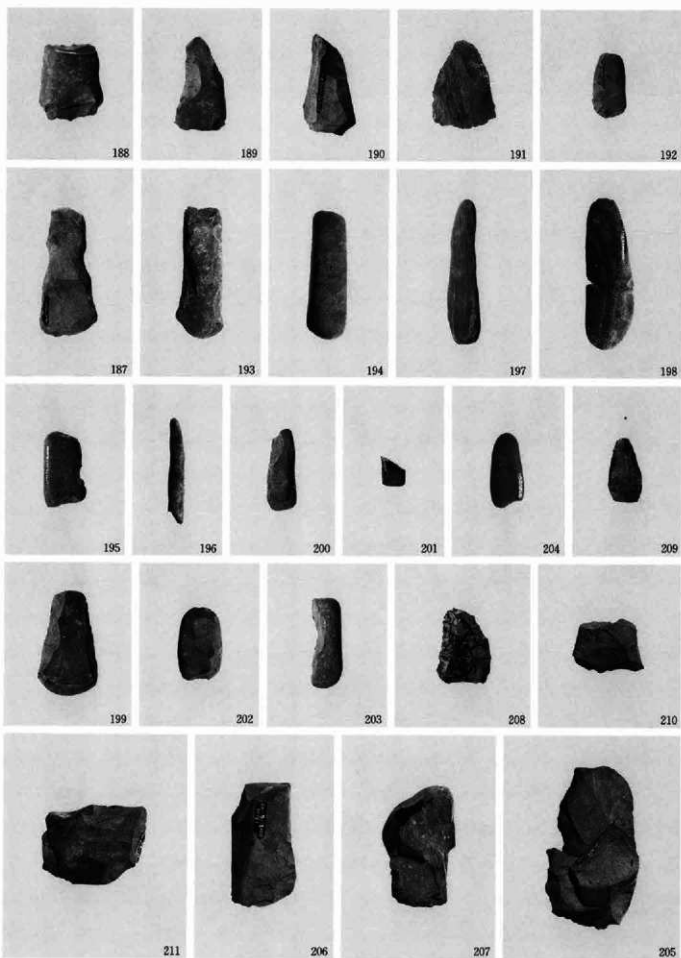
▲ 第Ⅱ群土器

第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ群土器 ▼

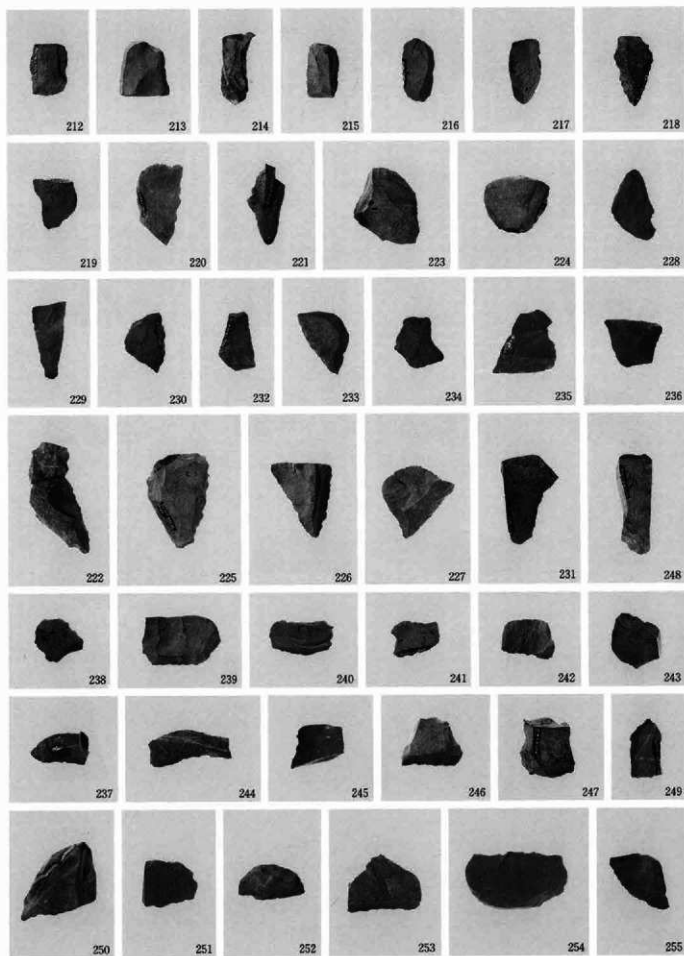


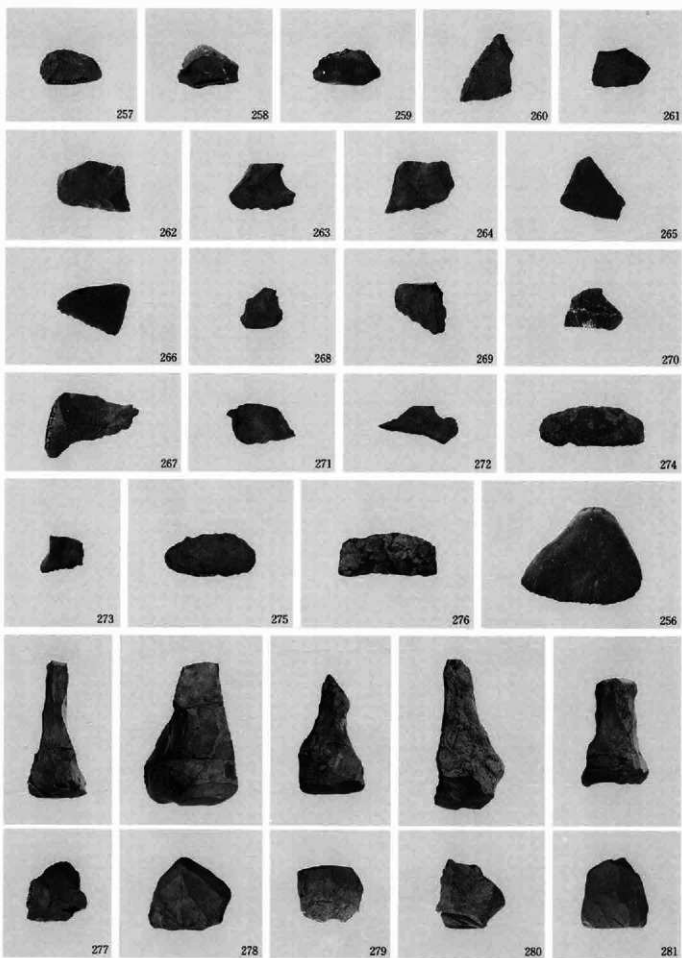


石鏃・石錐・石匙・ピエスエスキュー

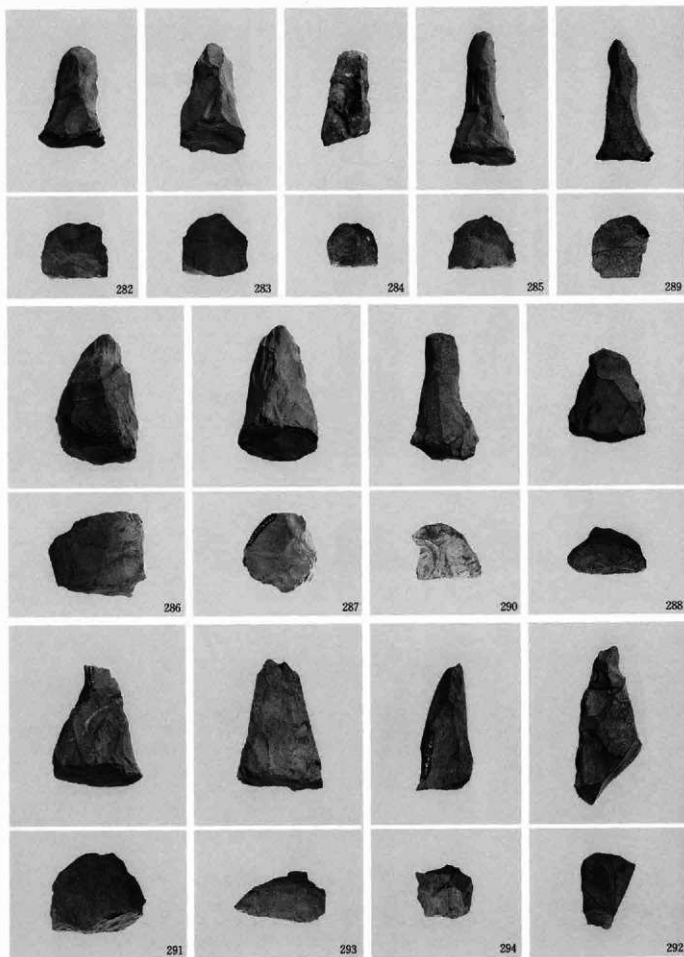


打製石斧・打製礮斧・磨製石斧・磨製礮斧・片刃石器・礮器・石核

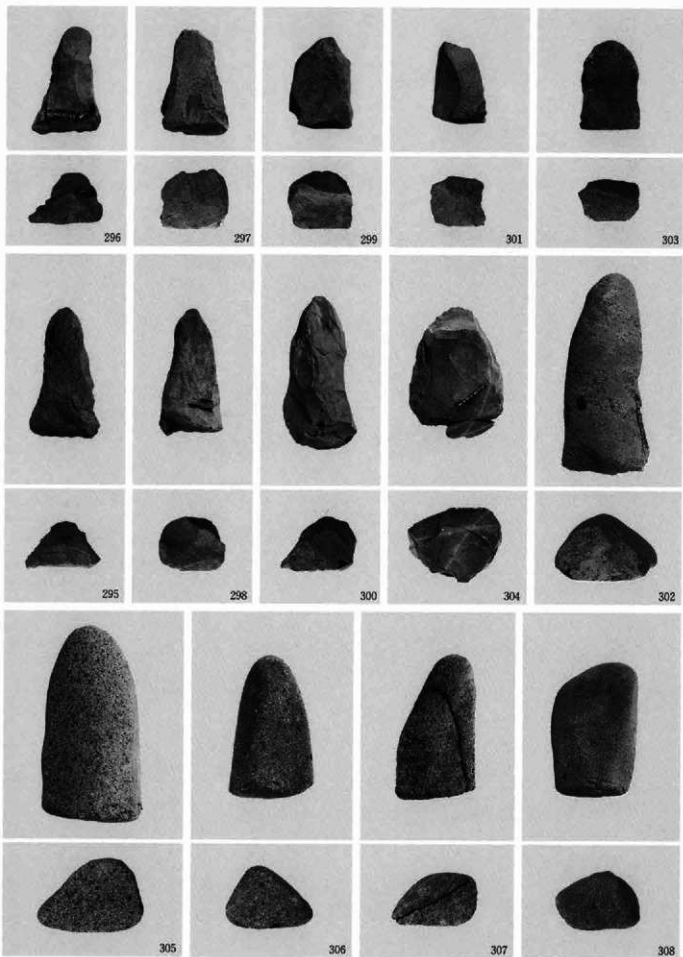




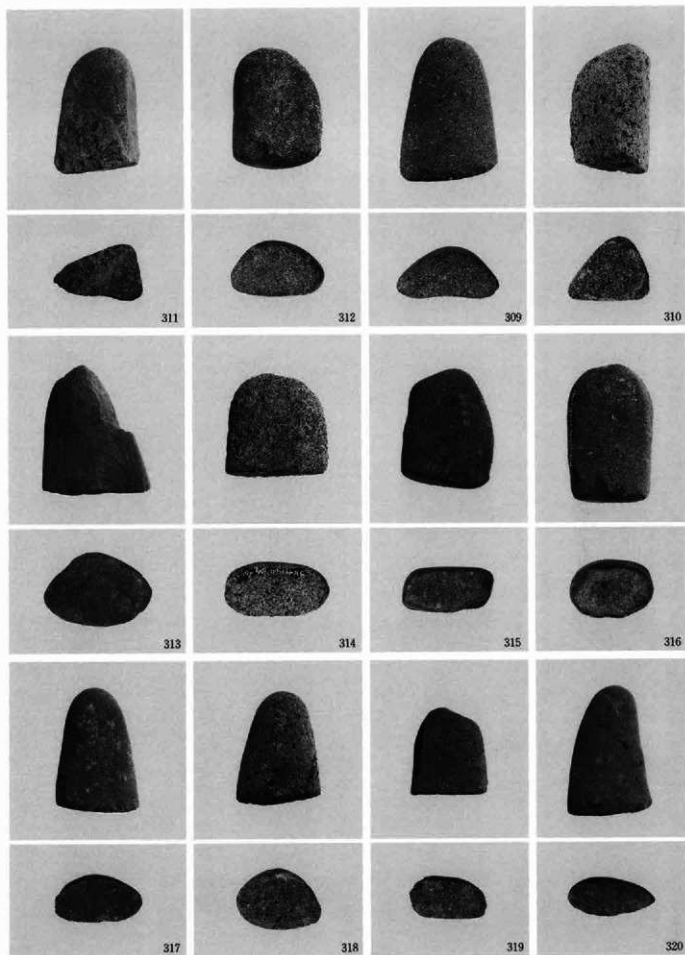
削器・三角錐形石器



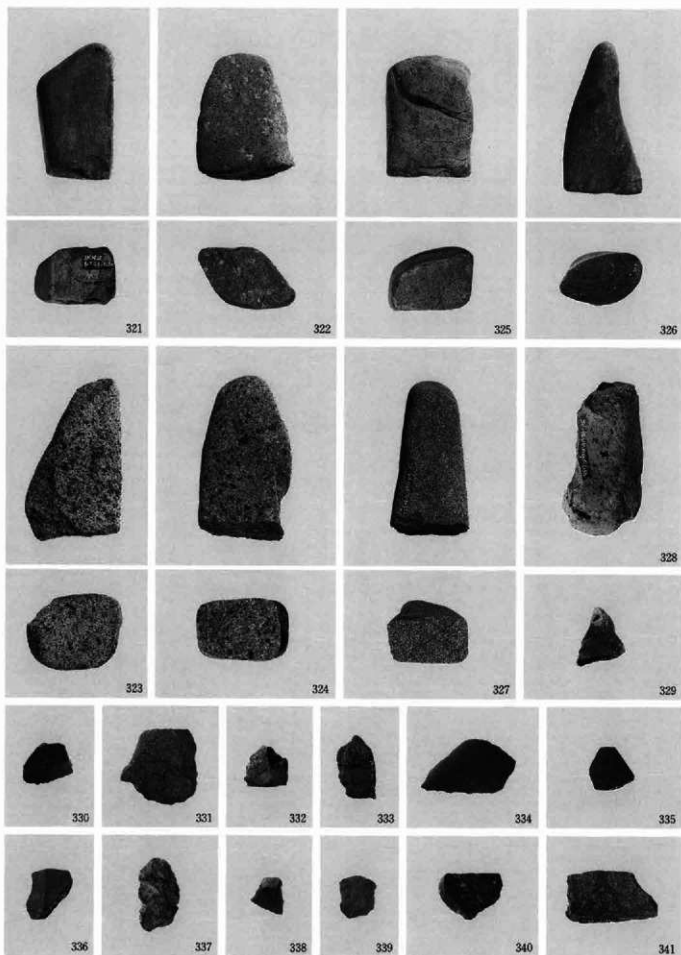
三角錐形石器



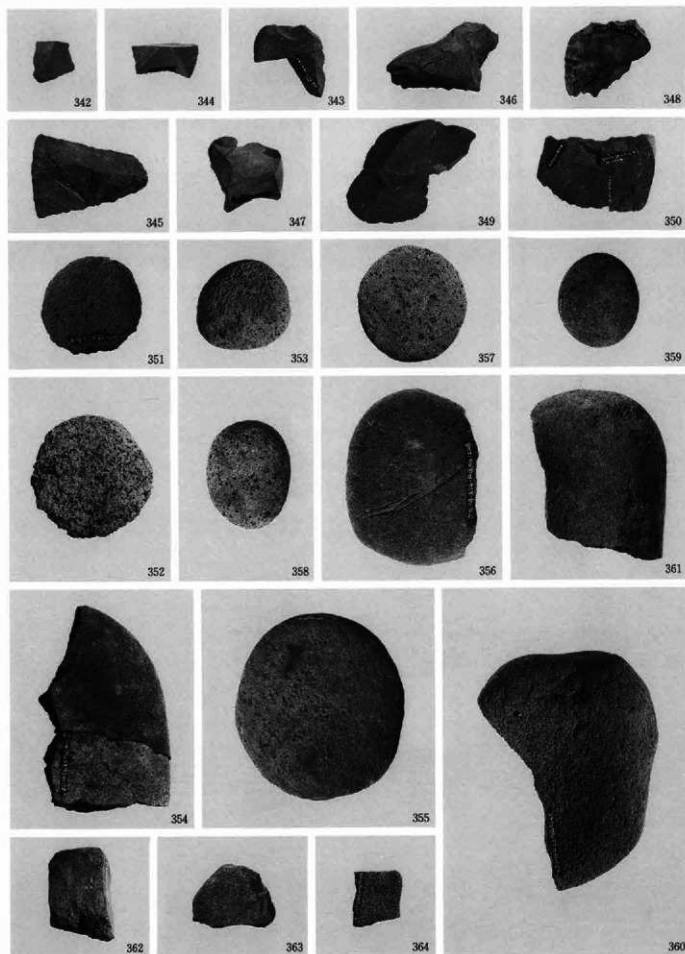
三角錐形石器・スタンプ形石器



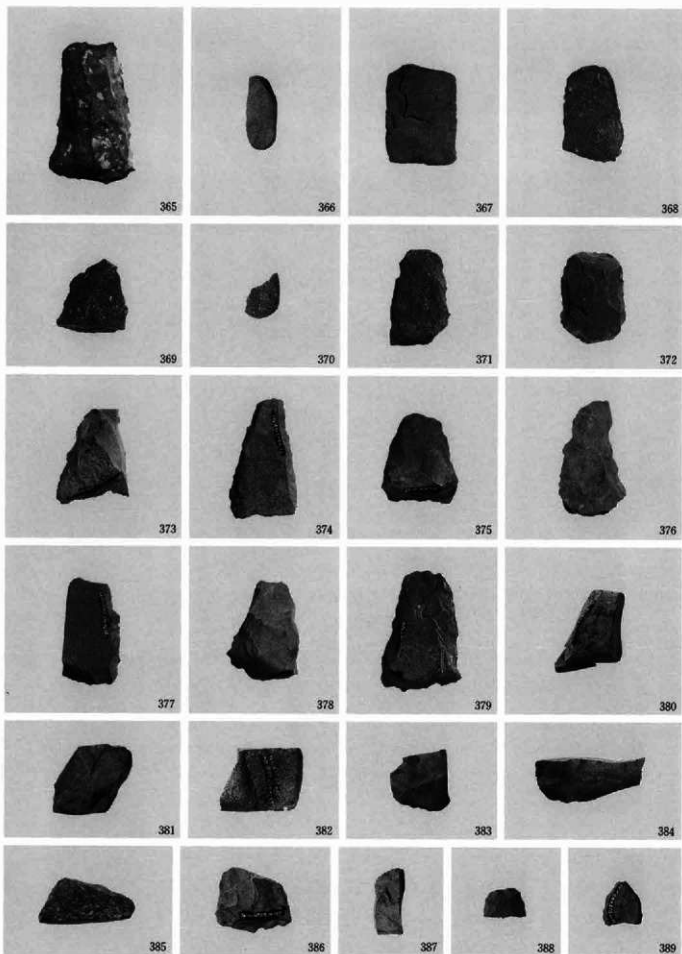
スタンプ形石器



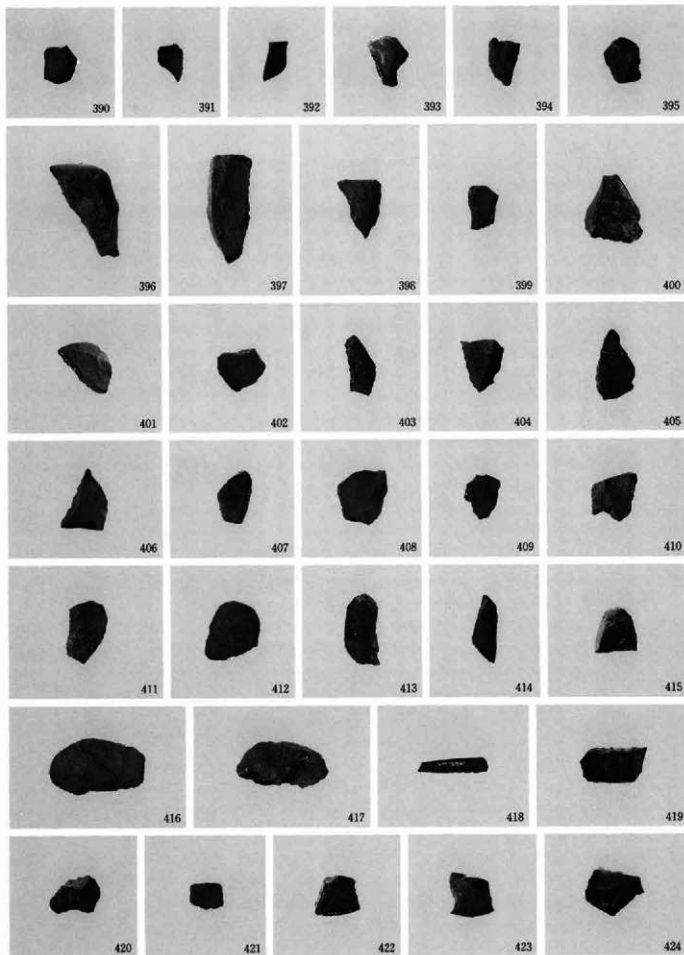
スタンプ形石器・敲石・加工痕ある剥片・使用痕ある剥片

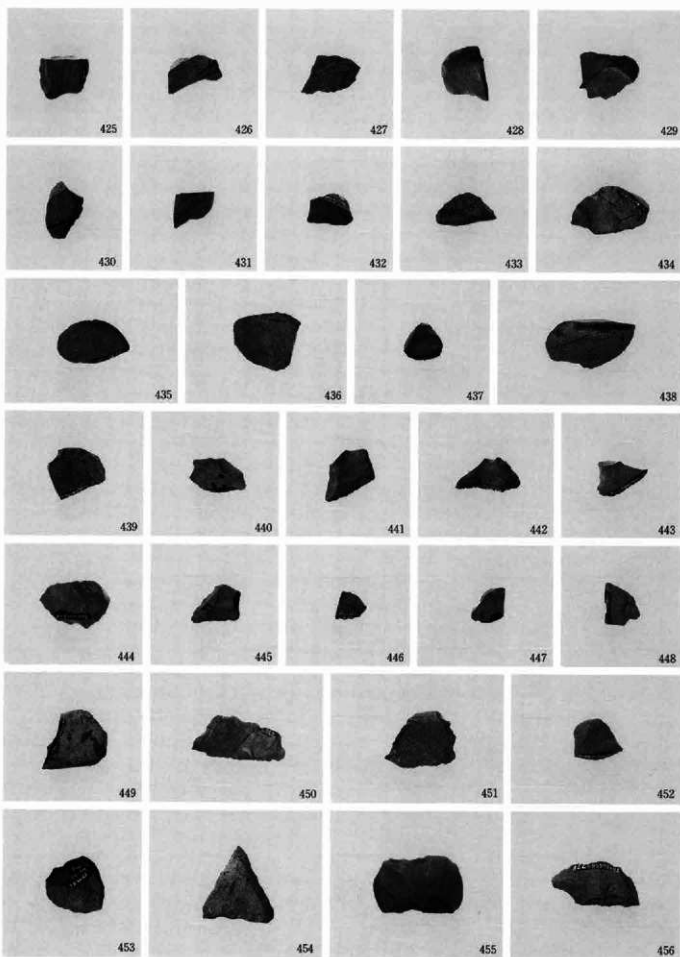


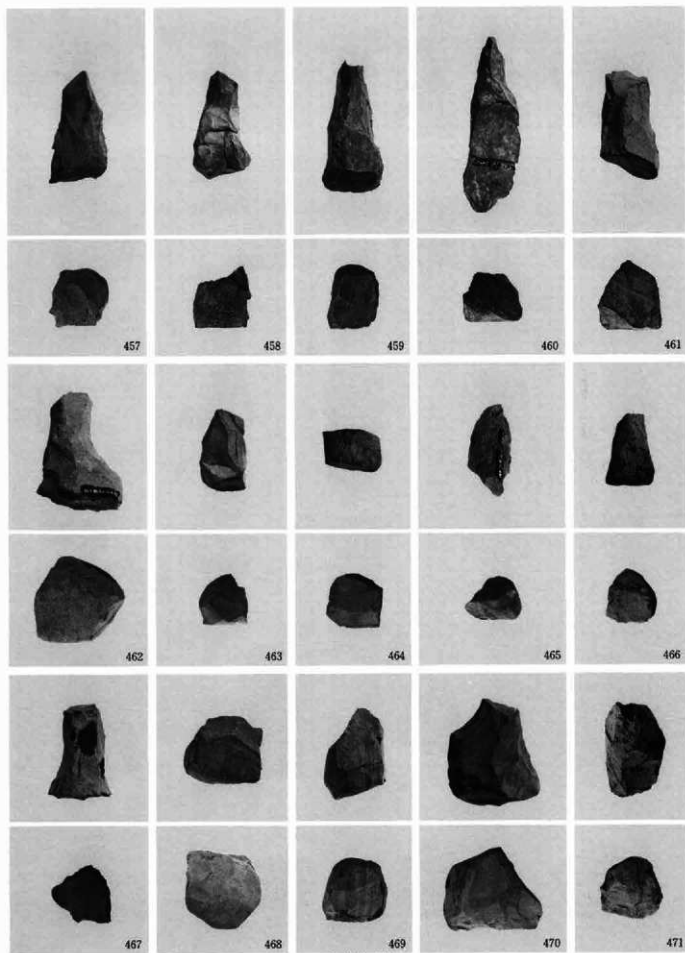
使用痕ある剝片・接合資料・凹石・嵌石・磨石・石皿・砥石



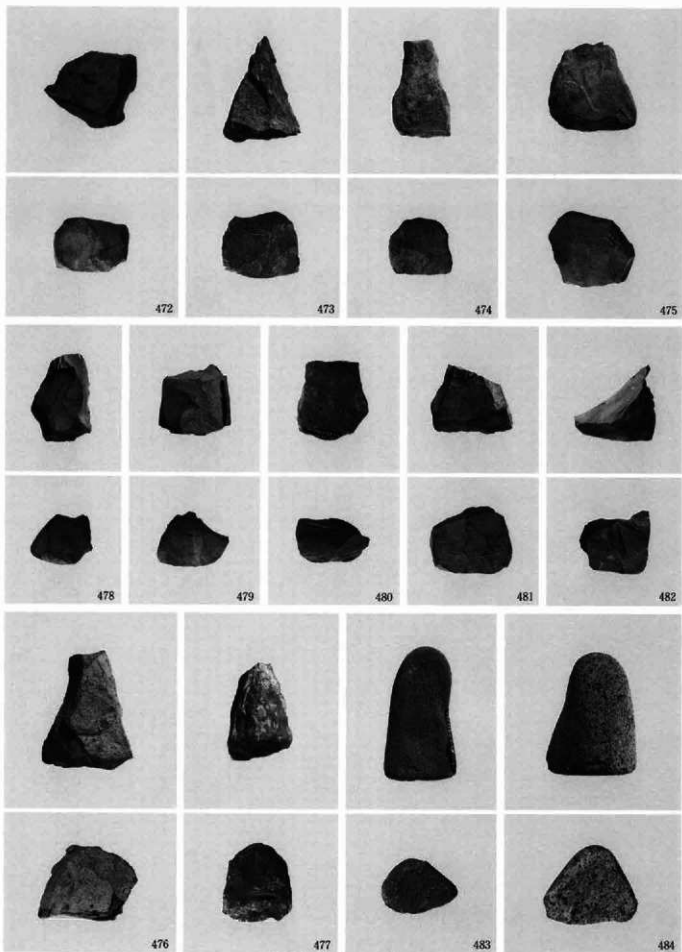
打製石斧・磨製鏃斧・片刃石器・礮器・石核・削器



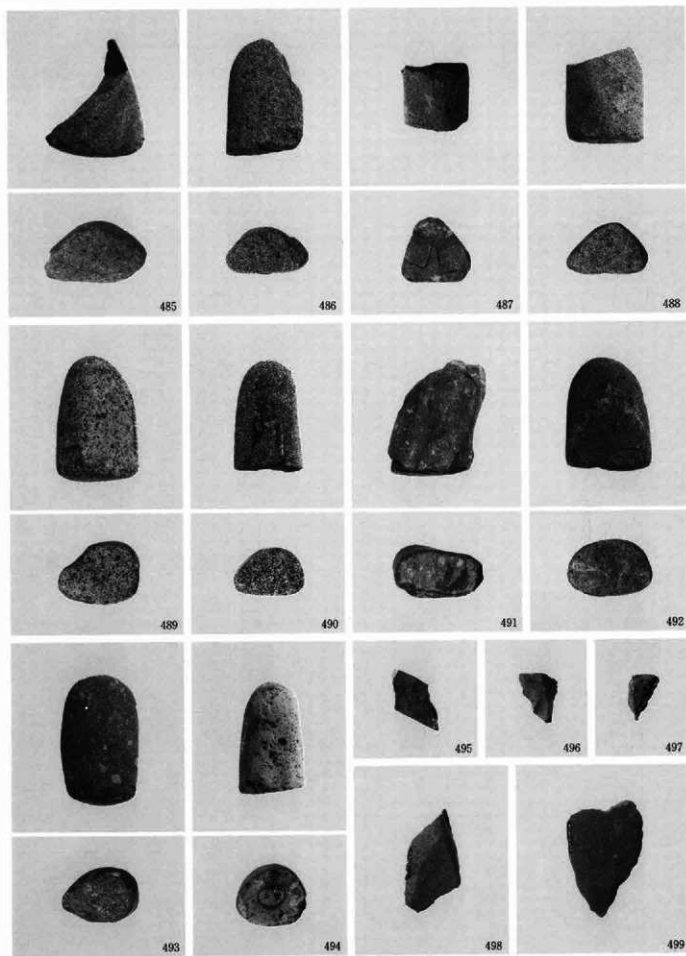




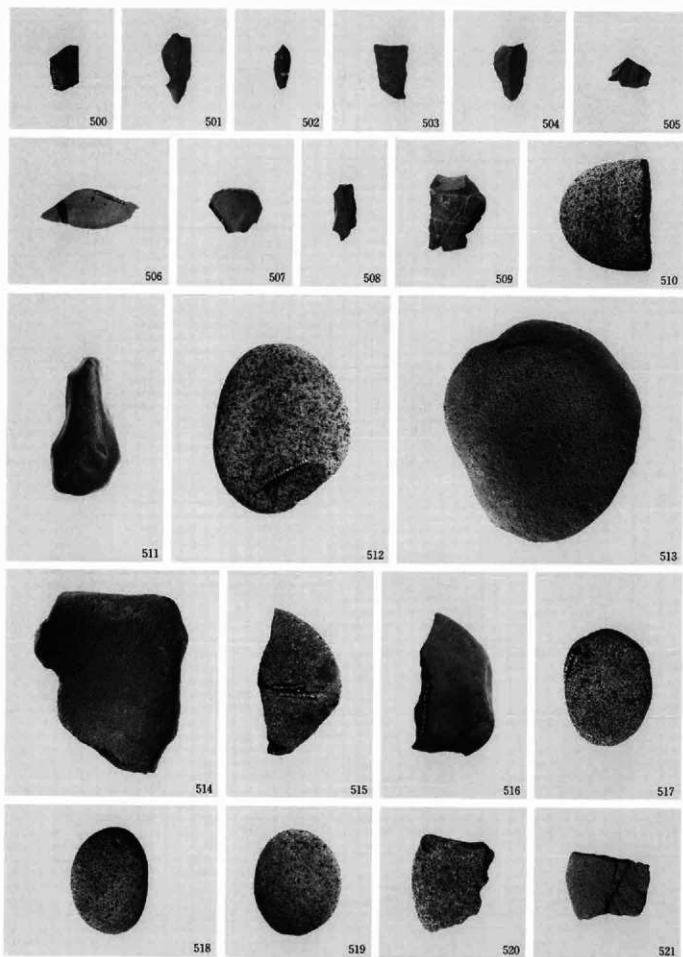
三角鎌形石器



三角錐形石器・スタンプ形石器



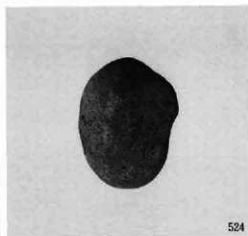
スタンプ形石器・加工痕ある剥片



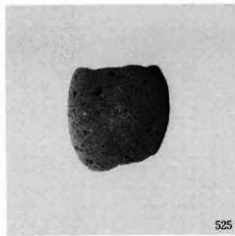
加工痕ある剥片・使用痕ある剥片・接合資料・凹石・蔽石・石皿・磨石



522



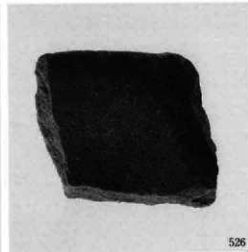
524



525



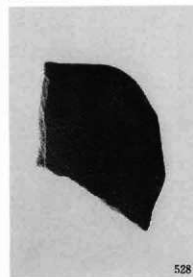
523



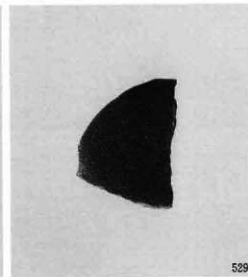
526



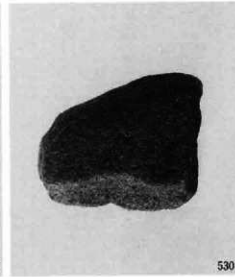
527



528



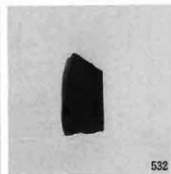
529



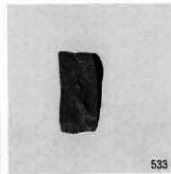
530



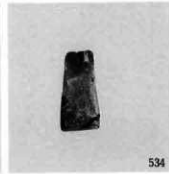
531



532

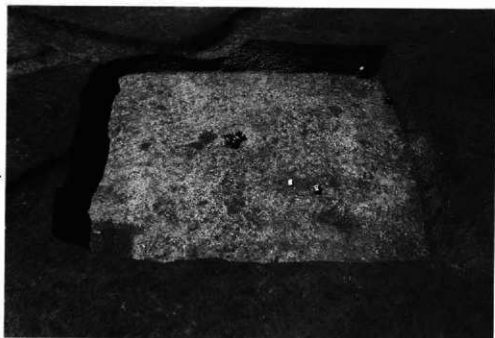


533



534

遺物出土状態 ▶



完掘状態 ◀



554



556



555



557



559



558



560



561



562



◀ 遺物出土状態



▶ 完掘状態



563



565



564



567



566



568



571



569



570



574



572



573



575

2号住居と出土遺物

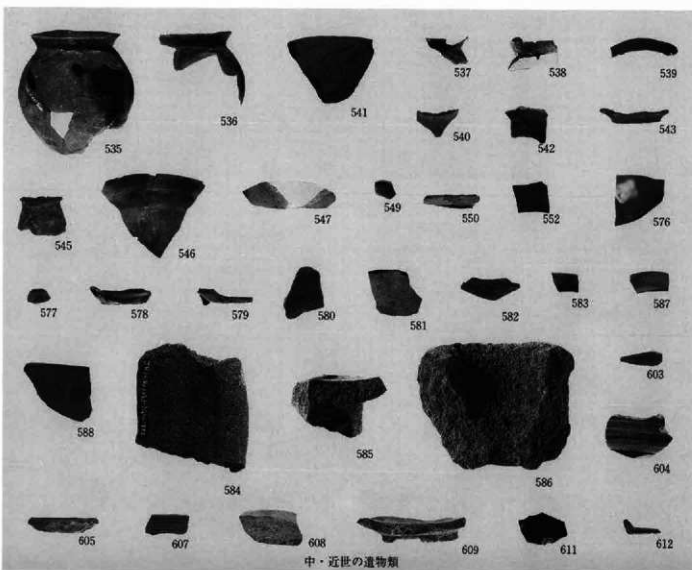
P.L. 24



中央の炉



炉状遺構



中・近世の遺物類



▲ IV区道路状遺構と1号住居

調査スナップ▶



IV区1号溝



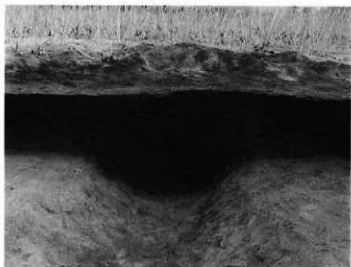
III区1号溝土層A



III区1号溝土層B



III区1号溝土層C



III区1号溝土層D



III区2号溝土層



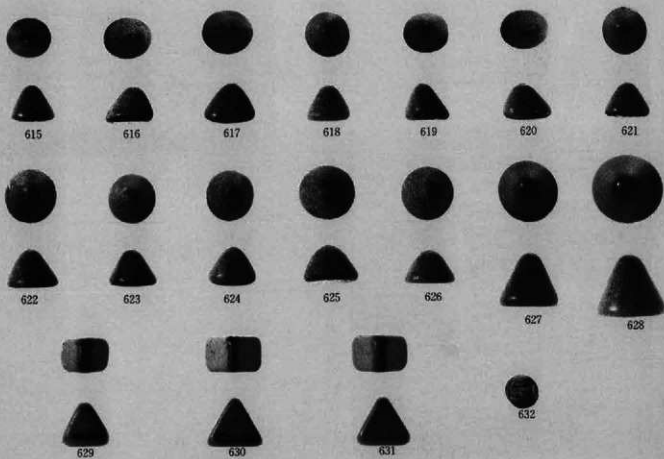
2号井戸



1号井戸

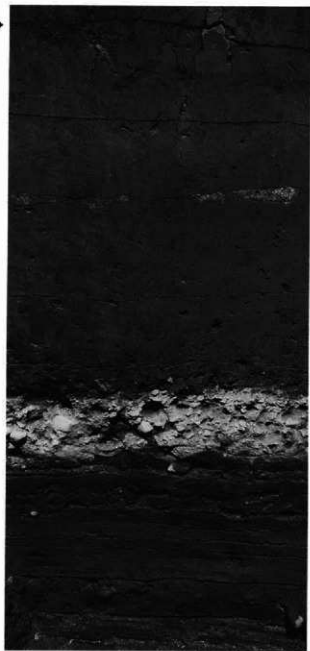


Ⅲ区調査状況



胸形・三角形・玉状製品

607 C グリッド土層断面 ▶



◀ 590 F グリッド土層断面

助群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第90集

三室坊主林遺跡

一般国道17号(上武道路)改築工事
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成元年7月15日 印刷

平成元年7月31日 発行

編集・発行／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北碓村大字下箱田784番地の2
電話 (0279) 52-2511(代表)

印刷／株式会社 前橋印刷所